
異世界からホームステイ？

滝底

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界からホームステイ？

【Zコード】

N8012V

【作者名】

滝底

【あらすじ】

庭に落ちてきた美形異世界人と女子大生（夏季休暇中）のある夏の攻防劇。……と見せかけて、無自覚にイチャついているとしか思えないお話。『異世界のかけら』から連載に移行しました。

一 夏 壁ではなくイキモノでした

実家に帰ると、見知らぬ外国人　いや、異世界人が居た

。

大学2年の夏、8月に入り暑さもいよいよ増して来た頃、私は約二ヶ月という長い夏休みを利用して田舎の実家に帰省することにした。都会のあまりの暑さから逃げたとも言つ。

ビルの建ち並ぶ都市は、日陰も多いがアスファルトや磨かれた窓からの照り返しも強い。鉄板の中に放り込まれたようだと思うのは、私がまだ都会に慣れない田舎者だからだろうか。

蝉は煩いけれど、緑が涼しげに木陰を作り、玄関や窓を全開にしても犯罪の欠片も起きそうにない実家が恋しい。エアコンの冷たさよりも風の涼に惹かれるのは、やっぱり私が田舎者だからだろうか。実家の縁側で団扇を片手にアイスを齧るのは、私にとつて外せない小さな夏のイベントだ（日常的過ぎるとか言わないで！）。齧るものはスイカになつたり桃になつたりする。汗だくで汁だくなのがいいよね。……。私だけ？

それに、暫く実家を離れていたことで、母があれやこれやと世話を焼いてくれるのも嬉しい。

この間無事に成人も迎えたので、今年は父と酒でも酌み交わそと秘かにお酒のお土産を用意してたりする（発想が男くさいとか言わないで！）。

受験に受かれば来年の春に晴れて高校生になる予定の弟が小うるさいのが玉に瑕だけれど、私は実家に帰るのが楽しみだった。

そして母の愛情に甘え、父との交流という名目でお酒を飲み、自堕落に休みを謳歌しようと思っていた私が、帰省した先で思いもよらないものに遭遇するとは誰が思うだろ？。

「ただいまーっ。お母さ 」

慣れた仕種で簾を払いのけて入った先、玄関には何故か見たこと
も無い白い壁が すだれ。

怪訝に思ったのは一瞬で、反射的に見上げた先で出合った“色”
に私はポカンと間抜けに口を開けて立ち尽くした。

「 は？」

白い肌、

白金の髪に、

同色の睫毛に縁取られた瞳は宵闇の藍あおで、

星屑みたいな銀の虹彩がいくつも瞬くように散つている。

銀河を凝縮したみたいな瞳だ。

少し節ふしのある鼻は過ぎない程度に鼻梁が高く、

その下に鎮座する唇は薄くも厚くもない。つまり最適な厚みって
こと。

それらのパーツを黄金率のように乗せた顔が、頭一つ分以上も上
にある。

その上、頬はファンデも付けていないのにきめ細かくさりと綺
麗だなんて。

私は一步半といつ至近距離にあつたソレに驚愕し、慌てて簾を押

し退けるようにして後退した。

え?
は?
え
えつ?

遮つていた壁が遠のき少しだけ開けた視界の隅に、熊のような虎のようなわけのわからない刺繡のついた草臥れた水色の手提げ袋が見える。巷で少し前から流行り出したエコバッグというやつだ。田舎では前から存在していたそれは、年季が入りすぎて薄汚れている。それを男はお綺麗な手にぶら提げていた。

いや、
待て。

似合わなさ過ぎるだろ？

しかも、よく見ればその金髪頭の着ているTシャツは父のもので、綺麗に筋肉の乗った身体に窮屈そうにぴったりと張り付いている。腹筋硬そう。って違う。

下に穿いているハーフパンツには見慣れない紐が。黒のハーフパンツには真新しい真っ白な紐が随分と映えている。どうやら上はパツツなのに、ウエストは緩々で、母が苦肉の策を弄したらしい。Tシャツやハーフパンツから覗く手足はすらりと長く、筋肉もしつかりとついているのに身長の対比の所為か細く見える。

何だろう、このイキモノ。

「姉ちゃん何やつてんの？」

私を自失から救つたのは弟の小生意気な声だつた。丁度いいところに……、つていやいや待て待て、何をそんなに冷静に！『何やつてんの？』はこっちの台詞だ。

まずはこのイキモノの説明をしる！ といつが、『おかえりなさい、お姉さま』と言え！ つて違うつ。

こんな不思議生命体、うちにほ居なかつたはずだぞ絶対に！弟よ！

首を傾げてこちらを見下ろしていたイキモノが何故か納得顔で頷いているのを横目に、私は高速で弟を手招く。手首が痛い。あ、ちなみにこの手招きは上から下へじゃなく、下から上へ、ね。アメリカンな感じで。どうでもいいか。

かなりの混乱状態になりながら、近寄ってきた弟を力一杯引き寄せる。『痛え！』とか聞こえたが、私の手招きスタイルよりもどうでもいい。

『ちよつと、孝太！ あのイキモノは何つー？』

数歩先で静かにこちらを見つめているイキモノを極力視界に入れないようにしながら、小声で弟を詰問する。引き寄せた弟が『姉ちゃん近い暑い痛い』とか言つてゐるが、私の手招きスタイルよりも（略。

怪現象を田の当たりにしたかのような私の様子に弟は溜息一つ（生意気な）。

「あー、アッシュだよ。アシユール……ヒヤカスバーラだつけ？

後半はきらきらしい不思議生命体に向かつて言つ。不思議生命体はこつくじと頷いた。日本語わかるのか。

すごいな勉強したのか、と驚く私を尻目に、弟はもっと私を驚愕に陥れることをポロッとサラッとアッサリ言い放つた。曰く。

「一週間くらい前に庭に落ちてきたんだ」

莫迦を言ふ。

一夏 現実なのにファンタジー

「アッシュ、異世界から来たらしいよ」

「我が弟君は、私から出来る限り離れようと上半身を引き、氣味にして（言つておくけど私が臭いとかじゃないから…）そんなことを宣つた。

その言葉を聞いて、私はすぐ納得した。

なるほどね。

まさかとは思つたけれど。

要するに、これが彼の有名な 、

“受験ノイローゼ”といつづですね。わかります。

そんなに受験が大変だったなんて。まだ半年以上あるのに……。
だからあれほど、日々の勉強を怠るなと言つたんだ、私は。サッカーバカリやつているからこういうことになる。今どき、スポーツ選手だって頭が良くないとやつていけないんだぞ。センスだけで活躍できるのは本当に才能がある人だけだ。日々の勉強から頭の回転を早くする努力というものをだな……つて、何の話だ。脱線しすぎた。説教染みたことを考えながら、私も孝太と同じように僅かに上半身を引いて受験苦という病に侵された弟の顔を半眼で見つめる。も

ちろん腕は離さないけど。逃がすもんか。正気に戻れ。

孝太は私の言いたいことを察したのか慌てたように言い募る。

「マジだつて！ 母さんに聞けばわかる！ いや、父さんの方がいいが、父さんが言えば姉ちゃんも信じるだろー！」

半ば叫ぶようにして言つた孝太の顔は必死だ。

どうやら弟の受験ノイローゼは重程度らしい。今現在も視界にチラつく金髪男を 本氣で 異世界人と言い、我が家の庭に落ちてきたのだと言つている。

かわいそうに。高校受験でそんなんじやあ、大学はどつするんだ、弟よ。大学受験の方がもつと大変なのに。

と言いつつ、まあ万が一にもあの頭の堅いお父さんが孝太の言つことを肯定したら、信じてやらないこともない。努力はしよう。有り得ないだろうけど。

「とにかく、一先ず中に入れよ、母さんも父さんも奥に居るし。アッシュ、買い物は後だ。姉ちゃん帰つて来ちやつたから、先に説明する」

帰つて“来ちやつた”とはどういう意味だ莫迦もん。いやそれより、仮にも一週間前に“落ちて来た”とかいう“異世界人”をお遣いに出すとか、うちの家族おかしくない？ おかしいよね？ まさか受験ノイローゼの弟を抱えて育児ノイ なわけないか。流石にね。

私が居間へ顔を出すと、父は趣味の盆栽の本を読み、母はお昼御

飯の支度をしていた。母は私の顔を見、後ろから黙つてついてきた金髪男を見、一言。

「あら、六花、^{むつか}帰つて来ちゃつたの」
「……」

私も一言言つてもいいだらうか。

帰つて“来ちゃつて”ごめんなさいね！

弟といい、母といい、何なんだ一体。正月以来久しぶりに見る娘（姉）の顔より、金髪男の方が大事なのか。確かに田の保養にはなるが、それよりもっと娘を歓迎して！“帰つて来ちゃつた”とか酷くない！？

かなりイジケた気分に陥りつつ、促されてテーブルにつく。母はもうすぐ御飯が出来るからと言つて台所に戻つてしまつた。

私は御飯の準備が整うまでの間に、父から事情を聞くことにした。

そして、父の話を要約するとこうだ。

“ある日突然、庭の上空2～3メートルほどのところに六が開き、そこから金髪男が落ちてきた。事情を聞いてみると、どうやら魔導とかなんとかでの移動時に座標を間違えたらしい。直に迎えが来るようなので、それまで面倒を見ることになった”

一通り説明を聞いた私は思つたよ。

何そのファンタジー。

普通に有り得ないでしょ。何でそれをうちの家族は簡単に受け入れちゃっているんだ。怪し過ぎるっていうのに。

しかも、怪しさを冗長するのは金髪男が日本語をわかることだ。どういう原理かはわからないが、聞き取りは出来て、でも話すことは出来ない。

じゃあ“魔導”云々とか、“直に迎えが来る”とかっていうのをどうやって聞いたのかといふと、金髪男が絵で説明してくれたらしい。

实物を見せてもらつたんだけど、これがまた妙にリアルで……、本気で上手すぎる。何処の絵描きさんですか？と思わず聞いてしまいたくなつたね。聞かなかつたけど。

それはそうと私はその無駄に丁寧に描かれた絵の中にいた、従者っぽい濃紺色の髪の毛の人気が気になつた。眼鏡を掛けていたんだけど、異世界とかいうところにも眼鏡というものは存在するんだね。ところでそのインテリ男がかなり私の好みなのだけど、迎えとはその濃紺髪の従者が来るのかね。こつちはしつかり聞いておいた。私的に重要なので。金髪男は首を傾げていたけど。どっちなんだ。はつきりしろこら。

私が見事な絵（主に濃紺髪の男）に見入つていると、父は笑いながら言った。

「まあ、異世界とは言え外国人が“ほーむすてい”に来たと思えぱいいんじやないか？」

……。

何そのイイ笑顔。

ホームステイくらい綺麗に発音しようよ。

私が頭の堅いはずの父の意外な柔軟性に驚いているうちに、母が居間へと料理を運んで来て家族プラス一の団欒のお昼御飯が始まった。

「アッシュ、今日のトマトはとっても甘いから食べてご覧」

「……」

「アシュール君、わさびはどうだ、君の世界にも似たものはあるのかい？」

「……」

「アッシュ、後でサッカーしようぜ」

「……」

いやいやちょっと待ちたまえよ、我が家族たち。金髪男はどれだけチヤホヤされているんだ。久しぶりに帰った娘の影が薄すぎる！そもそも、落ちて来て一週間という金髪男、馴染み過ぎじゃない？ あ。わさびでツーンとなつてゐる。ざまをみる。

母はせつせと金髪男の前に料理を差し出し、父は居間からお酒を勧め、弟は勉強についてやサッカーについてあーでもないこーでもないと喋り続けている。一々律儀に金髪男は反応を返しているが、何なんだろう、この和気藹々感は。

異世界人が庭に落ちてくるって、普通の出来事じゃないよね？ むしろ異世界とかいうものが存在することが奇跡だよね？ もつとこつ、戸惑いとかないの？ 金髪男は金髪男で何普通に和食とか美味しそうに食べてるの、外見に合わなさ過ぎる。

何よりも家族が何の違和感もなく受け入れているのが違和感あり

過ぎるよー。

私は納得いかない思いで悶々としたけれど、

とうとう。

「アシコールさん、お醤油取つて」

「どうもありがとう」

「」

「あ、これ？ 食べてみる？」

「」

「御飯とかとも合うんだけどねー。あ、種あるから気をつけてね」

「……。 ツツ！…！…？」

「アハハハ、酸っぱかった？ それ、梅干つて言つんだよ」

私はそつめんのつゆに梅干を入れるのが好きだ。しその葉とかもいいけど、やっぱここは梅干だね。そつめんを啜ったときに時々梅干の果肉が入ってきて、うひゅつ酸っぱ！ ってなるのが好きなの。あ、何の話かって？

いやね、アシユールさんがお醤油を取つてくれたときに私の手元を不思議そうに見ているから何かと思つたら、梅干を見ててね？ 和食中心の我が家でこの一週間のうちに一度も遭遇しなかつたのかと不思議に思つたんだけど、まあ偶々機会が無かつたのかもしれないし、折角だからと勧めてみたわけ。そしたらまあ、予想通りリアクションが面白いの何のつて！アハハハ。

いやいや、その恨めしそうな顔、堪らないね！（私は断じて“えす”じゃないよー）

ん？ それより私も家族のことなんて言えない、馴染み過ぎだ、つて？

……まあ、あれです。

私、すごく空気を読む子なんです。

どう考へても、既にアシユールさんはつちの家族にすっかり受け入れられているわけで。その家族が異世界だ庭の上空に穴だと胡散臭いことを言つていたとしても、アシユールさんという人物がここに存在することは事実だ。

最初はあまりに簡単に信用しているから、一瞬“洗脳”という言葉が頭を過ぎつたけど、よく考えてみたらそんなこと有り得なかつた。だつて、洗脳するなら“異世界”とか“庭の上空に穴”とか、そんな聞くからに怪しげな単語、真つ先に記憶から消すよね？ それでモツて、もつと尤もらしい理由を捏造するはずだもん。

そして、常識的に考へて有り得ないことを洗脳するでもなくすつかり信じ込ませるような技術を持つた人物を相手に、私がどう足搔いたところで事態が変わるかどうかは怪しい。何せ、堅物なはずの父に信用され、且つイイ笑顔まで引き出しちゃつた人なんだ、アシユールさんという人は。

我が家では一応、父とは絶対の存在なのである。父が灰色を白と言つたらそれは白に他ならず、快晴でも雨と言つたら雨なのだ。つまり、父がこの人は異世界人ですが面倒見ます、と言つたらそうするしか無いのである。

孝太の話なんて信用していなかつたけど、父がアシユールさんを受け入れていて以上は、私も右に倣えというわけだ。

だから、ここは場の空氣に流されてみよつと思つたのです。場というよりも、父の周りの空氣だけだ。

まあ、万が一にも彼が私の家族に危害を加えるような怪しい行動を取れば、私だつて死ぬ氣で抗つてみせますとも。家族を守るために。愛でもつて！ 勇気を持つて！ アーン、パーんチッ！

結局のところ、害が無いなりどうでもいいかなあ、と。そう思つたのは否定できないけど。この親にしてこの子あり、的な部分が無いとは言えないけれども。いやいや、田舎者は心が広いんですよ。

そんなわけで、私と家族とプラス一の不思議な夏休みは始まつたのでした。

「あ、お母さん、ここにお刺身入れてー。うん、それとそれー」

1

「お刺身」

16

つ
！

「ああ、もういいや。なんか色々な汁が玉ねぎ

少し目を離した隙に、何故か私の梅干入りのめんつゆが大量のわさび入りめんつゆに入れ替わっていた。

私は海苔を入れるのも好きで梅干入りのめんつゆにも大量に入れ
る。わさび入りのめんつゆにも同じだけ海苔が浮いていたから、つ
ゆの色のおかしさに気づかず思いつきりそうめんを啜ってしまった。
……いやちょっと、マジで。鼻痛い。

ヒーー言いながら、何とか落ち着いたとき涙目のまま周りを見渡すと、アシユールさんが口元を押さえているのが目に映った。目が笑つてゐる。さらに手元には、わさびのチューインガム。隠すことなく爆笑していた。

私は空氣を読んだ。いや、察したね。

孝太め！ アシユールさんに入れ知恵したな！！！

そのとき私は本氣で弟を締めようと決めた。孝太、後で裏庭に来い。来なかつたら潰す。来ても潰すけど。何を、とは言わないが。ナニを、だ。

大体、私がアシユールさんに梅干を勧めたときも黙つて見ていたくせに！ 同罪じやないの！？

しかも、アシユールさんもアシユールさんだ！！！ そういうキャラだつたの、この人！？ 虫も殺さなそうな綺麗な顔して……！ 仮にもか弱い乙女に仕返しとか……紳士にあらず！

このとき、私のアシユールに対する態度の指向性は決まった。もう“さん”なんかいらないね。呼び捨てで十分だ、アシユール！ 容赦しねえ！ ……あ。か弱い乙女としたことが、ちょっと言葉遣いが。とにかく。

覚悟しろよ！

……。

いやいや。てへ。

「暑い！ だがそれも良しッ！ー！」

唐突に叫んだら、 “何を言つてるんだコイツは” 的な白い目で見られてしまった。金髪アシユールに。まあ、当然と言えば当然だけど。

でもそんな冷たい目など私は気にしない。だって、

直射日光！

緑！

蝉！

汗だく！

温い水！

まさに夏！

みたいな、この状況が嬉しくてたまらないんだもの。

みんなね、夏の暑さを嫌い過ぎだと思うの。もっと楽しめばいいのに。汗だつて水で流せば済む話。仕事をしていたらそろはいかないのもわかるけどね。

私はダレるくらいに暑い中で、ぐつたりしてるのが好き。汗だくで夏のイベントを楽しんで、お風呂に入つてさっぱりする瞬間が好き。夏の子だから。

夏は何故か滾るものがあるのだ。汗湧き肉踊る、みたいな？違つか。はは。

ぐつたりしているのが好きとは言つたけど、今実際にぐつたり夏を満喫しているかというと、そういうわけでもない。

何故かお昼御飯の後、アッシュが買い物に行き損ねたのは私の所為だから一緒に来なさい、と母に言われ（私悪くないよね？偶の帰省をした娘に酷くない？）、アシユールを引き連れて、徒步20分ほどのところにあるスーパーに向かっているんだ。

結構距離があるから自転車でも良かつたんだけど、久々の実家周辺でもあるし、暑さに負けそうになる中でスポーツドリンク片手に歩くのもいいかな、と思つたんだ。完全に私の都合だけど、アシユールは黙つて隣を歩いている。……まあ、日本語喋れないから黙つてるだけかもだけど、たとえ歩くのが嫌でもそんなの私は知らん。ぶつちやけ、今は家族を横取りされたような気分もあるし、お昼のわさびめんつゆ事件をしつかり根に持つてるので、ざまあみろ、としか言えない。私、性格悪い子なんで。

それに、そもそもアシユール自転車乗れないしね。

「あー、暑い。暑すぎて汗からびそつ。土から出てきたミミズのようだ。だがそれも良しッ！ いや、それは良くないか」

ジリジリと照りつける太陽と玉のよつに浮かぶ汗にニヤニヤしていたら、アシユールが再び頭の可哀相な子を見るよつな田でこちらを見てきた。何だコノヤロウ、と視線で対抗してやれば、それを見たアシユールはひょいと片眉を上げて肩を竦め、また視線を前に戻した。一々嫌味なほどに仕種が様になつてゐるじゃないか。気に入らん。

それにこの人、意外に表情豊かだ。田は口ほどにものを言つとは言つけれど、アシユールは日本語を喋れなくても、表情を見れば十分に何を言いたいかわかる。会つてまだほんの数時間ほどだけど、何故かおおよその意思の疎通は出来ていた。嬉しいはない。

それにもしても、白い目を隠すことなく乙女に向けるのはどうかど。

私は至つて正常だぞ。君は見るからにこの田舎では異常な存在だけだな。

実家から10分ほど歩くと、ちょっとした川がある。幅は十メートルくらいで、深さは私の腰くらいまでかな。流れが緩やかで水も綺麗だから、絶好の涼ポイントだ。

ということで、当然、寄るよね。寄つちやつよねー。

私が急に脇道へ逸れると、水色のHゴバック的な、実はただの手提げという似合わなさすざる袋を片手にアシユールが慌てて追い駆けてきた。

「ちよつと寄り道しよう」

振り返つて満面の笑顔で言つと、立ち止まつたアシユールは呆れ顔になつて溜息まで吐きやがつた。何だよ、ちょっとくらいの寄り道はオッケーでしょ？ 融通を利かせようよ、融通を。

緩い坂を下つて田的の川へ辿り着く。水辺だからやつぱり少し空気がひんやりとして感じる。水の流れるささやかな音も、照りつける太陽の中で涼を呼ぶ。最高だ。

川べりへ行き、一も二もなくサンダルを脱ぎ捨てると直ぐに足を水に浸した。歩いて火照つた足先が、冷たい川水で冷やされて本当に気持ちいい。

ホツと息を吐いてペットボトルのドリンクを飲んでいると、ジャリッと隣で細かな石の擦れる音がした。早足で坂を下りてきた私と違いアシユールはゆつたり歩いていたから、今頃追いついてきたい。

私は隣で突つ立っているアシュールを見上げる。白金色の髪が夏の日差しを反射して眩しい。10分も歩いているから当然アシュールも汗だくなんだけれど、何故か暑苦しさの欠片も無く涼しげに見える不思議。

ハリウッドの俳優とか、有名なスポーツ選手とか、カッコイイ外人さんは山ほどいると思うけど、そういう人たちはまた違う綺麗さがアシュールにはある。少なくとも私が今まで見た中では、群衆を抜いて整った顔立ちをしている。

だからこそ、大学でだつて外人さんなんて沢山見ていた私が、アシュールを見たときは本当に驚いたんだ。それを思うと、異世界人だという理解し難い事実も何となく頷いてもいいような気が……いやいや、私くらいいは正気を保たないといかんな。

「……」

「……」

眩しいアシュールをなんとなくぼんやりと眺めていた私だけど、川をじっと見つめるヤツを見ていて不意にいいことを思いついた。

煌く水面。

煌く金髪。

やつちゃう？ やつぱりここはやつちゃうとこだよね？

にやける顔を隠しながら私は川から足を上げ、しゃがみ直した。直ぐ隣にあつたアシュールの足をペシペシと叩いて、川の中を指差す。どうでもいいけど脛毛^{すね}も金色なんだね。

促されて私の仕種を見たアシュールはとつと、黙つて同じように川べりにしゃがみ込んだ。それから指差す方へと視線を投げる。私は首を傾げているヤツの後ろへとこっそりと周り。

ドンッ！！

「 ッー！」

バシャ ンツツ！

声を上げる間もなく盛大な水しぶきを上げ、落ちた。 当然、アシユールが。

「あはははははははははははははははー！」

大爆笑である。 当然、私が。

あまりの豪快なダイブに川べりでお腹を抱えて笑っていると、ほどなくしてアシユールがしかめつ面で川から上がってきた。全身ずぶ濡れだ。白金の髪も、お父さんのTシャツもぴつたりと肌に張り付いている。それでも絵になるんだから、小癩なヤツである。どこかに隙は無いものか。

アシユールは随分と不機嫌顔だ。川に突き落とされればそれも仕方ないんだろうけど、多少深さのある川だから怪我はしていないだろう。

いやあ、それにしても可笑しい。笑える。あんなに簡単に騙されるなんて。意外と素直だね、アシユール。

そして私、イイ仕事したわ。惜しむらくは、アシユールが背中を押された瞬間の焦る顔が見られなかつたことくらいかな。きっと切れ長の目もまん丸になつていたことだろう。

いやはや、見事な前転ダイブであつた。

満足顔でアシユールを見ていたら、水分を含んで少し色の増した白金の髪を鬱陶しげに搔きあげていたアシユールが、スッとこちら

に鋭い視線を投げてきた。

な、なんだねその怖い顔は。

じりじりと後ずさる私に、じりじりと距離をつめるアシユール。

何をする気だ、やめてよ？ やめなさいったら！

慌てて身を翻そうとしたけれど、間に合わず。

「ツ！…！」

ドッパアアン　ツ！…！」

一気に間合いをつめたアシユールに俵担ぎにされた私は、そのまま川へと放り投げられた。

いやマジで大人げないよ、アシユール！ 乙女に俵担ぎとか、投げ飛ばすとか……許すまじ！！

そうして、私とアシユールの川での攻防はしばらく続いた。

私は20歳です。嘘じやありません。アシユールの年齢は知らな
いけど。

「……」

……正直、やりすぎたかな、とは思つ。たぶんアシユールも同じことを思つてる。自分の姿を見下ろして渋い顔をしてるから。

かなりの時間、水の掛け合いやら沈め合いやらをしていたので、いまや私もアシユールも頭の天辺から足の先まで満遍なくぐっしょりびっしょり濡れネズミだ。対抗意識を燃やしすぎた。私としたことが。

ああホント、携帯を忘れてきていてよかつたよ。もし持つて来ていたら今頃ただの四角い物体になつていた。あ、ちなみに、お財布の入つたエコバッグは川べりに置いてた（といつかアシユールがダブするときに放り出した）から無事だつたよ。

それにしてもどうしたものか。

よく考えると……いや、よく考えなくともこれからスーパーへ行く予定だつたのに、こんな姿じや流石にお店の中に入れない。常識的に考えて、非常識的すぎるもんね。

夏だから乾かそうと思えばあつといつ間に乾くだろうけど、やつぱり多少、川の生臭さがある気がする。それで食品のお店に入るのは……ねえ？

こんな状態なのがアシユールだけなら、お店の外でちょっと待つててもらえばいいだけだったのに、アシユールが大人気なく仕返し

なんてしていくから！ そうだ、全てはアシユールの所為！

とにかく。……面倒だけど、やつぱり一度家に戻るしかないかなあ。でも手ぶらで帰つたらお母さんにはいつ 酷く叱られるだらうなあ。

そんなことを徒然と川遊びでちよつと体力を使いすぎた私がぼつと考へていると、

べ
つ

「 わふ」

突然頭の上に何かが降つて来たもんだから、私は慌てた。得体の知らないものに焦りつつ、急いで顔から引き剥がし目の前に広げてみる。

それは白いTシャツだった。……湿つてゐる。

視線を上げると、目の前には上半身裸のアシユールが。一瞬、何だコイツ頭おかしくなつたか？ とか思つてしまつたけど、今私が手にしているモノがアシユールが着ていたお父さんのTシャツだと直ぐに気づいた。コレを着る、ということらしい。……でも何で？ よく見ると何か微妙にアシユールの耳が赤いような。耳の淵辺りが。それに、すごくばつの悪そうな顔をしてゐる。

そっぽを向いているアシユールのそんな横顔を見て、嫌な予感に自分の姿を見下ろした私は、Tシャツが投げて寄越された理由を理解した。

……。まあ、うん、アレだ。私、完全に下着が透けちやつておりまして……。

川の中では全く気がつかなかつた。でも着ていたのは淡い桃色のパフスリーブTシャツだったものだから、そりやあ濡れればブラも透けるよね……。

流石にコレは私でもちょっと恥ずかしい。

私は慌ててアシユールに渡されたTシャツを着た。一応、固く絞つてくれたみたいで、アシユールのTシャツはそれほど肌に張り付くこともなかつた。

ああああ、それにしても恥ずかしい！ せつかく水に浸かつて下がつた体温も、今ので俄然上昇した気がする。

「……。 - - - - - 」

この恥ずかしさをどうしたものかとちよつと氣まずい思いでいると、アシユールが何かを呟いた。視線を向けると、眉尻を下げて困つたように微苦笑するアシユールの顔。

さつきの呟きはたぶん、“ごめんなさい、六花さま、私が全面的に悪かつたです。お許しを”とか何とか言つたんだと思つ。……。違うか。あはは。

でも申し訳ないと思つてくれてるのは間違いないと思うんだ。だからここは私も大人にならなきゃいけない。意図せぬシースルーポロは忘れようではないか。

「気にしなくていいよ。私もちよつとふざけ過ぎたし。それよりちよつと涼しくなつたしよかつたよ。

……とりあえず、このままも何だから一度家に帰ろ」

いやホント、何事も遣り過ぎつてよくないよね。……ははは。私が乾いた笑いを浮かべていると、アシユールも一つ苦笑を零した。お互い様ということだ。

それからアシユールは川べりに置きっぱなしになつていたエコバッグを拾い上げた。少しだけぎこちなく歩き出したアシユールの後を、私も黙つて続く。なんかちよつと、今は隣を歩くのが恥ずかし

い。だからこいつそり息を潜めて後ろを歩くことにした。

俯き加減に歩いていた私だけど、ふと視線を上げたところで田に飛び込んで来たものに、ハッとした。

アシユールの背中に細かな擦り傷が出来ている。よく見ると腕にも。どう見てもそれは真新しい傷で、明らかにさつきの度の過ぎた川遊びが原因だとわかる。

そんなに危ない場所だつただろうか。私の身体には傷なんてほとんど出来てない。よく探せばあるだろうけど、傷をこさえている私自身が気づかないほどそれやかなものってことだ。

そのことに気づいて、一瞬後には呆然としてしまう。

私はただ、対抗心とかちょっとしたヤキモチで何も考えずに応戦していただけなのに、たぶんアシユールはちゃんと私が怪我をしないように手加減をしてくれていたんだ。

アシユールのことを大人気ないとか思つていたけど、遊びの範囲を脱さずに済んだのは偏にアシユールの加減のお陰だつた。私は、お互いが子供みたいに張り合つてているという気持ちでいたのに、アシユールは私よりずっと冷静に考えながら対応していたんだ。

つまり、せつきの私つて、アシユールに遊んでもらつていたようなもの……？

ああ、なんか私今、下着が透けていたときよりずっと恥ずかしいかも……。

アシユールの後ろを歩きながら、急激に顔に熱が集まるのを感じた。そして、アシユールの白い背中に浮かぶ小さな赤い傷を見て、家に帰つたらちゃんと消毒をしてあげようと思つた。

六花 騙されるな、私！

「六花、あなたがまたアッシュに悪戯したんでしょう！」

急いで家に戻ると、帰つて来た私たち二人を交互に見たお母さんは直ぐに怒り出した。

私はそれを俯き加減で聞きながら、ムツとする。
確かに私が初めに手を出したんだけど、なんかさ、……どうして頭ごなし？

アシユールが発端かもしれないとは思わないの？ アシユールにも原因があるとか、考えないわけ？

決め付け、よくない。まあ、今回は当たつてるけど。

「まったく、お遣い頼んだのに、寄り道して買い物もせずに帰つて来るなんて！ アッシュは異世界人だけどちゃんと一人でお遣いできるのよ！？」

それなのにあなたは何！？ とか、顔が怖いです、お母さん……。般若もかくやだし。

「どうか、アシユールはまだこっちの世界に来て一週間とか言ったのに、今日が“初めてのお遣い”じゃないんだ……？ 一人でお遣いできるって、そういうことだよね？」

それって見ようによつては、アシユールが扱き使われてるつてこと？ 慣れない世界で一人買い物とか……。同情しちゃいそう。

もしかして、実は掃除や洗濯もさせられてたり？ ……何それ、

何でシンデレラ？

そんなことを現実逃避気味に考えている間にも、お母さんはガミガミとお怒りだ。完全にお説教モードに入ってしまっている。その表情たるや。阿修羅もかくや。

とはいえ私も自分の非は認めているので、初めは黙つて聞いていよいよと思つたんだけど……。お母さんのお説教は何せ長い。全身びしょびしょだし、出来れば着替えてからにして欲しいな……。

ここは私も意地悪な姉役として（アシユールの方が私より年上に見えるけど）、シンデレラを盾に……！ そう思つた私が、どうとかしてくれ、と縋るよつに隣に居たアシユールを見ると……。

…… フイッ

……。

ちよつと、何で視線を逸らすのかな、アシユールさんよ？

「いら六花、聞いてるの！？」

アシユールの驚きの仕種にポカンとしていたら、またお母さんに怒られた。

シンデレラ使えねえ！

「あなたはいつもいつも！ 都合の悪いことを後回しじよつとするのは駄目と言つているでしょー！？ どうせ今だつて“お説教は後にしてよー”とか思つてるんじょー！？ お母さんはお見通しですからね！」

いえ違います、ウチに来たシンデレラの有用性の無さに驚いていました。……とは流石に言えない。

もう、勘弁してよ……。とりあえず、軽くシャワー浴びて直ぐに買い物行くからさー。お説教はその後だ。つ！……。お母さん、流石です……。

言つた通りの思考を辿つてしまつた自分に秘かに心の中で打ちひしがれているとは知らず、お母さんはむしろヒートアップしていつてるみたいだ。何だか声が大きくなつたような。

「いくらしばらく家に帰つてなかつたとは言え異世界人のアッシュよりあなたの方がこの辺りのことも生活にも慣れているんだから、子供みたいなことしていいでしゃんとお世話を上げなきやいけないつて言つのに！」

そもそも……。ああ、ごめんなさいね、アッシュ。貴方は悪くないから、気にしなくていいのよ？ 先にお風呂に入つて来なさい。直ぐに着替えを持つて行つてあげるからね」「

つて、ちょっと待つた！ 何故にアシユールに責任は無いことになつてゐるんだ！ むしろアシユールがやり返して来なければ今の惨状は無いんだつてば！

しかも先に解放するとか……！ 私の方が女の子で、長時間全身

ずぶ濡れじゃ身体に良くないでしょー！？

「おかーーー！」

抗議しようとしたのに、それを察したお母さんの鋭い視線で捻じ伏せられてしまつた。その視線の鋭さといったら、仁王像もかくや。しかし発言もさせてもらえないつて……私つて可哀相。

可哀相な私に救済を！

私もなんとか解放して欲しい一心で、もう一度アシユールに視線を向ける。アシユールが言えばお母さんも折れてくれるだろ？ シンデレラ、今度こそ助ける。

眼力を込めて見つめたのに、そして目が合つたといつのにつけ。アシユールは視線を逸らしはしなかつたものの、今度は感じの悪い片頬笑いを一瞬浮かべた。

何その顔。

明らかに小馬鹿にしたよね！？

鼻で笑つたよね！？？

フツとか聞こえた気がした！

この継子！

使えないシンデレラめ！

いやむしろあんたこそシンデレラの姉だよー

私こそシンデレラだ！

王子様は何処！？？

かぼちゃの馬車持つて来い！？！

ああもう、やつをちよつとヤツを見直した私の純粋な心を返して欲しい。手当てもしてあげようと思った私の優しい気持ちを踏み躡るとは……！ 繊細な硝子のハートが砕け散つたよ。嘘じやない。

まあ頑張れ。みたいな顔をするとはどうこうだ、このやうー。

しかも、それからアシユールは未だに私へのお説教を続けているお母さんの脇を通り抜けた後、一度振り返つてにつこり。私に向かい軽く手を振つて去つて行つた。もちろんお母さんには見えない位置だ。

……。

マジで。

ガチで。

私アイツちょー嫌い！！！

六花 騙されるな、私！（後書き）

近づいたはずの距離が倍速で遠ざかりました。おかしい。こんなはずでは。

七夏 ハイスペックなシンゲン

翌朝、私は近所のラジオ体操に全力で参加した。
夏といえばラジオ体操でしょ！

あーたーらしい朝が来た
それ、いさつ、にっ、さんつ！

え？ ラジオ体操は小学生のイベントだつて？
莫迦を言わないように。

ラジオ体操とは、老若男女問わず身体にいいことの代名詞でしょ。
アレ、全力でやると本気ですっきりするからね。って言つても、
私は夏しかやらなければ。だって、ラジオ体操は夏にやつてこそ、
でしょ？ 他の季節にやつても面白くないもの。

とにかくそんな感じで朝から夏のイベントを満喫した私は汗だく
になつた。汗だくだけどすつきりした気持ちで家に帰り、直ぐにシ
ヤワーを浴びた。しつかり汗を掻いた後のシャワーは最高の瞬間で
あつた。うむ。

もちろんヤツとの“お風呂でバッタリ”イベントなんてありま
せんでしたとも。

しつかり『使用中！』という殴り書きの紙を扉に貼り付けてお
たので。そういうところは抜かりないのが私だ。

うつかりシースルー事件どころか、はらりバスタオル事件が起き
たなんてことになつたら、本気で笑えないしね。

……。

あれ？ ヒュウアシユールって、字は読めるの？ 読めなかつたら意味なくない！？

うわあ！ 今さら気づいても遅いけど、今度ちゃんと確認しなくちゃ！

昨日嫌いだということを再確認した件のアシユールは、私が全力ラジオ体操をしている間、お母さんの朝食の準備を手伝っていたらしい。

買い物の次は料理？ 娘の私でさえ実家ではやらないっていうのに。あの人、本当にシンデレラなんじゃないの？ うちに暖炉はないぞ。

午前7時過ぎ、私は受験のために遅くまで勉強していたらしい弟を叩き起こし（比喩じゃないよ）、食卓についた。

孝太め、7時になつても起きて来ないなんて、夏休みだからって気が緩みすぎじゃない？

受験勉強のときこそ規則正しい生活がものを言いつと思つんだよね。私が大学受験のときにはきつかり午前0時には就寝し、6時に起きるという生活をしていた。規則正しい生活つて、頭の起動を早くなる気がする。集中して勉強するには、朝から晩までびつちりより、きちんと休憩をとつてやつた方が効率もあがるし。

まあでもその辺は人それぞれのスタンスがあるから、あまり口出しそうとは思わないけどね。

ああ、孝太の所為で脱線しまくった。それより御飯、御飯！

食卓につくと、白い御飯とお味噌汁、焼き魚などといつ完全なる和食が綺麗に並べられていた。心躍る朝食だ。いいよね、和食。全力ラジオ体操で一汗搔いた私はお腹もペコペコで、合掌すると

早々に食べ始めた。

「 美味し! 」

アジの塩焼きを突きつつ、至福の時間を過ごす。

実家つて黙つても御飯が出てくるからいいよね!

どうしても自炊をさぼつてしまふ一人暮らしを一年半も続けると、本当に実家の有り難味がわかる。お母さんつて偉大だ。般若や阿修羅や仁王の顔を見せて、偉大だ。……うん。

美味しい御飯を作ってくれるお母さんに心中で感謝しながら、インゲンと「ママの和え物に箸を伸ばす。

……ん?

……何だか視線を感じるんだけど。

和え物を掴む前にちらりと視線を上げると、そこには「ちらりをじー」と見つめるアシユールがいた。

何ガン飛ばしてんだこんにゃうめ。

あ、違つた。

何を「」覧になつているのかしら、シンデレラ?

昨日の一件を「」まだに根に持つてゐる私が満面の嘘笑いでにっこり笑つてやると、目が合つたはずのアシユールは何も言わずにフイツと視線を逸らした。

ちょうど?

それはあれかい？ 昨日の再現かい？
次は片頬笑いでも披露してくれるって？
ついでに笑顔で手も振ってくれちゃったり？

嬉しくないからやめてよね！

嘘の笑顔さえ引き攣らせる私を余所に、アシユールはまた淡々と自分の食事に戻つていった。

ホント、何だつたの？

.....。

まさか、今度は和え物に「コマの変わりにからじが投入されているとかじやないよね！？」

私は慌てて周りを見渡した。

よし。

孝太はまだ寝惚けてるし、入れ知恵は無理だな。

「六花、何をしているの？ また変な事考えているんじゃあ

和え物に箸を伸ばしたまま少しばかり拳動不審な動きをした私を、怪訝に思つたらしいお母さんが窘めるような声で言つて来る。

いや、私いまは何も悪いことしていませんけど。濡れ衣、よくない。

唇を尖らせる私を余所に、お母さんは何かに気づいたように言つた。

「ああ、それ。今日の和え物は、アッショウが作ったのよ～。本当、アッショウは呑み込みが早くて

なるほど。

これ、アシユールが作つたんだ。

どおりで穴が開くほどこっちは見てくるわけだよ。

自分の作ったものの反応を気にするなんて、アシユールも案外可愛いところがあるじゃないの。

ちょっと上から目線でそんなことを思いながら、お母さんのアシユールべた褒め徒然話をスルーしつつ、和え物を口に運んだ。

うん、中々美味しい。

簡単な料理だからそつそつ失敗もしないだろうけれど、どうもお母さんが話しこけている内容をちょっとだけ拾うと、アシユールは料理 자체が初めて、らしい。それに上出来だよね。いいところは素直に褒めるのが私（嘘っぽいとか言わないで）。とにかくことだ。

「美味しいじゃん」

アシユールを見て言えば、何となくホッとしたような、照れたような反応が帰つて来た。

あれだね、こんな綺麗な人に、こんなこと思つちゃいけないんだろつけど。

……ちょっと気持ち悪い。

いやいや、私の心の眼がそう見せてているだけだとは思つよ？一般的には萌える反応なんじゃないかな。相変わらず日焼け知らずで肌は白く肌理細かいし、銀河の瞳は吸い込まれそうな深い色だし。これだけ見田麗しい男が照れてたら、歓喜の悲鳴の一つも上がるだろつと思つ。

……でもなあ。

私からすると、昨日の性格悪そうな片頬笑いが頭から離れなくて、

今さら照れとか見せられても、みたいな。

どう反応すべきか私が悩んでる間に、アシュールは照れを誤魔化すようにアジの塩焼きに箸をつけてくる。

あれ？ そういえば、アシュールって箸も使えるの？

不思議に思つて聞いてみたら、何故かお母さんが答えてくれた。曰く、初日に教えて、翌日にマスターした、と。

……。

「イツどんだけハイスペック。

箸使ひのつて、そんな一朝一夕で出来るじやないよね？ それをやってのけちゃうつて……。

買い物だって、慣れない世界の道を直ぐに覚えたわけでしょう？ もう何か、呆れるしかないというか。生まれ持つた才つてやつですかね。はん。

何事もああでもないこつでもないと試行錯誤しなくじや出来ない私はちょっとやさぐれた気持ちになつた。

七夏 ハイスペックなシンテレラ（後書き）

六花以上にちょー空氣ですが、お父さんも食卓に居ます。
一人黙々と御飯を食べています。父ペース。

八夏 異世界人は働き者？

全力ラジオ体操で朝から体力を消耗した私だけど、半年近く使っていなかつた自分の部屋を掃除し、午前中も精力的に過ごした。まあ、お母さんに無理矢理させられた、とも言えるけど。涼しこうに活動するのもまた夏を感じるよね。

そして暑さの増す午後はのんびりするのだ。

ということで、午前中の間に一仕事終えた私は、お腹^{はら}はんの後には縁側でぐつたりと横になっていた。

傍らには蚊取り線香を置いて、時折庭の縁の隙間から青い葉の香りと一緒に涼しげな風が吹いてくるのに目を細める。ミンミンと一生懸命鳴く蝉と吊るした風鈴が奏でる心地のいい音色をBGMに、微睡む。

まさに私の大好きな時間だ。

ああ本当に。

The 夏！

って感じだなあ。

もう少し気温が上がつたら、扇風機でも回しながらアイスを齧るう。

そんな計画をぼんやりと頭の中で立てていると、不意に閉じた瞼に陰が差した。

心地のいい時間を邪魔され渋々目を開け見上げると、随分背の高いシンデレラの姿が。

うーん、本当にドレス着て女装しても似合いそうだよね、アシュ

ールって。顔だけは綺麗だし。性格悪いけど。

「……」

私の枕元に立っているアシユールが、じつとこちらを見つめてくる。

今度は何だ？

俯いている所為で銀河の瞳は陰になつていて、アシユールが何を考えているのかわからない。

とりあえず、そんなところに立つていられると落ち着かないんだが。嫌がらせでもしに来たんだろうか。

じつとこちらの見つめてくるアシユールに、私も負けじと見つめ返す。にらめっこなら負けないんだからね。

一向に立ち去らないアシユールを見ていて、突然頭に閃くものがあつた。

まさか、ヤツの目的は……！

「この場所は譲らないんだからね！」

夏の縁側は私のものと決まっているの、我が家では！

アシユールは大人しく屋根裏にでも行つてなさい。ウチに屋根裏なんてないけどね！

シンデレラの姉らしく意地悪なことを考え、絶対退かないぞ、と
いう気持ちを込めてこれ見よがしに目を瞑ると、暫くしてアシユールは静かに立ち去つて行つた。

「……」

何か一言くらべ言つて行けばいいのにね。

……ああ、あの人日本語喋れないんだつけ。

それでもさあ、『家中で出合ったのに無言はないよねえ？
つて、私も言葉は一言も発してなかつたけど』。

何だか少しだけモヤッとしてつ、不貞寝するように目を開じていると、直ぐにパサリと何かがお腹の上に降つてきた。

何だろ？と思つて目を開けると、お腹には水色のタオルケットが。

「ありがと、お母ちゃん」

言いかけて、止まる。

側に立つていたのは、さつき何処かに行つたはずのアシユールだつた。

「…………？」

何を言つてゐるのかさつぱりだ。

でも今の状況を考えると、『そんなところで寝てると、風邪を引くんじやないのか？』とかかな。心配してくれたんだろうか。やっぱり優しいところも…………。

…………。

いやいやいや！

私はもう騙されないぞ！

どうせ、お母さんに言われたか何かで嫌々ながらに持つてきただ違ひない！

さつと今の言葉も『お前の所為で、扱き使わてるんだけど？』とか言つたんだ！

絶対にそう！

真意を確かめてやるうと、寝転がったまま体勢を仰向けに変えてずつと高い位置にあるアシユールの顔を見る。

起き上がらないのかつて？ だつて私、まだまだ転寝するつもりだし。起きるのちょっと面倒だし。下から見上げたアングルからでもアソツの顔が整つてるのが癪だし。つて、これは関係ないか。

そういうば、金髪の人つて、毛も金色なのかな？ 今度見せてもらおうかな。……いやいや、汚いからやめよう。どんなに綺麗な顔をしている人の毛でも、ソコの毛はね。

ん？ には何が入るのかつて？

もちろん、“鼻”に決まつてるじゃない。他に何があるの？

あ。もしかして、みんな“カゲ”つて漢字を想像した！？ そんなわけないつて！ そんなの、今度見せてもらおうとか言つわけないでしょ！ アハハハハハ。

……。

どつちにしろ下品でした、ごめんなさい。

清純派な私らしからぬ思考をこつそり巡らせていたんだけど、ふ

とアシユールの足元にあるものに目がいつた。洗濯力ゴだ。

もう朝に干した分はすっかり乾いて、今度は一回目の分みたい。夏は洗濯物も結構たくさん出るもんね。

……。

あー。

アシユール＝シンデレラ説がいよいよ濃厚になってきたな。

買い物に食事、洗濯、つて。

チヤホヤされていると思つたら、意外と本気で扱き使われてない？

まあ、アシユールをべた褒めなお母さんのことだし、無理にさせているとは思えないけど。でも何だか本当に可哀相になつてきちゃつたよ。

居候とはい、私以外の家族はアシユールが異世界人だということを信じて疑つていなければ、世界の違うところから突然ト

リップして来ちゃったような人をお手伝いさんのように使うなんて。

何て言つか、もう少し気楽に過ぎないさせてあげればいいのに。

それによく見れば着ている服だって昨日と同じようなお父さんの
だし。買い置きのTシャツをおろしたっぽいとはいえ、ちょっとあ
んまりじゃない？ そもそもサイズが合っていないし。

暫くそんなアシユールを同情の目で眺めていた私だけど、ヤツが
洗濯力ゴトを持つて立ち去るうとしたから慌てて立ち上がった。

うん、思い立ったが吉日ー。

いくら嫌いでも、昨日の川遊びで気を遣ってくれたことを忘れた
わけじゃないし、今だつてお母さんに頼まれたのかもしれないけれど
タオルケットを持ってくれたわけだし！ それにほら、私つ
て優しい子だし！ 本当にシンデレラの姉みたいになるのは嫌だし！
何かの言い訳のように心の中で呟きながら、急いでアシユールの
腕を掴む。

「ちよつと待つた

「いいで待つてー！」

驚いたように振り返ったアシユールの腕から洗濯力ゴトを奪い取る。

それだけ言うとアシユールを置き去りにして、私は弟の部屋に足音
荒く乗り込んだ。

本気で嫌がる孝太に洗濯物を押し付け、待つててという言葉通り
に縁側で突つ立つ立つていたアシユールの腕を引っ張つて、家を出た。

八夏 異世界人は働き者？（後書き）

毛に騙された人、正直に手を挙げて！

……性質悪くってすみません（謝

とりあえず、ぴちぴちのTシャツとハーフパンツではあまりにもあんまりなんで、近所の幼馴染が居る家で服を借りることにした。見るからに185cmはありそうなアシユールだけど、幼馴染も180cmくらいはあつたから、丁度よかつた。

その幼馴染も私と同じく県外の大学に通つていて今は不在みたいだ。だから直接は頼めなかつたけど、おばさんにちょっと入用だからと伝えると何だかニヤニヤしながら貸してくれた。……とんでも勘違いはよしてね、おばさん。

服の方は、一先ず見られればいいから白Tシャツと黒ベスト、麻生地の白ズボンというシンプルな組み合わせをパパッと選んでアシユールに渡す。

状況の飲み込めないアシユールは困惑顔ながらも、言つとおりに着替えてくれた。

しかし身長は然程変わらないというのに、ズボンの裾が微妙に足りないという。小癪な。

仕方がないので少し裾をロールアップをせて、何とか自然な感じになつた。

電車で5つほど先の駅まで出た。私の実家は田舎なので、そんなにお店がないのだ。駅を5つと言つても、一つの駅と駅の間が5分以上あるので、結構な距離を移動していくことになる。

まあ、そんな田舎事情はさておいて。

目的のお店を探して歩く中で、早速問題が。

「……」

……何だらうな、この、気持ち悪い感じ。

何が、つて、私たちの後ろが、だ。

私たちは普通に歩いているだけなんだけど、背後には何故か少しずつ少しずつ、ときには大量に、足音が増してきている。振り返るのが怖い。

何この怪現象。

夏イベントは夏イベントでも、心霊現象はお断り！ お化け屋敷も真っ平御免の私は、背後で起こっているであろう怪現象に鳥肌が立つのがわかつた。

まあもちろん心霊現象なんかじゃないんだけど。

さつきチラリと見たら、明らかに異常なほど大量の人たちが、少しだけ遠巻きに私たちの後ろを歩いて来ていた。目の端に、すれ違つた人がヒターンして私たちの後ろへつくのが映つたときは、本気でギョッとした。

怖くない？ 怖いよね？

今までこんなこと一度だつて経験したこと無いよ。

後ろに連なる人だかりはほとんどが女性で、ときどき男性もいるんだけど、あれかな、いわゆる乙女路線の人かな。

わらわらと私たちの後ろをついてくるその人たちは、夏の日差しの所為なのか、別の理由からなのか、誰も彼もほんのり頬をピンク色に染めている。……熱中症か？ 実際、途中で倒れて離脱してい

く人もいる。何に中でられたんだか。

逆上せ上がつたような顔の彼女たちが夏の太陽よりも熱い視線を送るのはもちろん私ではなく、私の隣でのんびりと何事も無さそうに歩くアシュールにだ。

まあ要するに、明らかにアシュールの美貌に引き寄せられているつてわけ。

なのに、アシュールときたら。

本当に全然周りの視線なんて感じた風もなく、涼しい顔で歩いてらっしゃるんだから……。こんちくしょうだよ全く。ソワソワと落ち着かないのは私だけ？ アシュールはこんな視線には慣れてるつてか？

じちとう、本気で迷惑だし。

何ていうかね、私にも刺さるわけ。視線の矢が。あの女はあの方の何なのよ、的な矢が。ホント、拡声器でも使って言つてやりたい。

私はただのシンデレラの姉です。

と。

私は夏の太陽の暴力的なまでにジリジリと突き刺さる光は好きだけど、視線の矢で弁慶並みに串刺しになるのは好きじゃないっていうの。

もうね、あれだね。

後ろに群がる人たちは、蛾だと思おつ。

燐粉みたいに化粧やら口焼け止めやら香水やらを塗りたくつた、蛾。実際、何だか色んな香りが混じつた毒々しい空気が背後には流

れでいる気がする。集団怖い。

それで、間違いなくアシユールは誘蛾灯だわ。
そこまで考えて、ハタと気づいた。

そっか、誘蛾灯だ！

そもそも、誘蛾灯の目的は蛾とか光に寄つてくる他の害虫なんかを引き付け駆除するというものだ。

つまり、誘蛾灯アシユールには離れたところで歩いてもうえばいい。駆除は出来ないだらうけど、引き付けることは出来るよね！

思い立つて直ぐ、私は隣を静かに歩いていたアシユールに向き直つた。足を止めた私に気づいて、アシユールもこちらを振り返る。小さく首を傾げるヤツを見据えて、私は言つた。

「アシユール、今から私が十歩進んでから、歩いてきて」

十歩も離れて歩けば、私への視線も逸れるだらう。これで、私がシンデレラの姉から弁慶になりかけていたのも回避できるというものだ。

いい考えにホクホクしながら、私はアシユールの返事を待つことなく歩き出した。

しばらく歩いてからチラリと振り返ると、ヤツは律儀に十歩ほど後ろを歩いていた。

うん、私、アシユールのそういうの好きだよ。素直でよろしい。

視線から解放されて上機嫌だった私だけど、それほど歩かない気持ちに違和感を感じた。

何か背後に気配が……。

「……。 つー！」

振り返った私は思わず悲鳴を上げそうになつた。

アシユール！ 何でそんな真後ろにいるのッ！？
さつきまで十歩の距離をきちんと保つて歩いていたじゃないか！？

思いつきり跳ねた心臓を宥めて、心持ち上がつた息も整えてから、
アシユールを睨む。ヤツは“どうかしたのか？”みたいな顔でこち
らを見てきた。いつの台詞だ。

「アシユール……。十歩後ろをついてきて、つて私、言わなかつ
た？」

死ぬほど驚かされてイラッとはしていたけど、冷静に聞いてみると。
ちょっと引き攀り気味でも笑顔まで浮かべて優しく聞いてやつたつ
ていつのに。

「……」

アシユールは暫く沈黙した後、徐に私の足元を指差した。つられ
て視線を向けると、今度はアシユール自身の足元へ指先を持つてい
く。

だから何なのよ。

訳が分からなくて、問うように視線を上げたら。
ヤツの顔は小憎たらしい片頬笑いに歪んでいた。

おいコラ。だからその顔は何なのか、と。

完全に笑顔を凍りつかせる私に向かい、アシュールが何か言った。
芝居がかつた困り顔を見ていて、何となく意味がわかつた。
きつとこうだ。

“足の長さが違うから、気づいたら追いついてた。悪いな”

で、間違いない。

笑つた。

—

顔はやめてボディにするから。

一発お見舞いしてもいいですか？

九夏 誘蛾灯の有効活用（後書き）

少し変えてありますが、最後の方のフレーズに気づく方はいらっしゃるんだろうか。

私もリアルタイム世代ではないのですが……。

もう怒った！

足の長さが何だつていうんだ！

そんなの長くなくても歩けるし！ 走れるし！ 全然問題ないし
！！

アシユールの人を小馬鹿にした態度にキレた私は、ヤツに鋭い視線を浴びせてから無言で勢いよく前に振り返った。

アシユールがそういう態度なら、受けて立つてやろううじやないか。

私の競歩力を舐めるなよ！

既に私の頭からは、アシユールが引き寄せる人の群れのことなどすっかりさっぱり消え去つて、ヤツが“私が悪かつたです、どうかゆっくり歩いてください”と頭を下げる姿を見てやろううじやないか

という気持ちで一杯だった。

私の足の長さを莫迦にしたこと、そのお綺麗な額を地に擦り付けて謝るがいい。

鼻息も荒く、大股で歩き出した私。暫くして止まっていた大勢の足音も動き出したところをみると、アシユールも歩き始めたらしい。相変わらず誘蛾灯のような男だ。そんなヤツが、私の競歩について

来れるのかね！

真夏の日差しが照る中、そのまま必死に歩き続けた（あくまでも歩いてた）んだけれど……。

「 うひやあーー！」

後ろの様子を窺おうと振り返つたら、アシュールのヤツが普通に斜め後ろを涼しい顔で歩いていて、私は思わず奇声を上げてしまつた。もう、何なの！ 近いし！

「ア、ア、ア、 アシュールッ！ー！」

「……」

怒り心頭で怒鳴つたら、ほんの少しの間を置いてから、ポンッと私の肩に大きな手が掛けられた。

何だこの手は。

睨む眼力を緩めずにいると、アシュールはそんな私を見て……、ふつと笑つた。妙に優しい微笑みだつた。それはもう、慈悲深い聖女マリア様も尻尾を巻いて逃げ出すほど慈愛が籠もつているような。

シンデレラの次はマリア様かよ！

という突つ込みは、ヤツの笑顔の眩しさに捻り潰された。^{ひね} ような気がする。

アシュールの白金の髪は太陽が反射し、何故か後光が差しているようにも見える。銀河の瞳を細め、唇で綺麗な三日月を描いて笑う

様は、どんな時代のどんな名のある画家も絵に描くことなんて出来ないほど神々しくって、何を賞賛の言葉を垂れ流している、私！私の好みはあくまでもヤツの描いた濃紺髪のインテリ眼鏡である。こんな、シンデレラやマリア様を彷彿とさせるようなお綺麗な男ではない。騙されるな、私。

大体、良く見る。アシユールの目を見ていれば、その綺麗な顔に隠された本音が見えてくるじゃないか。ほら、集中すれば、ヤツの心の声が聞こえてくる。

“ そう睨むな。足の長さは変えられないからな。生まれ持ったものとはい悲しいものだ。 フツ ”

そう、目が言つてるじゃないか。

目が……、……。ホント、銀河の瞳は感情を伝えすぎだ！ 私の足が何だつて！？

ああもう、本気で怒つた！！ 今度こそ本気で怒つたからね！！！私は思いつきり肩に置かれたヤツの手を払い落とす。足が長いからってそんなに偉いのか！

「もういいから、アシユールは十歩後ろから近づいたらや駄目！…わかっただ！？」

怒る私をアシユールは不思議そうに見下ろしてくる。アシユールの気持ちは伝わってくるのに、私の気持ちは伝わらないらしい。言葉は逆のはずなのに、何でだ。

もう一度歩き出し、何となく嫌な予感に直ぐに振り返つてみると、何故かそのまま付いて来ているアシユールの姿があつた。人の話を聞きなさいよ。

「付いて来ちゃ駄目！」

叫んでから、言った言葉の意味に気づいて焦る。

“付いて来ちゃ駄目”つて……。我ながら、幼稚なことを言ってしまった。付いて来てもらわないと困るのはいつちだ。

「いや、だから、付いて来なきゃ駄目なんだけど……」十歩以上近づかないように、付いて来て！」

怒鳴るように告げて、私はきょとんとしているヤツを置き去りにして足音荒く歩き出した。今度こそ、闘牛並みに突き進む。角は無いのに田の前の人たちが左右に割れしていくのはどうしてだろう。このときの私は、自分が般若や阿修羅や仁王の顔を持つ母の娘だとうことに気づいていなかつた。

だけどこれならヤツもついては来れまい。あ、いや、十歩後ろからは近づけない、ってことだよ？

そんなことを思いながら意地になつていた私は母の娘であること以外にも気づいていないことがあった。アシユールが背後でクスリと笑つたことも、いつの間にか私の後ろから姿を消していったことも、だ。

どれくら歩いた頃か、横に並ぶ気配もないことからアシユールもついに歩く早さは足の長さだけで変わるものじゃないとわかつたか、と得意気に振り返つた私は、後ろに広がる景色を田にして愕然とした。

いつの間にか、あれほど居た人の山はすっかり無くなり、アシユールさえも姿を消している。

「 え？」

驚いて、慌てて立ち止まり辺りを見渡す。何度も見ても人垣なんて綺麗さっぱり見当たらない。アシユールの姿があれば当然、人だかりだつて出来ているはずなのにどこにもそれが無いということは、もちろんアシユールがいなつてことだ。少なくとも、私の目の届く範囲には。

そのことに気づいて、呆然とする。

そんな、アシユールが付いて来れないほど複雑な道を歩いていたわけでもないのに、どうして？

半ば駆け足気味になつていたとは言え、アシユールが付いて来れないはずがない。それとも、少し離れて歩いていたはずの人垣に呑まれたとか？

ううん、それだったら人の塊が何処かにあるはず。でも、それも見当たらない。

意地になつて歩いた所為で早まつた鼓動が、別の理由でドクドクと音を立てる。

何処に行つたの……？

お互にいい年した者同士なのに、逸れてしまふなんて。そんな莫迦な。

私は暫く呆気に取られていたけど、そんな場合じやないと慌てて走り出す。早く見つけ出さないと。

「アシユール！？ 何処にいるの……？」

十夏 第一ラウンド、街一（後書き）

意地つ張りな六花、消えたアシュールにびっくり仰天。
この十話・十一話の舞台裏であるアシュールサイドを、番外あたり
で書ければなあ、と思つます（希望）。

アシユールの姿が見えなくなつて、私は大いに慌てた。私としたことが、本当にムキになりすぎた。アシユールの挑発するような態度につい乗せられてしまつたような気がする。普段の私はここまで大人げないことなんてしないのに、アシユール相手だとどうにも対抗心がムクムクと湧いて来てしまつのだ。どうしてだろう？

でも考えてみるとこれもそれもアシユールの所為な気がする。私の行動も大人気ないけど、アシユールだつてよつぽどだよね。

そもそも人のささやかな悪戯にわさびで仕返しをしてきたのが悪い。あれは本当に死ぬかと思った。体中からいろんな汁が出たし。その後だつて、川に投げるは、お説教中に置き去りにするは……。大概だよねえ？

わざと私の神経を逆撫でして楽しんでいるんじゃないかと思うくらい、あの人だつて対抗してきている。今思い出してもちょっとムカつくくらいだ。

でも。

今回のは、本当に私が悪い。それはわかってる。

「アシユールッ！！」

私は必死にアシユールを呼びながら、街中まちなかを探し回つた。人の視

線が気になつたけど、そんなことも言つていられない。

アシユールは今きっと、一人で困り果てる。不安にだつて思つてゐかもしない。

だから早く探してあげないと。

実は今でも私は、アシユールが本当に異世界から来たかどうかについて半信半疑だ。常識的に考えれば有り得ないと思う。だけど、たとえ異世界から来たんじゃなかつたとしても、アシユールが日本に不慣れなことは確かだ。

時折口にする母国語らしい言葉は、英語でもドイツ語でもフランス語でもない。おおよそ、私が今まで耳にした言語の発音とは違つて聞こえるんだ。それを考へると、少なくとも私の知らないところから来たのは間違いないと思うんだ。

どんなに馴染んでいるように見えても、新しいことに触れたときのアシユールの反応には戸惑いがある。梅干なんかは特に独特のものだらうけど、自転車を見せたときを思い返すと苦笑するしかない。乗つて見せれば目を丸くして、そう簡単に乗れないとわかると少しムツとしていたつけ。

「アシユール、何処！？！」

実はアシユールは白い食べ物があまり得意じゃないということも、私は知つてゐる。御飯やお豆腐を食べるときはあまり嚙まずに飲み込むんだ。笑つちゃうよね。苦手なら正直に言えればいいのに、絶対そんなことを顔に出さない。少なくとも私以外は、気づいてないと思う。

私は和食が好きだけど、アシユールにとつてそれは故郷の味じやないはずで。もしかしたら、食べる度に自分の国を恋しく思つてゐるかもしれない。

そういう部分をあまり外には出さない人だけど、誰だつて、何年

も暮らしていた場所を意図せず離れるのは恐ろしいし、全く文化の違つところでは心細い思いにも駆られると思うんだ。

そんな不慣れな人を、街中で一人にしかやつなんて。

「アシユール、何処にいるのよ！！」

炎天下の中を走り回つて汗が噴出す。額に張り付く髪を掃つて、私はまた走り出した。

私だつて、初めて実家を離れて大学に行くことになつたときは、すごく不安だつた。街に出れば、見たことのない景色に方向感覚もわけがわからなくなつて、何度もお巡りさんに道を尋ねたか。もちろん道行く人にもだけど。

でもアシユールは日本語が喋れない。道を聞きたくても、言葉を話せないんじゃどうしようもない。そもそもアシユールには目的地を言つていなかつたから、日本語を喋れても尋ねようも無いし、私のことだつて説明できないだろ。

だから、この場所でのアシユールの頼りは私しかいなかつたのに。

ああもうホント私つてば、ムキになるのにも限度があるでしょ！

自分に罵声を浴びせつつ、目立つ白金の頭を探す。ついでに、人だかりもあつたりしないか目を皿にして探した。

それでも一向にアシユールは見つからなくて、私は一度立ち止まり、ぐるりと辺りを見渡して来た道の方も確認する。アシユールのきらきらしい姿は何処にもなかつた。

ああもう！ 迷子の鉄則は無闇に歩き回らないことなのに！

「どう考へても、アシユールが動き回らなければこんなに見つからないなんてことはない。一体何処に行つちやつたんだ、アシユールめ！」

「これ以上何処をどう探しらいかわからず、途方に暮れながら上がつた息を整えていたと、突然後ろからポンッと肩を叩かれた。

「……！」

慌てて振り返ると、そこには死ぬほど探していたアシユールの姿があつた。

「アシユール！ 何処行つてたの！？ よかつた……！」

思わず両腕をがつしりと掴むと、アシユールは驚いたように目を丸くした。いや、驚いたのはこっちだし。いきなり後ろから現れるなんて。

「もう、どうして逸れちゃつたの！？ そんな複雑な道を歩いてなかつたでしょうー！？」

勢い込む私にアシユールは少し身体が引き気味だ。まったく、何よその態度は。散々心配を掛けておいて。つて、悪いのは私か。ごめん。

「とにかく、ホントよかつた。……」ごめんね、アシユールのこと考えずに突つ走つちゃつて。慣れない場所なのに、私が一緒に居なくちゃアシユールも困るつていうのにつ。まさか逸れちゃうなんて思わなくて……。今回のは私が全面的に悪いや。本当、ごめん。

今度からこんなこと無いように気をつけるか。一人にして「めんね？」

重ねて言つと、さらにアシユールは驚いたような顔になつた。だから、何をそんなに驚くんだ。まさか、私が素直に謝るのがそんなにおかしいのか。私だって、ちゃんと自分が悪ければ謝るつづの。マリア様なら寛大な心で許してくれるよね？

アシユールが何だかバツが悪そうな顔をしているのが気になつたけど、とにかく見つかつてよかつたと、私はホッと胸を撫で下ろした。

「はあ、もう、どうなることかと思つた。もう暫く探して見つかなかつたら交番行くところだつたよ。見つかつてよかつた。

今度こそゆっくり歩いて行こう」

そう言つて笑いながらアシユールを見上げたら、何故かくらりと目の前が歪んだ。

あれ？ なんか、これって、ブラックアウト……？

死ぬほど探したとは言つたけど、まさか本当に死ぬとかないですよね……？

六花は反省できる子です。

アシュールは一体何処にいたんだろうか？

少しづつ意識が浮上した。

なんだか首筋が冷んやりする。あと、脇のあたりも。
気持ちいいなあ、と思いながら薄つすらと目を開くと、ぼやけた
視界に妙にキラキラしいものが映つた。

眩しいぞ、太陽。

とか思つていたら、その太陽は何故か徐々にじちらに近づいて来る。

何だコリヤ、と思つた次の瞬間やつと焦点が合つた。眼が捉えた
ものは当然太陽なんかじやなく、私は慌てて両手を翳した。

「 ッ！」

あ、危なかつた……！

キラキラ発光体の正体 アシユールの顔が、私の顔から僅か数
センチのところに迫つていた。

咄嗟に両手でヤツの口を塞がなければ、危うく私のそれにぶつか
つているところだ。見開かれる銀河のように深く吸い込まれそうな
濃紺の瞳がすこく近い。さらりと降る紗のような白金の髪が私の頬
に掠り、指先にはアシユールの冷たくしつとりとした唇の感触がダ
イレクトに伝わって、……伝わって……？

うひやあ！ 何何何なになになになにつ！？

きょとんと目を瞬くアシユールと冷や汗をダラダラ流す私の目が力ちりと合わさって、体勢を崩せないまま凝固する。それから数秒の間があった。

えーっと、この状況は一体……！

気づけば私は木陰のベンチに横たわっていた。しかもアシユールの膝枕的な感じで。頭の下が固いです。お母さん。

いまだに私に覆い被さるようにしているアシユールと、動搖のまま固まり続ける私。な、何をどうしたらいいんでしょうか、お母さん！

私は心中でひたすらアワアワと叫ぶだけ。実際には“うん”とも“すん”とも声が出ない。あまりに驚きすぎて！

そのまま私たちの間には妙な沈黙が流れて、何がどうなつてこなつたむしろこの先どうしたら、とぐるぐると寝起きのよつた鈍い頭を回転させていると、暫くしてアシユールが「クリと喉を鳴らした。……何を飲んだ？　

手を離したらアシユールがそのまま倒れこんできそうで身体を動かすことができず、視線だけそろりと巡らせると、アシユールの手には私が実家から持ってきた保冷カバー付きのペットボトルが握られていた。さらに私の脇の辺りにはもう一本のペットボトル。こちらは保冷カバーが外されている。せっせ脇が冷たいと思ったのはコレのお陰らしい。なるほど。

「……」

「……オッケーわかった把握したアイアンダースタンディングドナウなのでちょっと離れようかアシユールさんオーケー？」

ノンプレスで意味のわからない言葉を垂れ流し、アシユールを押しゃる。アシユールはあつれつ身を起こした。

……。

そんな簡単に起きられた離れてくれればよかつたのにー、心臓に悪すぎた。

跳ねる心臓を宥める暇もなく、私もアシユールのかつたい腿から起き上がろうとしたんだけど、押し戻された。なんか問答無用な感じで。肩を押された反動で後頭部をアシユールの太腿に強打したんですが。痛い……。

何すんの、ヒアシユールの顔を見たら、文句があるのか、とでも言わんばかりに見下ろされてしまった。

何その威圧感。怖いんですけど。

それでももう一度起き上がろうとすると、それを察したアシユールに肩を押さえつけられた。肘から先で両肩を押さえ込まれては上体を起こすことなんて出来ない。さらにヤツはこれ見よがしにペットボトルに口をつけ、拳句になんとドリンクを口に含んだまま少しずつ私に近づいてくるじゃないですか。

これは脅しですねうですねわかりましただからやめてくださいヒーメンナサイ。

アシユールの本気の田に、私は慌てて両手を上げて降参のポーズをとった。

動きません起きませんからそれ以上近づかないでくださいお願ひします。

諦めた私を見て何故か満足気なアシユールにほんの一瞬殺意が湧いた。乙女を脅迫するとは何事だ。

しかし卑怯にも脅されたので仕方なくその体勢を維持しつつ、気になっていた首筋へと手をやる。そこには水で濡らしたハンドタオルが巻かれていた。

これってやつぱり、あれだよね。私つてば、十中八九軽い熱中症で倒れたってことなんだろう。

今日も暑かつたし、炎天下の中アシユールを探して走り回った所為で、急激に体温が上がってしまったのかもしない。

でもこれも自業自得だ。アシユールを逸れさせちゃったのは私だもん。

アシユールは倒れた私を介抱してくれていたんだろう。つぐづく今日は申し訳ない。

さつきのも、ペットボトルに入っていた冷たいスポーツドリンクを飲ませようとしてくれていたんだと思う。私は意識がなかったら、その、……口移し的な、アレで。ソレはアレな感じだが、……。アレだから仕方ない。うん。……何を言っているんだ、私？　いまだに動搖から抜け出せていないなんて、私ったらどこの乙女さん！しかし普通は驚くでしょう！？　目が覚めていきなりキラキラしいものが迫ってきたら！

キラキラしいものが……。

……。

あああああも'うつ。

あと一歩早く目覚めるか、遅く目覚めるかのどちらかにしてほしかつたよ！

よりによつて直前とか……。恥ずかしきて憤死する！　せつか

く落ち着いた体温だつて急上昇しそうだ。そういえば川遊びのときも似たような つて、アレは思い出しちゃ駄目だ。余計恥ずかしくなる！

唯一の救いは、今顔が赤くても熱中症の所為にしてしまえるつてこと。多少の体温の上昇もまだ具合が悪いのだと思ってくれるに違いない。……それでも恥ずかしいものは恥ずかしいんだけど……。

ところで、この体勢はいつまで続けなくちゃいけないんでしょうか、おか（略）。

見た目はともかく気持ちの動搖を悟られないよう、手の甲を田元に当てて顔を隠すようにしていると、突然前髪が払われ、次いで額にひんやりとしたものが触れた。反射的に翳した手を外す。額にはアシユールの大きな手が乗せられていた。

ちょうど熱を測るような形で置かれた手はさつきまで冷たいペットボトルを握っていた所為か冷たくて、火照った額に触れられると本当に気持ちがいい。手も大きいから私の額なんてすっぽりと隠れてしまう。それどころか田元まで覆えるんじゃないか、つてくらいだ。

大きな手は決して柔らかいというわけでもなく、肉刺のよ^{まゆ}うな硬い感触もあつたけれど、何より冷たさがあんまり気持ちよくて思わず目を閉じた。気持ちいいな……。

これはいいやとちょっと笑つたら、頭の方からもふつと笑うような気配がした。……いや、笑つた、のかなあ……？ なんだか吐息のよ^うにも聞こえた気がしたけど、目を瞑つてしまつている私には生憎判断がつかなかつた。

でも、どっちでもいいや。だつてすつゝく気持ちいいし。

木陰だからか時折涼しい風も吹いてきて、その心地よさにいつの

まにか騒がしかった心も戻いで来る。アシユールも私も何も喋らず周りの喧騒も遠退いて、時間がゆつたりと流れているように感じた。そういえば、今日の午後はこんな風に涼しい場所でのんびり過ごす予定だつたんだよね。アイスを齧つたりなんかして。それが今は大分おかしなことになつてしまつたけど。

なんてばんやり考えていると、額の手がするりと外されてしまった。

ああ、気持ちよかつたのに……。

名残惜しく思つたけど、また直ぐにアシユールの手は戻つてきた。反対の手に変えたのか、また少し冷たさが増していく、そのひんやり感にホッ息をつく。極楽極楽。

快適な状態に浸つている私の横で「ごそごそ」とバッグを漁る音がした。それでも気にせず目を閉じていると、頬や首筋を軽く拭われる感触がして驚いた。どうやらさつきの「ごそごそ」はもう一枚入つていたハンドタオルを取り出していたときの音らしい。

……。

……なんか妙に優しいな、アシユール。

そう思つてしまつるのは、私が捻くれてゐる所為？ 病人だから優しいだけ？

でもなんか下心がありそうだ（変な意味じゃなくて）とも勘織つてしまつ私は、性格が歪んでるんでしょうか。

そうじゃなくても、素直にされるが今までいいんだらうか。
何だか物凄く丁寧に扱われている気がする。

しかも、アシユールの放つ空氣が「つ……なんて言つた……。

妙に甘つたるい空氣が流れ始めたようで、私は比例するように徐々に居心地の悪さを感じ始めていた。

十一夏 異世界人の献身（後書き）

後ろめたさの解消という下心が御座います。

あんまりのんびりしているわけにもいかなくて、私たちはそれから直ぐ目的地に向かうことになった。

決して。

決して、甘い雰囲気に飲まれそうになつて慌てたとかではないぞ。

アシユールは起き上がる私をなおも押し戻そうとしたけれど、丁重に時間が無いことをお伝えしたら、わかつてくれた。

決して。

決して、私の真っ赤な顔の理由に気がついて折れてくれたわけではないと思つぞ。……と、信じたい。

倒れる前の惨状を学習した私たちは、ゆっくり並んで歩いて目的地を指していた。

私つてばやれば出来る子。ちゃんとアシユールに対抗心など燃やさず、静かにしていることだつて出来るのだ。

「……」

だけど、冷や汗が止まらないのは何故でしょう？

答えは明白。

横で歩くアシュールが今まで感じたことが無いくらい不機嫌な雰囲気を醸し出していて、その霸気が半端じゃなく私に重圧を『』えているんだ。何コレ、本氣で潰れそう。

心なしか、半径20メートル圏内の道行く人たちも踏み出す足が重そうだ。いや、よく見るとむしろ私より離れた人たちの方が、何だか辛そう。顔色が悪い人までいるのは、まさかアシュールの不機嫌オーラの所為なんだろうか。そこまで影響を及ぼせるオーラって一体。

とにかくアシュールが怒っているのはわかるんだけど、何がそこまでヤツの逆鱗に触れたのかはさっぱりわからない。木陰から出でから特におかしなことはしていないし、不快にさせるようなこともしていない。……と、思う。ただ歩いていただけだし。

私の横で黙り込んでいるアシュールをそろりと見上げると、昨日私によって川に突き落とされたたときよりも遙かに恐ろしい眼力で前を見据えていた。

え。ホントこれ、何の拷問？ アシュール、目が据わってるんだけど。

横から放たれるそのあまりのプレッシャーに耐え切れなくなつた私は、決死の覚悟でアシュールの袖を引っ張つた。どうにかしないとマジで死ぬ。

私は“逆らう気はないので殺さないでくれ”と内心白旗を揚げながら、顔を覗き込んだ。

「……アシュール、何か怒ってるの？」

恐る恐る話しかけたら、ギロリと銀河の瞳に睨まれ、一瞬怯む。
ちょー怖い。

だけど、その濃紺の瞳を見ていたら、その奥には何か不自然さがあるような気がして私は思わず首を傾げた。

あれ？ 怒つてなくない……？

その鋭さとは裏腹に、濃紺の瞳に散る銀の虹彩は穏やかに瞬いていた。器用だな。……いやいや、そうじやなくて。

放つ霸氣は半端なく重いけど、瞳に怒氣がないんだ。おかしなことに。

つまり、これって怒つてないのに、怒つてる振りをしているっていうこと？

何それ、何が意味あるの？

わけがわからずポカンと濃紺の瞳を見つめていたら、何故かそんな私を見たアシユールも驚いたように少しだけ目を見開いた。……

わけわからん。

混乱しつつ眉を寄せて首を傾げる私を見て、アシユールはその瞳に今度はどこか面白がるような色を乗せた。……だから、わけわからんって。説明しろよ。

私がちょっとイラッとした（短気すぎるとか言わないで）のに気づいたのかそうでもないのか。わからないけどアシユールは一度そのだだ漏らしていた霸氣を引っ込め、妙に優しい顔で笑った。その瞬間、ふわっと光が散つたように見えた私は、眼科に行くべきでしょうか。

アシユールがあんまり綺麗に笑うから、思わず動搖して視線を逸らしてしまった。えっと……。こんな乙女な反応、誰も期待していませんよね？ 誰より私が期待していませんよ。

これはアレだ、決してアシユールにときめいたとかいうわけではなく、完璧なまでに美しいものを見て自分の欠落具合に恥じ入る、

的な。……苦しいか。

とにかく怒つてないならいいよね。うん。だから、今日はもうアシユールの顔は見ないことにする。何で怒った振りをしているのかはもう聞かない。硝子のハートがもちません。

私が決意を固めていると、とんとんと指先で肩を叩かれた。思わずアシユールを見上げてしまい、内心がつくりと肩を落とす。さつきの私の決意は何処へ……。

アシユールは、つられた悔しさに唇を噛む私を不思議そうに見ていたけれど、気を取り直すようにすいと周りを指し示してみせた。何だろう？ とつられて視線を投げると、なんと、いつのまにか人がわらわらと増え始めているじゃないか。そういえば、さつきまでは街に出たときが嘘のように私たちの周りには人が疎らだった。これって、どういうこと？ 哑然として周りを見渡していると、またしても急に私の身体がずつしりと重くなつた。アシユールめ。

またか、と思うよりも早く、周囲の光景を見て目を瞠る。さつきまで集まりつつあつた人山が、瞬く間に散つていいくのを目の当たりにしたからだ。

すごいな、これがまさに蜘蛛の子を散らすように、と言ひやつ？

しかも、また身体への重圧 アシユールが怒氣を引っ込めると、暫くして徐々に人が寄つてくるではないか。

これつて……。

嘘みたいな光景に驚きを隠せず呆然とアシユールを見上げたら、くすりと笑われてしまつた。

要するに、アシユールが怒氣というか、霸氣のよつなものを発散するとその威圧感に負けて人が近寄らなくなるんだ。まさに、虫除けスプレー状態。例えは悪いけど、そういうことだよね？

さつきまで誘蛾灯だと思っていた人が逆の効果を發揮するなんて。

ホント、ハイスペックですね。

人つてそんなこと出来るんだ……？ なんて、未だに思考停止状態の私の手に、するりと巻きつくるのがあった。それは少しひんやりとしていて、ちょっと硬い。

アシユールが私の手を掴み、引っ張るようにして歩き始めた。
再び霸氣を発散しながらだつたけれど、私の手を握るアシユールの肉刺まののある手は優しくて、やっぱり怒氣はフェイクなのだと実感する。

倒れる前に私が周囲に集まる人だかりを嫌つて離れて歩いたから、こんなことをし始めたんだろうか？

理由はわからないけど、視線の矢が降り注がなくなつて随分歩き易くなつたのは確かだつた。

私の手を引き、重たい霸氣を放つのは別にアシユールの背中はどこか上機嫌な氣がする。手を引かれ、楽しげな背中を見ながら、私は思つた。

目的地の場所、分かつてるんでじょうか ？

十三夏 誘蛾灯の裏技（後書き）

二人が遭遇してまだ一日目です。
たつた一日が大忙しのやつらです。

十四夏 見返りは頂戴しますか？

結局、率先して歩いていたアシュールは途中で自分は目的地を知らないという事実に気づいて立ち止まつた。だから言つたというのに。いや言つてはしないか。

仕方なく選手交代で私が先に立ち、目的のビルを手指して歩いた。その間、何故か手は離してもらえなかつた。たぶん逸れるのが怖かつたんだろう。全く子供みたいなヤツである。

私たちはビルの3階までエスカレーターで上り、少し迂回して目的地のお店に到着した。

『ルブレクス』

私が結構気に入っている紳士服、ブランドだ。爽やか系やシックなものがほとんどなんだけれど、所々にブランド特有の小さなアクセントが効いていてシンプル過ぎないようデザインされているものが多い。

どうしてもこのブランドじゃなきゃ駄目、とこうこともなかつたけど、まあ私も紳士ブランドに詳しいわけじゃないし、知つているところの方が無難かな、という守りに入つた結果である。

でも実際、アシユールにはこのブランドは合つと思つんだよね。あんまり「ゴテゴテ着飾らなくても元が良いんだし、正直Tシャツにデニムとかでも十分だと思う。……しまつた普通に褒めてしまつたチクショウメ。

それにしても、ここまで來るのに随分時間が掛かったように感じるのは私だけだろうか。思い立つたが吉田とは思つたけど、アシュールと出かけるのは本当に大変だと身をもつて知つた氣がする。誘蛾灯の一件だけじゃなく、昨日も含め色々と。まあもう終わつたことはいいんだけどさ。

氣を取り直してお店に入ろうとするが、何故かぐいっとアシュー
ルに腕を引かれた。危なっ。

「な、何つ？」

たらを踏んで振り返ると、何故か真剣な顔のアシュールがいた。
……今度は何よ？　スッと買い物しよう。そこでチャツチャと帰
らうつてば。

またしても何か問題が起きそうな気配に、内心ちょっとだけ（いや結構）ぐつたりしながらアシュールの様子を窺つた。

卷之三

アシュールは軽く首を左右に振りながら何かを言った。

何だろう？ 正直、言葉はさっぱりわからないので感情以外の細かいことはジエスチャーが頼りなのに、首を振られただけじゃ“何

かを留定している”くらいしかわからん。

「なんか嫌だつた？」

聞くとまた首を振った。嫌ではないらしい。……じゃあ何だ。

溜息吐きたいのはいいぢなんですがね。

お腹の底でまたしても対抗心がモゾモゾしだして、私は慌ててこつそり深呼吸をした。ホント私、学習しているんです。アシユール

に对抗心を燃やしてもいいことなんて何も無いって、よくわかったもので。

「どうか具合が悪いとか？ それともお腹空いた？」

優しく、ゆっくり、冷静に聞く。子供に対応するみたいになつてしまつたのは、来る途中のヤツの行動がまだ意識下にあつた所為かもしねりない。

だけど、アシユールは私の言葉にまちしても首を横に振つた。もう何なの。さっぱり検討がつかないんだけど。

困り果てていると、ヤツはショップの服を指差し、次いで自分を指し示して首を傾げた。その仕種の言いたいことはわかつた。

“あの服は俺にか？”

的なことが言いたいんだろう。細かい部分はわからないけど。とにかく私はアシユールに頷いて見せた。

「そうだよ。アシユールの。お父さんのお古ばっかりじゃ嫌でしょ？」

「 - - - - -

当然だらうと思つながら聞いたのに、アシユールが再度首を振つて、たぶん否定の言葉を口にした。

……。

あー、そういうことね。

アシユールがショップに入りたがらない理由がなんとなくわかつた。

要は、遠慮しているんだよね、服を買ってもらつこと。そうじやなければ、わざわざお父さんのお古でいいとは言わないでしよう。

どう考へてもサイズが合つていかないんだし、着心地だつていいとは言えないと思う。そんなのをいつまで続くかわからない生活の中で、ずっと着続けていくのは本当は嫌なはずなのに。

変なところで謙虚だね、アシユールつて。いやまあ、気持ちはわからなくもないけど。

私だつて、見知らぬ土地で面倒見てもらつてる人に住まいと食事だけじゃなく、服まで『えられたら遠慮すると思つ。しかも新しいのを買うとなると。

だとしても、ここは無理にでも買わせていただくつもりだ。

だつて正直、お父さんの服とかアシユールには合つて無いし。見てられないし。いつ帰るかわからないけど、夏だからそれなりに着替えもいるだらうしね。

むしろ私が帰省するまで一週間もあつたのに、ずっとお父さんのお古だつたという事実の方が居た堪れないよ。私としては。もしかしたら今みたいに、遠慮して押し切つたのかもしれないけど、私は押し負かされないからね！

幼馴染から要らない服をもらうことも考えたけど、大学進学とともに色々整理していくのを知つていてるから、そんなに沢山不要な服があるとは思えなかつたので、やめた。

新しい服を色々と揃えるとなると結構お金も掛かりそうだけど、今年の春休みはしつかりバイトして稼いだから貯金もそれなりにあらし、目の前のブランドはそんなにバカ高いってわけでもないからアシユールの服を買つことに何も問題は無い。

アシユールが躊躇する理由がわかつて、しかも大した理由じゃなかつたので私はホッとした。これでまたひと悶着、なんてことになつたら明日は一日絶対動かないテーになつた。

「何か遠慮してるみたいだけど、別にタダで買つてあげるわけじゃないから気にしなくてもいいよ

私が笑つてそう言つと、アシユールはほんの少し眉を寄せて首を傾げた。遠慮するなら見返りを頂戴すれば文句はないだろ？

「もう少し先だけど隣町で花火大会があるから、それについて来てよ」

花火大会はお盆の後で、今日から数えるとまだ一週間以上ある。アシユールがそれまでウチにいるかはわからないけど、わからないからこそそれでいいと思った。服を買うのは私が勝手にそうすることだし、別に本気で対価を欲しいとは思わないから。

それに、守れないかもしくても、一つ約束があればアシユールも無償で与えられるばかりじゃないと思えるだろう。

だけどそんな条件を出してもまだアシユールが戸惑った様子なので、さらにもう一つ追加しておくことにした。私つて優しいな。

「あと、アシユールが自分の世界に帰つて、万一もう一度ウチに来るようなことがあつたら、そのときに何かアシユールの世界のものを頂戴」

にんまりと笑いながら私は言った。これも花火大会と一緒に、守られる保障なんて無い。むしろ花火大会よりも可能性は薄いと思う。そもそも今回こちらの世界に来たことだって不慮の事故っぽいし。一度同じことが起こるなんて奇跡以上じゃないかと思う。

だけど、本当にアシユールが異世界人なら、あちらの世界に帰つてから私との約束を守るために何かを用意して、それをいつも持ち歩いていたら……面白いと思わない？

「もちろん、ウチの家族全員分ね？」

お父さんにお母さん、孝太の分もとなると、結構大変だと思つ。でも4人分のお土産を肌身離さず（いつにちうの世界に来ることになるかわからないからね）持つていれば、アシユールはきっと毎日私たちのことを思い出すだらう。そんなことをしなくても忘れられないくらい貴重な体験だったとしても、思い出す頻度は格段に上がるはず。

アシユールは意外に義理堅く、律儀で謙虚なところもあるヤツだから、無理に恩を売るつもりはないけど、そうやつて時々思い出してくれたら、アシユールに懐いているウチの家族も報われるだろうと思つたんだ。

ああなんか、結構私も絆されているなあ、なんて思つ。アシユールに会つてたつた一日。でも、なんとなく心底悪いヤツでもないんじやないかと思い始めていた。

こうやってアシユールはウチの家族を落としたわけか。ホント小癪なヤツである。

「そうだなあ、一人につき二つずつくらい、用意しといてね！
これで満足？」

「……。 - - - - -

意識して二ヤニヤしながらアシユールの顔を覗き込むと、アシユールは一瞬呆気にとられたように目を瞬いてから、次いでパツと弾けるように破顔して笑つた。

十四夏　見返りは頂戴しまか？（後書き）

たつた一枚。されど一枚。濃密な一枚。です。

十五夏 第三 小ラウンド、駅！

結局、ルブレクスではポロシャツなど、上三着、下一着を購入した。

アシユールが全開の笑顔を見せた（周辺で数人バタバタと倒れる音が聞こえたのは空耳だと信じてる）その後また不機嫌な振りを始めたから、人が押し寄せるなんてこともなく、ルブレクスでは概ねスムーズに買い物が出来た。

ただ、店員さんがアシユールのプレッシャーに耐え切れず笑顔が引き攣りまくっていたのが可哀相だつたけど。実は怒つてないということを知ってる私はもう慣れた。虫除けになるので止めるとも言わない。店員さんごめんよ。

『カレシにプレゼントですか？』とか笑顔を引き攣らせながらもお愛想で聞いてきた店員さんに、何を言いやがる、とか思いながら『いいえまつたくちがいます』と笑顔でハキハキかつ棒読みで答えたら、店員さんはさらに顔を引き攣らせて退散していくんだけど、何でだ？

「アシユール、次行くよ」

まだ買いたいものがある。

「 - - - - - - - - - - ?」

また何か言つてる。だがわからん。聞く気もない。だつて、たぶんまた遠慮の類だと思うんだよね。

「わかつたわかつた、花火大会と貢物よろしくね！」

一応そんな念を押してみたら、案の定アシユールは苦笑して諦めの溜息を零した。予想が当たっていたっぽい。遠慮のしきは鬱陶しいだけだぞ、アシユール君。

それから私たちは同じフロアの紳士服売り場を回つて、少し安めのTシャツを数枚買つた。部屋着も必要だからね。あと下着もこつそり買つておいた。こればっかりは田の前で買うのも買われるのも抵抗があるだろうから、こつそり、こつそりね。サイズはまあ、元カレのを参考に大体で。後でお父さんが買つてきたつてことにしてもらおう。

正直、結構な量を買つたと思う。お金も使つたし。でも、私的には満足だ。

私がバイトをしてお金を貯める理由は、何も私自身が欲しいものが沢山ある所為じゃない。むしろあんまり物欲はない方だから一人暮らしのアパートだつて殺風景なものだ。

じゃあ何のために貯めるのかといえば、八割方、交際費だ。去年は当時のカレシのためだつたし、今は友達と遊ぶため（そこ、カレシいたのか、とか突つ込まない。いたのよ。いたんですよ。別れたけど！）。

外で遊ぶのに、全然お金を使わないで遊ぶのも結構好きだけど、何処かに行つたり食事をしたり、お土産を買つたり、そういうところでお金のことを心配をしたくないんだ。

思いつきり楽しんでいたのに、お金が気掛かりで躊躇したり買えなくて気持ちが沈むなんて勿体無いじゃない？

遊ぶときは思いつきり遊ぶ。削れるところは出来るだけ削る。そ

れが私の信条なのだ。

で、それがアシユールに一方的に服を買い与えることに何の関係があるのか、と。うん、尤もな疑問だね。正直、私も私の考える純粋な交際費とはちょっと違うと思う。傍から見たら……綺麗なヒモ男に貢ぐ汙えない女に見えるかも。大変遺憾であるが。

だけど、考へてもみてよ。今のところアシユールはおのお父さんが受け入れて、かつお母さんも弟も気に入っているウチの居候だ。そして、私の見立てでは、アシユールという人物は義理堅く、律儀で謙虚さもある。世話になつてゐるからと率先して家事までやつてゐるようなシンデレラ人間だ。

たとえそれが見た目にミスマッチでも。たとえハイスペックなアシユールにとって、家事なんでものが大したことじやなかつたとしても。面倒で慣れないことを自分からやつていることは事実だ。

もしもそれが全部私たちを油断させるための演技だつたら全く笑えないので、でも現段階では騙そつとしている気配は無い。

ということは、アシユールが裏切りの様子を見せない限り、この人は家族のようなものだと。私はそう考へることにしたんだ。……いけ好かないけど。もう一度言おう。いけ好かないけど！……嘘じやないよ！

そんなわけで、いつ何時帰つてしまつとも限らなくとも家族同然なアシユールが、あんなサイズの合わない窮屈そうな服を毎日着ているのは見ていられなかつたのだ。

私は小生意気な弟にもしつかりお土産を買ってくるような優しい姉なの。シンデレラの意地悪な義姉じやなく。そんな私が家族同然の人間にあるものお金を出し惜しみなんてしてどうするんだ、という話。たとえまだアシユールのことを若干色々と疑いの目で見てゐるとしてもね。

自分の欲しいモノのために貯めたお金なら、きっと使つてしまつ

ことを惜しいと思ったかもしれないけれど、元々は自分が楽しく気持ちよく過ごすために貯めたお金だから、家族のために使うのは全然勿体無いとは思わない。

万が一アシユールが明日帰ってしまうたらす”い無駄になっちゃう気もするけど、そこはそれ。アシユールがいなくなつて不要になつたら、幼馴染にでもあげればいい。そして幼馴染からはしつかり見返りを頂戴すればいいのだ。あつはつは。

「アシユール、アイス食べながら帰ろ！」

実家の最寄り駅に降り立つた私は、そうアシユールに声を掛けて手を引っ張つた。ちなみにアシユールは行きと同様、逸れるのが嫌だつたのかまたしても手を握つてきたので、仕方なくそのまま帰つてきた。荷物は全部アシユールが持つてゐる。押し付けたとも言つけど。押し付けなくても率先して持つただろうから問題ない。と、勝手に解釈している。

駅の中の売店で鼻歌混じりにアイスを物色する。もともと午後はアイスを齧りながらまつたりする予定だつたんだから、帰りに食べても罰は当たるまい。

「アシユールはどれにする？ これとか美味しいけど

「…… - - - - -」

片手で食べられるパックに入ったアイスを示してみたけど、アシユールは首を横に振つた。……また遠慮か？

「遠慮しなくていいってば。アイスくらい。ああ、それとも甘い物嫌い？」

大分呆れながら言つたけど、アシユールは笑つて首を振つた。じやあ何だ？

首を傾げていると、アシユールは両手をくいつと小さく持ち上げて見せた。服が入った荷物と、繫がれたままの私の左手が同時に上がる。

つまり、両手が塞がつてゐるからいらなって？

「そんなの手を離せばいいだけでしょ」

「……」

変な言い訳をしてるなあ、と思いながら繫がれた左手を離す。いや、離そうとしたんだけど……、何故か手は外れない。

ぶんぶん振つても外れない。ぶんぶんぶんぶん振つても外れない。ぶんぶんぶんぶんぶんぶん（略）

……ちよつと？

何のマネでしうか、アシユールさん。

「手え離してつて」

ムツとしながら言つ。相当不満げに言つたのに、アシユールは微笑して小さく首を傾げた。

……なに今やうり「二ホンゴワカリマセン」みたいな顔してゐるんだ、マイシは。

大体、電車の中でも無駄にずっと繋いでて暑いんじゃボケエエエ
！ とばかりに私は激しくハンドをシェイクする。シェイクハンドズ
じゃないよ、あくまでハンドをシェイクだよ、ハードにね！
しかし、頑固な汚れのごとくアシユールの手は離れなかつた。瞬
間接着剤でも隠し持つてたのか？
力の限り全力で振つてもアシユールは手を離してくれず、終いに
は、

「 ツー！」

思いつきり繋いだ手が引かれ、私はアシユールの胸元辺りに鼻を
強打した。後頭部の次は顔面かよ！ これ以上不細工ちゃんになつ
たらどうしてくれる！ この黄金率ヤロウ！ ……。 悪態が褒め
言葉に聞こえる自分に幻滅した！

あまりの痛さに涙目のままアシユールを睨み上げたら、アシユー
ルはにこにこ笑いながら……いや、ニヤニヤ笑いながら人のことを
見下ろしてきなすつた。

喧嘩売つてるんだねそつなんだね理解した！

ドスツ

キレた私は無言で目一杯の力を込めてアシユールのお腹を叩いた。
もちろん拳で。しかし何故かダメージを受けたのは私だつた。地味
に痛い。腹筋硬すぎる……。この筋肉鎧め……。

学習したはずが結局売店でひと悶着起こした後、なんとか冷静を
取り戻し棒付きアイスを一本買って、やつと私たちは帰路についた。

途中、いろいろと言つたくせにアイスを欲しがるので仕方なく分けてあげた私は、本気でマリア様、ぱりに慈悲深い素敵なお女だと思った。

十五夏 第三 小ラウンジ、駅一（後書き）

何がラウンジだ！ イチャつこいこるよつこじか見えん！ けしか
らんつ！

タゞ飯もすんでお風呂上りの一杯（ただの水）を楽しんだ後、涼もつかなあ、どうしようかなあ、と考えながら歩いていたら、縁側に甚平を着た丸い背中を見つけた。

「あれ、お父さん」

声を掛けると、振り返ったお父さんから「おお」と見そつけなくも聞こえる返事が返った。でも顔を見ると案外柔らかい表情をしていて、どこか機嫌の良さを感じる。何かいいことでもあったのかな？

ちらりとお父さんの横に視線をやると、日本酒とお猪口が置かれているのに気づいた。

なるほど。

月明かりにほんのり浮かび上がる盆栽を肴にお酒を飲んでたわけか。ここで、見るのが円 자체じゃなく盆栽なのが父らしい。風流なんだかどうなんだか。

縁側、酒に月に虫の声。

風流を気取るにはもってこいだと思つたが、肝心な酒の肴が盆栽じゃねえ？ あはは。

でもそんなお父さんが私は結構好きだ。

「あ。ね、お父さん、ちょっと待つて」

私は一声掛けると一度中へと引っ込んだ。台所へ行つて目的のも

のを手に、再び縁側へと取つて返す。お父さんは静かに田を細めながら、まだ自慢の盆栽を眺めていた。

「お待たせ！ せつかくだからこいつ飲もうよ

言つて、帰省する際に買って来たお土産の日本酒を掲げて見せた。せつかく買つてきたのに、大事にとつておくんだもん。飲まなきや意味ないつていうのにね。

私はちやつかり自分の分のお猪口も片手に隣に座つた。二十歳になつたばかりで日本酒か、つて？ うん、まあ、そこは、あれよ。察してよ。あははは。

「なんだ六花、お前も付き合つか？」

私がお猪口片手に隣に座つたのを見て心持ち嬉しそうなお父さんに、内心笑つてしまつ。やっぱり父親つて自分の子供とお酒を飲めるようになるの、嬉しいものなのかな。お酒を飲みながら、酔いに任せて今まで出来なかつたような話をして、子供の成長を感じたりするのかな。

子供にとつたら、どこか遠かつたお父さんが、少しだけ近くなつたように感じる。お酒の力つてすごいよね。

「機嫌取りのつもりも大いにあつたけど、これはお酒をお土産にして正解だったな。なんて、何となく胸に押し寄せた感慨のようなものを軽い調子で誤魔化した。

「そりやあ私も成人しましたからねー、孝太より一足先に付き合うよ。孝太が成人したら孝太に任せる

笑つて言つと、お父さんはそつかうかと満足そうに頷いた。

お酌をし合つて力チリと乾杯をしたあと、一杯目は目配せし合つ

て一気に煽る。透き通る水のような液体は喉に抜けていった直後、カツと熱を生んだ。鼻に抜けるきついアルコールの匂いにそれだけで体温が上がった気がする。うまい。

お猪口を空にして直ぐお父さんと田が合って、一人してちょっと笑ってしまった。はは、何だか本当に大人になつた気分だ。いくら成人したって言つたって、まだ二十歳になつたばかりで何かが劇的に変化したわけでもないのにね。

でも、あの頑固で自分の意思是絶対曲げないつて感じだったお父さんとゆつたりお酒を飲んでるなんて、なんだか不思議な気分だ。

「あ、そうだお父さん。お父さんはさ、どうしてアシユールを受け入れることにしたの？」

お父さんの言つことには家族みんながただ唯々諾々と従つてきたから、今までお父さんの決定に疑問なんて挟まなかつたけど、今日はお酒の力も借りて聞いてみる。お酒の力だけじゃなくて、何だかアシユールが来てからお父さんは少し角が取れたみたいで、今なら聞けるんじやないかと思つたのもあつた。

お父さんは盆栽を眺めたまま、そうだなあ、と何かを思い出すようにな話し始める。

「一番は、目の前で“落ちてきた”的を見た所為だらうが……。あとは、彼が直ぐに剣を手放したからだらうな

「剣！？」

驚いた。アシユール、剣なんて持つてたの！？

私の小さな叫びにお父さんは軽く頷く。お猪口を持った手が遊んでいたから、新しくお酒を注いであげた。もちろん私はちゃつかりさんなのでついでに自分の分も足しておく。

「ほら、あそこの、丁度盆栽棚が壊れているところがあるだろ？」

示されて視線をやれば、月と室内から洩れる明かりで薄っすらと見えた。確かに、お父さん自慢の盆栽棚が傾いている。

「あそこに落ちて来たんだ。あれはすぐかつたぞ？　いきなり空から人が降つて来て、父さんも母さんも孝太もびっくりして固まつて動けなかつたよ」

「……うん、だらうねえ」

そりやあ何も無いところから人が降つてきたら、普通リアクションなんて取れないと思う。でも二人とも固まっている様子を想像したらちよつと笑えた。

「落ちてきたアシユール君は妙にキラキラした服を着ていて……」

「キラキラした服？　そう言えば、アシユールの着ていた服つて何処に仕舞つてあるの？」

思わず遮つて聞いてしまう。

言われてみればそうだよね。裸で落ちてきたとは言つてなかつたし、もとの世界の衣装を着ていたんだろうに、その服は一体どこへ？　私は見たことないぞ。それを言えば剣とやらもそうだ。アシユールが使つてる密間にでも置いてあるのかな？

でもそんなものがあるなら、それを先に見せてくれれば私だってあるいはアシユールが異世界人だということをもつと信じられたかもしれないのに。

「ああ、あれは孝太が持つてる」

「は？」

「孝太がすゞいすゞいと騒いで、帰るまででいいから部屋に飾らせてくれと五月蠅くて。剣も一緒にな」

「……あの莫迦」

私は弟の小生意気な笑顔を思い浮かべてこめかみがひくつぐのを感じた。

本氣で一度しつけ直さないといけないな、孝太め。

だつて普通に考えて、今のアシユールにとつて一番大事なものでしょ、服と剣なんて。

アシユールが身一つでこちらの世界に来たなら、服や剣は唯一、元の世界を実際に感じられるアシユールの存在証明のようなものだ。自分と元の世界とを繋ぐ記憶の具現。

それなのに、そんな大事なものをアシユールから引き離してしまうとは。いくらまだ義務教育中の孝太でもそこはちゃんと考えて行動しろ、と言いたい。……まあ、剣とかっていうのは男の子からすればちょっとと憧れるようなものなのかもしれないけどさ。だからって許されることでもないでしょ。

アシユールには服も剣も早めに返してあげなくちゃいけないな。剣という武器を渡すことには多少の抵抗もある。だけど、……アシユールなら剣がなくてもその気になれば私たち家族なんて簡単に傷つけることができるような気がする。なんか鍛えられてそうだし。腹筋の硬さは半端ないし。あれ本当に筋肉？ 実は鉄板でも入ってんじゃない？ ……それは言いすぎか。

とにかく、剣を返すか返さないかだけで危険度がそれほど増減するとは思えないんだよね。どちらにしろアシユール次第では危ないというか。

だったら今の義理堅く律儀に見えるアシユールを信じて、大切なものは返してあげてもいいんじゃないかな、と私は思う。……ちょ

つと考えが甘いかな？　でも、お父さんも信用してるみたいだし…。

私が孝太の行動に顔を顰めつつ、剣についてうんうんと考えていると、お父さんも私が考えていることを察したのか苦笑して言った。

「父さんも初めは剣など危険だと思った。だから孝太の行動を止めるのに躊躇つてしまつたんだ。孝太の我儘を口実にアシュール君から剣を遠ざけられると咄嗟に考えて、言葉に詰つたんだな。ずるい考えだが。

でも直ぐに思い直して孝太を止めたんだぞ？　服もそうだが、剣だつて彼にとつては大切なものだろうからな。何があるかわからない世界で、身を守るものを手放すのは勇気がいるし、心許無いものだ。

だが孝太を止めようとしたら、アシュール君がかまわないと首を振つてなあ。今思えば、アシュール君は父さんが孝太を止めるまでに逡巡した、その意味に気づいてそうしたのかもな」

そう語るお父さんの表情からは小さな後悔と、そしてアシュールのことをとても高く評価しているということが感じられた。

「ああ、話を戻せば、父さんが彼を本当の意味できちんと面倒見よつと決めたのはそのときかな」

お猪口にちびちびりと口をつけながら聞いていた私は、首を傾げる。アシュールが衣装を孝太に預けたことと、お父さんがアシュールを面倒見よつと思つたことが、どう繋がるんだろう？

十六花 着は用と盆栽で 一（後書き）

父のターン。

親孝行もしておきたいよね。 という話。（そつでもない
アシユール不在で申し訳ないです。 次話は後半ちょっと出ます。
本格復活は十八話。

「アシユール君が落ちてきたとき、彼は父さんたちからは考えられないような素早い動きで体勢を立て直してな、直ぐに剣を構えたんだよ。恐ろしいほど鋭い眼光でこちらを睨み据えてな」

「ええ？ 完全に危ない人じゃない！」

『アシユールが剣を構えた』 そう聞いたとき、私は思わずガソッとお猪口を置き、身を乗り出してしまった。でもお父さんはそんな私の勢いにも笑つて答える。

「ははっ、そうだな。今思えば危ない状況だつた。でも、アシユール君を危ない人と思う以前に、父さんたちは驚きすぎて動けなかつたよ。

だけどさらに驚いたのは、啞然としてる父さんたちを見渡して直ぐ、アシユール君が厳しかつた表情と緊張を解いて、黙つてその場に剣を置いたことだ。それから丁寧に頭まで下げた。何事かを言いながらね。たぶんあれは謝罪だったんだろうな」

私は乗り出していた身を引いた。聞くだに信じられなかつた。

孝太に剣を預けたと聞いたときも思つたけど、知らない場所に放り出された人が、そう簡単に身を守る拠り所である剣を手放す？ しかも周りに見たこともないような人たちがいるのに？ それって簡単なことなの？ いや、無理でしょ。確實に安全だなんてわからないのに、剣を置くなんて。

それに、そもそも剣を持っていたつてことは、アシユールの世界

がそういうものを持ち歩かなくちゃいけない程度には危険と隣り合わせな場所だつたつてことでしょう？ そんな場所で生きていたなら尚更、身を守るためのものを手放すなんて信じられない。

アシユールって実はあまり頭がよろしくないの？ なんて思つてしまつた。

そのときのお父さんも同じよつな（頭がどうのとは思わなかつただろうけど）驚きを感じたらし。

「まあ、生きてきた環境で見る目を鍛えられていたからかもしないが、アシユール君は、瞬間に父さんたちを危険ではないと判断したんだろうな。

それからこれは父さんの勝手な想像だが、そのとき同時にアシユール君は、武器も持たず驚くばかりの父さんたちにとつては彼こそが脅威だということを察して、剣を手放したんじゃないかと思つんだ。父さんたちが驚きから回復して剣に気づいたときに恐怖を覚えないように。そのうえで、突然の訪問に謝罪をした。
……並大抵の度胸ではできないだろうな」

それはそうだ。

だつて、たとえ相手が驚きに固まつていたとしたつて、その人たちが安全だなんてどうして考えられるだろ。相手が驚きから抜け出したとき、恐怖のまま震えるか、それとも立ち向かつてくるかは、予想が付かないんだもの。

それなのに剣を手放したつてことは、突然襲い掛かられても対応できる自信があつたのか、あるいはお父さんたちは安全だという確信があつたのか。どちらにしろ、万一件を考へたら結構な覚悟がいる行為だよね。

「アシユール君が剣を置いたという事実に加えて、服や剣を孝太に渡したこと、父さんの中で彼に対する警戒心が崩れたんだろうがいる行為だよね。

な。

……彼はね、先に父さんたちを信用してくれたんだと思うよ。自分の大切なものを委ねることでね」「

ああそっか、そういうことなんだ……。

お父さんがアシュールを受け入れたのは、アシュールが先にお父さんたちを信用すると態度で示したからだ。

「とにかく一度家の中に入れて事情を聞いた。アシュール君も色々困惑していたようだが……。結局、迎えが来るまで置いてもらえないかと頼まれてな。思わず父さんは一いつ返事で受け入れてしまつたよ」

お父さんはそう言って肩を揺らして笑った。

アシュールはここに落ちてきたとき、きっとほとんど賭けに近いもので剣を置いたんじゃないかと思う。周りの状況も含めお父さんたちが安全だなんて、そんなの見たことのない世界で瞬時に判断出来ることじやない。……と思つ。

お父さんたちの警戒心を少しでも和らげるために剣を置いて、自分の大切な、剣を含めた衣装を委ねることでお父さんたちを信用するつてこと、自分の身も任せることを暗に表現したんだろう。そこまでされたらお父さんも保護せずにいられなかつたんだろうね。頑固でも一本筋の通つたお父さんは、誠意には誠意で返す人だから。

それで今ではすっかりアシュールを受け入れて、かつお気に入りにまでなつてしまつたというわけだ。それはお父さんの性格を理解していれば、納得のいく展開だった。

「お前も最初は抵抗があつたみたいだが、アシュール君の人となりを見て受け入れたんだろう?」「

「え？」

合点がいったと頷いていたところへ突然そんなことを言われて驚く。

私がアシユールを受け入れたと？

「服まで買ってやつて。優しいじゃないか。支払った分、父さんが返してやうか？」

お父さんは妙に優しい顔で笑つてゐる。それは子供の成長を喜ぶ親の顔だった。

……。

なんかすごい、

居た堪れない！

何その慈愛に満ちた顔！ こんなところにもマリア様が！？ おいらそこら中マリア様だらけじゃないか！ つていうかむしろお父さんは見た目的にイエス様！？ 何言つてるんだ、おこがましい！ や私が何を言つてているんだとかく落ち着け！！

改めて服を買ってあげたとか言われると、すぐ恥ずかしい。まるで私がお父さんやお母さんの仲間入りしてアシユールをチヤホヤしているみたいじゃないか！

優しいとかじゃないのに。受け入れた……のは、間違つてはないかもしないけど、でも！ まだいけ好かないとは思つてるし！ 私は顔の紅潮を急いでお酒を煽ることで誤魔化そうとした。無理だとわかつてゐるけど何か文句でも！？

お猪口に並々入っていた分を一気に飲み干して、叫ぶみたいに言つ。

「もーっ、何言つてんの！ 服はまだ気が向いただしつ」

うんうん、ただお父さんの服があまりに似合わな過ぎて見ていろなかつただけだ！

「それに、お金なんていらないよつ。私が勝手にやつたことなのに」

お父さんには大学の入学金だつて払つてもらつたし、一人暮らしのための仕送りだつてしてもらつてゐる。学費は奨学金で賄つてゐるけど、入学金と仕送りだけで頭が上がらないと思うのに、私が自分の判断で使つた自分のお金まで後からお父さんに請求しょうなんて、まったく思わない。

私が大慌てで手を振つたら、お父さんはまたしても優しい顔で笑つた。なんか、……敵わないなあ……。

「 お、アシユール君、どうした？」

「 ……」

羞恥に耐えていたところでお父さんの声があがり、慌てて振り返ると私たちの後ろには話の中心だつたアシユールが立つてゐた。手にはお盆を持つていて、その上には水差しとコップが乗せられてゐる。……気が利きますね。

たぶん、傍から見たらお父さんと私、一人でお酒を飲んでヒートアップしてきているように見えたんだろう。主に私が騒いでいたので。何だよ、一人祭りかよ。ちえつ。

アシユールが来たのは、小休止に水を、つてことだ。いやほんと、

シンテレラはよく働くね。感心、感心。

「…………」

私は父に水を勧めるアシユールを眺めて逡巡したあと、ヤツの腕を引いた。ちょっとここに座りたまえよ。

「アシユールも飲まない？」

そう言つてお酒の瓶を示すと、アシユールからは困惑した雰囲気が伝わってきた。何だ私の酒が飲めないつていうのか！ とかどこぞのお偉いさんのようなことを思つ。

アシユールは迷つてゐるみたいだつたけど、断れないと思つた。だつて……、

「おお、いいな。飲もう、飲もう。今夜は月も綺麗だ。お陰で盆栽も映える」

もう盆栽はいいし。

とか思つたのはお父さんには内緒にして、アシユールを見る。ほら、断れないだろ。

私はアシユールの前に私の使つてお猪口を差し出した。口をつけたやつだけど、アイスだつて平氣で食べてたし大丈夫だらう。

私はアシユールが持つてきた小さめのコップを代わりに手にとつた。

「はい、お猪口。私はこいつでいいから

「…………」

につこり笑つて言つたら、妙な沈黙が流れた。え。何よ？
目を瞬いていると、私の顔と手元を見、暫くして一人はブハツと
吹いて笑い出した。何その反応？

あ！ 一人して何か勘違いしてない！？

私はただアシユールは日本酒なんて飲み慣れないだろうから、コップなんかで飲んだら大変だろうと思つて気を遣つただけだつていのに！ 私だつて慣れてないけど、別にコップをとつたからつて水を飲むみたいにガブ飲みするわけじゃないんだけど！

二人が笑つた理由を察した私が顔を真つ赤にして怒るの一頻り笑つた後、アシユールとお父さんは楽しそうにお酒を注ぎ合つて飲み始めた。

おいちょつとだからその和気藹々感は何なんだ！

私をハブにしないでください。

覚えてろよ、一人して乙女を笑いものにしたこと、絶対後悔させてやる！ つて、これがいけないのか。うん。自制、自制、自制心。

.....。

だがやはりムカつく.....！

私たちはそれから三人で、ゆっくり月を眺めながらの寝酒を楽しんだ。もちろんお父さんは月じやなく、嬉しそうに一人で盆栽を眺めていたけど。

その間こつそり一人のお猪口にお酒を注ぎ足していた私に気づか

ず、惰性で飲んでいたお父さんとアシユールは自分が飲んだ酒量に気づかず、その後完全に縁側で酔い潰れた。さらに二人は縁側で転がっているところをお母さんに発見され、大目玉をくらつ」ととなりました。般若と阿修羅と仁王は健在でした。アーメン。

ざまあみろ。べ。

十七夏 着は円と盆栽で 一一(後書き)

長くてすみません。これ

違和感あつた部分、修正済み。

アシュールが実家にて“ほーむす”といふことになつた経緯の回
はこれで終わりです。

次話、第四ラウンド。しかし抑え氣味で。

深夜、フッと意識が浮上した。寝苦しい熱帯夜の所為か、散々飲んだお酒の所為か。たぶんどつちもだけど。お父さんとアシユールに飲ませることに集中していたから私自身はそんなに飲んだ気がしていなかつたけど、それでもやっぱり独特の倦怠感が身体を包んでいた。

喉の乾きを覚えて、仕方なく起き上がる。部屋を出て、薄つすらとした月明かりが差し込む静かな廊下をぼんやり進んだ。家族を起こさないように忍び足で。

蛇口を捻りコップに一杯水を飲むと、喉の乾きは十分癒えた。湿氣を含んだ空氣の息苦しさも、どことなく和らいだような気がする。気分もすっきりしたし、さあ朝の全力ラジオ体操に向けてもつかい眠ろうか、と居間を抜けようとしたときだった。

「……？」

薄つすらと客間から洩れる明かりが目にひいて、何気なく襖の隙間を覗く。そこにはアシユールが眠っているはずだった。……いやいや、覗いたのはもちろん断じてアシユールの寝姿に興味があつたとかではないよ？ あくまでも明かりが洩れているのが気になつたから。

隙間から中を覗くと行燈が点けっぱなしで、それが襖から洩れる明かりの正体だった。酔い潰れた所為で消し忘れたのかもしれない。私は一瞬迷つてから、そつと襖を開けて室内へと身を滑り込ませた。別に行燈ひとつが点けっぱなしだけで電気代がどうのと曰くじ

らを立てるつもりはないけど。でも橙色の温かみは夏には少し暑苦しく感じるものだし、実際枕元で煌々と光っていたら電球が熱を持つて暑いと思う。なので親切な私は僭越ながら消して差し上げようと思つたのだ。ええ、私つてばマリア（略。

アシユールはよく眠つてゐるみたいだし、気づかれるのも面倒なので、細心の注意を払つて足音を忍ばせた。

「…………」

アシユールの枕元の行燈までもう少し。

しゃがんで、あとは手を伸ばせばスイッチに届くかといふくらいまで近づいたとき。

行燈の明かりに煌くものが視界の端に映つた。引かれるように視線をやると、アシユールの米神や首筋に玉のような汗が浮かんで、それが行燈の明かりを弾いてオレンジ色に光つてゐるんだとわかつた。

靡うなされていふといふほどではないけれど、夏の寝苦しさだけではここまでにならないだらうといふくらいの汗。一体何の夢を見てるんだろ。もしかして、故郷に帰れそうなのに帰れない、なんていう切ない夢でも見ていふんぢやないかと、ちょっとだけ可哀相に思つたりもした。

それにしても、これだけ汗を搔いてゐるとさぞ気持ち悪いだらうと思う。起こしてあげるべきか迷いつつ、無意識に額に張り付く髪の毛を払つてやうとしたときだつた。

「…………」

それは一瞬のことだつた。

額に触れた途端、突然飛び起きたアシユールに押し倒された。大

きな左手で私の左肩は押さえつけられ、まるで刃を突きつけるように首筋にぴたりとアシユールの右の拳が当てられている。ちょうど、ナイフを握っているような形の拳が。

ナイフなんて危ないもののウチの客間にあるはずもないから、完全に体勢というか仕種だけなんだけど。

つまり、これって

エア威嚇？

いやエア威嚇って何？

そんな面白くなさそうな競技ありましたつけ？

そもそも威嚇は全部エアだよね？

つて、今はそんな冗談言つている場合でもない。

今私は覆い被さるアシユールの眼光は鋭く、その目は私が会つてから初めて見る剣呑さを含んでいた。

街で身体が重くなるほどの威圧感を放つていたときでさえ、目が含めばそこに怒りの気配はなくて、だからあんまり恐怖は感じなかつたのに。今は射抜くような銀河の瞳に感情の火は点らずただ物騒な光がちらついていて、正直に、怖い。実際に刃物を持っているわけでもないのに、首筋が冷やりとする気がした。

だがしかし。

だからといって素直に恐怖に震えるのは癪である。それが私。六花様。

「…………」

行燈に照らされて、ぎらぎらとより深く、濃く輝く銀河の瞳を見つめ、私はおもむろに両手を持ち上げた。

そして、

むにいつ。

何の音かって？ 何の音だと思う？ うんたぶん、想像通りだと思つ。

「アシユール、痛い」

「…………」

押し付けられた左肩が痛い。だけどアシユールも同じくらい痛いだろうと思つ。

何故なら私が全力でヤツの両頬を抓り上げているから。

そう、むにいつという音は、その効果音だったのだ。

あはは、流石の美形もこれをすると顔が面白いことになるね。いい眺めである。まいつたか！

「…………」

まいつたならいい加減離せコルア！という叫びを飲み込んで、押し倒されたまま、かつ頬を抓つたままアシユールの反応を待つこと数秒。アシユールは数度瞬きを繰り返したあと、フツと視線の隙を消した。……うん？ 正気に戻つたか？

観察していたら、アシユールは私の肩から手を離し、さつき私が

そうしようとしていたのと同じように、私の額に掛かる前髪をするりと払つた。……えーっと、これって謝罪？ それにしては何だか、目が今にも閉じそうだけど。起きます？ おーい、アシユールさん？

様子見でじつと見上げていたら、視線に気づいたらしいアシユールがフツと微笑んだ。……まだ頬つぺた抓つてゐんで微笑んだとい切れるかは定かじゃないけどね。はは、おもしろい。ついでに何かもごもご言つたけど、……うん。抓つてゐるんで。意味不明です、アシユールさんよ。もつとはつきり喋りたまえ。ふふつ。

さつきまで結構な緊迫感があつたというのに、アシユールは既に意識がぼんやりし始めているようで、瞬きの速度が遅くなっている。寝惚けた人を抓り上げたままつて、私つてひどい子ですね。はい。でもこれも連日された仕打ちの腹癒せです。

しばらくアシユールの面白い顔を楽しんでいた私だけ、さつきの緊迫感など嘘のようになつたアシユールをいつまでも抓つてゐるわけにもいかないので、渋々ヤツの頬から手を離した。

とりあえずたつた今得た教訓。

余計な行動（行燈消してあげようとしたり、額の髪の毛払つてあげようとしたり）はとるもんぢやない。これからは気をつけよう。

そんなことを心の中で呴いて、アシユールの下から這い出す。……這い出さうと、した。したんです。したんですよ。なのに。

「ぐえつー！」

カエルが潰れたよう、とはまさにこのことを言つたでしょーかッ。

アシユールのエア威嚇からやつと解放されたと思ったら、今度はアシユール自体が降つて來た。もちろん私は下敷きになりました。

重つ！

ついでに軽く後頭部も強打した。……本田一度目だぞ私の脳みそ大丈夫か？いやさつとき押し倒されたときも打つた気がするなんだ三度目じゃないかヤバイ私の脳みそ半死滅！？とか思いながら、この状況に呆然とする。突然の圧死フラグ。（注）エア威嚇よりも危険です。ご注意ください。つて本氣で苦しいよ！

アシユールの肩口が丁度私の顎下あたりにあつて、ヤツの上半身に完全に押さえ込まれているから全然身動きが取れません。男の身体は筋肉質なので重い。さらにアシユールはかなりの高身長で筋肉も一般の日本人男性よりもついている。うん。あれだね。この人やつぱり私を殺す気なんだね。あははは。……つてふざけるな！

心中で一人必死に叫ぶ私になど気づかず、アシユールはとくに、完全に寝ております。健やかな寝息を立てて。

「コイツ……本氣でざつしてくれよ。」

私の耳元には断続的にアシユールの寝息が送り込まれてちょーくすぐつた！ 背筋がぞわぞわする！ だが逃げられない！ 何コレレほんと何て拷問？ 下手なくすぐりよりも性質悪いよ！

すぐそこにあるアシユールの首筋からは、お酒と汗と石けんの匂いがした。

ぴつたりと隙間なく全体重を掛けられ、本氣で重い。苦しい。そして暑い。おいこら今が夏だと知つての狼藉か！ つて何コレ自分で言つて恥ずかしいつ！

とにかく冷や汗だけじゃなく普通に暑さの所為で汗を搔いて来た。ちゃんとお風呂入ったのに……。

肺が圧迫されていい加減息も出来なくて、このままじやいかん、と必死で対策を練る。

この状態を打破する方法は一つしか思い浮かばなかつた。ので、即実行。

問題ない。

どんな結果になつてもアシユールが悪いのである。といふことで、

「 いただきます、じゃなかつた、失礼します」

最後の情けで一応声を掛け、私は遠慮なく口を開けた。

ガブウツ！――！

……。

ええ、噛み付きましたが何か問題でも？

……なんかちよつと口の中がし�ょつぱいんだけど、アシユール。

十八夏 第四ラウンド、客間！（後書き）

飛んで火に入る夏の虫。違うか。

アシュールも寝惚けてますが、実は六花も若干寝惚けてます。なのでテンションがちょっと低い。しかも一人問答なので。

アシュール復活とか言つといて寝ててすいません。rzn

……そりゃ『仮面大公』でも主人公が噛み付いてたな。首じゃないけど。（ネタ被ってる！／愕然／いやいつものことだ気にしない！／開直

アシユールの肩口にしつかり噛み付く私。おまけで背中に爪も立ててあげたよ。特別大サービスなんだからねっ！

……。

……ふざけてますね、『めんなさい。

でもだつて本気で呼吸困難ですから！

一番手っ取り早くアシユールが起きそつなのは、痛みを与えることだと思つたんだもん。

さつきみたいに抓つてみることも考えたけど、頬つぺた抓つてゐにそのまま寝ちゃつた人が、もう一回抓つただけで起きるか？といつ疑問が。声を出そうにも肺は圧迫されてるし、深夜だから大声も出せない。残りは噛み付くくらいしか思い浮かばなかつたんだ。

……この単純思考、単細胞と罵られても仕方がない氣がする。でも後悔はしていない。

ちょっと痛いくらいが何だ！ こつちは压死しかけてるんだぞ！

正当防衛だ！ アシユールめ！ 起きやがれ！

力の限りとはいかないまでも、遠慮のえの字も無いほどしつかり噛み付いたので、アシユールは「ぐつ」と短い呻き声を漏らして一瞬押し黙つてから、のそりと起き上がつた。ほらね、作戦成功。終わりよければ全てよし。ああ、私の肺さん、御飯ですよ。じゃなかつた、空氣ですよ。

汗だくのアシユールに密着されたうえに、一人分の体温で汗を搔いたから私のTシャツまで濡れている気がする。これは着替えてから眠らないと気持ち悪いかもなあ、なんて暢気に思いながら、ふと

アシユールの方を見た。

.....。

「あ。ヤバ」

ポロつと歎く。

私の皿はアシユールの肩口に釘付けになっていた。

そこには、.....しつかりくつきりはつきり、私の.....歯型が。

アシユールは首周りの大きく開いたTシャツを着ていたから、私が噛み付いたのは布を挟むことなく直接の肌だつた。その所為か（いや強く噛み過ぎた所為だと思うけど）、アシユールの肩には私の歯の型通り綺麗に内出血が出来上がっていた。

これはヤバイ。

舌の根も乾いていませんが、たつた今、ちょっとだけ後悔しています、単細胞な私。

今はまだ、お酒を鰐腹たぢふく飲んだ所為もあつてか眠気に負けてぼんやりしているアシユールだけど、朝、顔を洗うときに鏡を見て自分の肩の惨状に気づいたら.....。うん。驚くなんてもんじゃないね。そして薄つすらとでも私の記憶が残つていた場合、

.....。

あ。背筋に悪寒が。

「、このままではマズい！

私は血の気が引く思いでアシユールの肩を凝視した。ここは冷静になつて考えよう。

そうだコンシーラーで隠すとかどうかしら？ 乙女の強い味方、コンシーラー！ ……いや駄目だ、化粧道具は私の部屋だし、そもそも今は夏で汗をかけば簡単に落ちてしまう。

じゃあアレ、絆創膏とかどうよ？ あれなら居間にある棚の引き出しに入っているし、傷も隠れて……ってこれも駄目だ。だって絆創膏とか目立ちすぎる。普通に剥がされて、おいこれ何だよ誰だ俺を襲つたの、的展開が目に浮かぶ！

もういつそ放置の方がよくない？ 私は何もしてません。みたい

な。

……。はい、駄目ですよねー。

つていうかそもそも、こんな襟ぐりの開いたTシャツがいけない。そうだよ、こんな感じや、アシユールが気づく前にまず家族が気づいてしまうじゃないか！

焦つた私は急いで立ち上がり、客間の隅に置いてあつたカゴを漁つた。アシユールの着替えが入れられているカゴだ。そこから適当に似たような、でも襟ぐりの開いていないTシャツを引っ張り出す。

「ほらアシユール、手え上げてっー

「……」

布団に座り込んだままゆらゆらしているアシユールの元へ取つて返すと、遠慮なく着ているTシャツを引っ張りだした。Tシャツの一部が顎に引っかかるて「ぐえ」ってなつてたけど知らん！ それがあつた私がやつた、いや、なつたやつだ！ 一番煎じは面白くないぞ！

そもそもちよつと噛み付いただけで内出血するような貧弱な肌を持つアシユールが悪い！この、豆腐ヤロウ……自分で言って意味わかんないな。

ああもう「めん私が悪いです頭が単細胞でした認めます認めますから早く着替えてっ。

「…………？」

一人テンパる私に、薄つすらと目を開けたアシユールが何か言った。眠そうな目と視線が合つて、妙な間があつた後にぐいっと腕を引かれた。

「…………？」

ほほ抱きつくような形になつてしまい目を見開いて固まる私を見て、アシユールがまたぼんやりと何かを呟いた。ぼそぼそ言ってて聞き取れない。いやほそぼそ言ってなくとも聞き取れないけど。とりあえず、起きたの？ 起きたなら自分で着替えを……。そう思いかけて、ふと思考が止まる。なんかちよつと、……何だう？ 嫌な予感。何でしちゃうかこの脳内に響くサイレンは。

「…………」

「…………？」

「…………！」

私はそこで雷に打たれたように肩をビクつかせた。目の前で光がスパークしたように現実を理解する。

……マズい。これは歯型がバレると、どうしよう、マズい。いやそれ以上にマズい……！

今この状況でアシユールが完全に目を覚ましたら……。確實に、間違いない、（私にとっての）大惨事が待っている……！

だつて冷静に考えてみて？

深夜、意味もなく（本当はあるけど）アシユールの部屋にいる私。寝惚けるアシユール。

そんなアシユールの服を脱がせる私。

（アシユールだけ）上半身裸の状態で（不本意ながら）抱きつく

私。

アシユールの肩には意味深な私の歯型。

……。

……。

うおおおいいつ！

マズいなんてもんじゃないと今気づいた！ ついでに若干寝起きでテンションの低かった私も目が覚めた！！ そして現実を見た！ ヤベエエエエエッッ！！！ ほんの数分前の自分を罵つてやりたい！

よつ、ひの、単細胞つー！

つて罵つてないし！ “ よつ ” つて何よつ！？

うわあ、ツツ「ミミ」が親父、ギャグっぽくなってしまった自分に幻滅した！ …… “ 幻滅 ” だと？ それは前にも使つた表現じゃないか自分の語彙力の無さにやつぱぬ（略！

半ば脳内パニック状態で私は硬直していた。下手に動いてアシユールが正気に戻つたらアウト！ 私の人生終わつたね！ イエア！ 状態になるつ！

この際、記憶がぶつ飛ぶようにもう一度日本酒ガブ飲みさせるかっ！？ いやそれは流石に犯罪だよねうんわかるわかつてるわかつてるんだけど他にどうしたらつ！？

前にも後ろにも進めない状態で凝固していただけど、しばらくしてアシユールの異変に気がついた。

よく見ればアシユールのとろんとしていた瞼はいつの間にか完全に降り、規則的な呼吸音まで聞こえる。体勢は座り込んだままだけど、じつやう再び夢の国へ旅立つたらしい。

……。

これは、……助かつたといつことど、ファイナルアンサー！！？

おっしゃあああ！ とガツツポーズをしそうになるのを必死で堪え、私は息を殺してアシユールに掴まれていた腕を外した。

とりあえず落ち着こい、うん。自分に言い聞かせながら、一度取つた距離をもう一度つめる。

いやいや、もう一回抱きつこうとか、そんなことこれっぽっちも考えてませんよ？ さつさと逃走したいのは山々です、はい。だけど、上半身裸でアシユールを放置したら、私ただの痴女じゃない！？ 齒型つけて脱がせて逃げるとか、変質者でしょ！？ その称

号は流石に私でもいだけない！

なので私は涙を飲んで遂行します、最後まで！

脱がせたTシャツで、そつとアシユールの浮いた汗を拭いていく。
私って優しい！とか、余計なことは考えず、ひたすらアシユールを
起こさないよう息を潜めながら、額、首、胸へと順番に。

最後に背中へ回った。橙色の弱い明かりの中に浮かび上がるアシ
ユールの背中……。

……。

あー。

私は何も見ていません。

……って言つたら駄目ですか？

十九夏 ラウンド余波（後書き）

起きてそのまま押し倒せー！ とか思ったあなた、ごめんなさい。
じりじりしてください。笑
アシユールの背中には何があつたんでしょうか。

一十一夏 余波の余波の予感

「う……。

私は見たくなかった、気づきたくなかったものを前に途方に暮れていた。

しかしいくらこれは幻じやない?とか思つてみても、それが消えてくれるはずもない。

田の前のアシユールの背中……といふか、両脇あたりにははつきりと爪跡が。

ええ、私がやりました。つい、出来心で。

後悔も反省もしています。情状酌量はありますか?……なしですね、はい。

いやしかし、これは本氣の本氣でマズイ状況では?

肩口に歯型。背中側の両脇に引っ搔いたような爪跡。

……。

あはははははははは。笑つとけ笑つとけーあはははははははははは。

……すいません。

現実逃避もしきれず、一人冷や汗を流す私。全ての元凶は自分だ
というのに、目の前の現実が信じられずに遠い目をしてしまう。
もし明日アシユールが自分の身体に付いたありえない傷跡を見た
ら、ヤツは一体どうするんだろう。

まさか、いつものことだと受け流す？……いやいや、そんな最
低な人間ではないだろう。うん。そこは信じているぞ。勝手ながら。
じゃあどうする？…………きつと考えるよな、酔っ払って自分は何
をしたか、って。で、この傷跡の感じから言って真っ先に思い浮か
ぶのは……。へい。アレで御座いますね。ははははは。随分激しか
ったんですね、みたいな。はははははト笑えない！

その後、だつたら相手は誰ぞや？ つてことになつて、この家で
候補は二人。……私が、お母さんだ。

……。

嫌あああ！ お母さんとアシユールが……、とか想像したく
ないいいいいい！！！

つて、違うのはこの私が重々承知しておるところなんですが。
……泣きたい。

ああもう、明日ひと波乱ありそうなのは目に見えているじゃない
か！ 戻ろうかな！ アパートに！！

……いや駄目だ、もうすぐお盆だもん。お墓参りはしなきや。

……。

まさに進退二にに窮まれり。

私はがっくりと肩を落として、いまだに目の前でゆらゆらしてい

るアシユールの背中を恨めしく眺めた。

もうあれだね、これは、アシユールが背中の爪跡に気づかないことを祈るしかない。

肩の噛み痕も、着替えをするときに鏡のあるようなところじゃなければもしかしたら気づかないかも……。……おおー、そうだよ、

うん。気づかない可能性もあるじゃないか！ 何だ、大丈夫じゃん！ 明日はアシユールに付きつ切りで監視していればいいんだ！！

私つてば多細胞つ。……。

何となく多少の希望を見い出した私は、気を取り直してアシユールに向き直った。

こんなところに長時間いるわけにもいかないし、アシユールの着替えに専念することに決めて、脱がせたTシャツを手に取る。まだ少し浮いている汗を拭いてあげようと思つて。

幾分冷静さを取り戻したら、今度は傷痕じゃなくアシユールの身体に目を奪われた。

散々黄金率だなんだと罵つていた（誰が何と言おつと罵つてたんです！）けど、改めて見るとアシユールの身体は本当に綺麗だつた。隆起する筋肉は無駄無く陰影を作り、明かりを弾く肌は肌理が細かく爪跡以外の小さな傷さえ装飾品のように見える。

今は姿勢が悪いし力も抜けているから少し緩んでいるけど、何かスポーツでもすれば躍動する筋肉に目が釘付けになつただろうと思つ。

素直に、感嘆するしかなかつた。

……はい、そんな身体に歯型を残してすんません。爪痕も。

そうだ、じつくり眺めている暇なんてない。

「アシユール……。腕、上げて」

「……」

夢うつつを壊してしまわないよ、私は声を潜め、耳元でささやくように頼んでみる。アシユールはくすぐったかったのかピクリと小さく身体を震わせたけど、特に目を開ける様子もなく、操り人形みたいにゆっくりと、ちょっとだけ、腕を上げてくれた。すかさず、そおっと腕にTシャツの袖を通していく。

両腕を通して終わって、最後が問題だった。……頭、どうやって通せばいいの？

逆にすればよかつたが、とも思つたけど、どうせしろ後に通す方がやりづらくなるから一緒に。

暫く迷った挙句、私は意を決してTシャツの襟ぐりに外側から自分の腕を通した。それから膝立ちになり、アシユールの頭を抱え込むようにして、できるだけ頭に衝撃を与えないように固定しながら被せていった。

私の腕に触れるアシユールの白金の髪は綿糸のよう……と思つたら、意外と張りのあるしつかりした髪質だった。淡い色の所為で細く柔らかそうに見えていたけど、普通の男の人程度には硬さがある。でも傷み知らずの綺麗な髪だった。まったく、どこもかしこも……小瀆な！ 大体、傷跡も装飾品のようつて有り得ないから！ これでデベソとかだったら笑えるのに！ あ、こんなところにボタンが、とか言いながら押してやるのに！

余計な発見に驚きつつ腹立たしく思いつつ、一瞬このままTシャツを放してやるつかという悪魔のささやきが耳元で聞こえた気がする。顔面にビシイッとゴムぱっちゃん状態になつたらさぞ驚くだろう。

「……」

ダメダメ！ そんなことをしてもアシユールが目を覚ましたりなんかしたら、気持ちがスッとしたとしても、同時に私から色々なものが失われる……！

悪魔のささやきを振り払い、私は細心の注意を払つてアシユールにTシャツを着せていった。

大学の試験中と同じくらい集中した私は、なんとか頭も無事通り終わった。あとはTシャツの裾を整えれば証拠隠滅　いや、着替え終了だ。

裾を掴んで、屈みながら腰まで引っ張る。そのとき、こつりと肩に当たるものがあった。

「…………」

アシユールが完全に夢の中に旅立つたのか、額を私の肩に乗せていた。ついでに何故か両腕が私を軽く包むように背中に回ってきて、かなり慌てる。

そのままざるすると体重が掛かつてきただから、私は焦つて背中に回った腕を外すと、アシユールの首に手を添えて身体をそつと横に押した。逆らわず、アシユールは布団の上に倒れ込んだ。我ながら物凄い早業であつた。背中に回った腕にあんまり力が入つていなくてよかつたよ。……危うくまたしても下敷きになるところだつた。

気持ち良さそうに寝息を立てるアシユールを見、あまりの暢気な寝顔に軽く顔を引き攣らせた私は小さく拳を上げて殴る振りをしながら立ち上がつた。

それから当初の目的だった行燈を消し、私は無事、客間といふ名の危険区域の脱出を成し遂げたのだった。

もう本当に絶対に決して余計なことはしないことに誓います！

！！

……本気でそう誓つたんですが、人生とはままならないものなの
ですね……。

一十一夏 余波の余波の予感（後書き）

なんとか切り抜けて、夜の（一人）すつたもんだけは一応終わり。
六花の所為であんまり甘くならなくて申し訳ない。
こ、これからです！ これから……！
しかし六花の明日やいかに。

「孝太ーっ！」

「ツツーーー！」

私は叫びながら思いつきり遠慮なく弟の部屋の扉を開けた。孝太は驚いて、布団の上でピヨンシと飛び跳ねて起きた。

うん。只今朝の7時。朝っぱらから大声で叩き起こされれば当然の反応と言える。期待を裏切らないリアクションをありがと。見事な跳ねっぷりに顔がニヤつきそうになるが、そこはこれからの目的を考えて自重しておく。今回は別に受験ノイローゼ気味の弟を揶揄いに来たわけじゃないので。

「 つ姉ちやんツツーーー！ いきなり驚くだろー！」

心臓吐くかと思つた……。とか咳く弟を完全に無視する。心臓なんて吐けるわけがないでしょう。なんていう真面目過すぎる笑つ込みも飲み込んで。許可などいらん、とばかりにこすかずかと部屋の中に入り、ぐるりと中を見渡した。

「あつた」

目的のものを発見して、はああ、と深い溜息をつく。

昨日、洗濯物を押し付けたときは急いでいて気づかなかつたけど、確かに弟の部屋の壁には見たこともない服が掛けられ、そのちょうど下あたりに厳つい剣が立てかけられていた。これが昨夜、縁側で

お父さんが言つていたアシユールの所有物か。

そうなの、朝っぱらから弟を奇襲した私の目的はこれでした。

昨夜（主に深夜）は色々あつて、本気で死ぬかと思いましたけど、これは忘れてなんかいませんでしたよ。

悪気はなくてもアシユールから取り上げてしまつた、ヤツの衣装一式。

だけど服の方は、お父さんが言つていたキラキラといつよりも「ゴテゴテ？」確かにキラキラしている部分もあるんだけど、要職にでも就いていたのかと思えるくらい装飾过多で作りも凝ついている。結構複雑に布が組み合わされているみたいだから、すぐ説明がしづらい。

全体の色はほんの少し紫がかつた深めの落ち着いた灰色？ それで所々のポイントに安っぽくない金色や臘脂色が使われた装飾がある。使いこまれた皮のベルトのようなものも見受けられた。上着は基本的に詰襟型なんだけれど、首周りが余裕ありそうな感じに開いているから、内側の服を見せるようになつているのかもしれない。全体は秋や春物の「ートみたいな、少し厚めの生地みたいだ。

内側の衣装は首元から胸元までは深い赤のビロード生地になつていて、そこにも装飾品やらキラキラしたものやらがたくさんついていた。首回りには^{いぶしきん}燻銀のような渋みのある細かい彫刻の施されたゴツいシルバーの首輪みたいな……袖にはよく意図のわからないベルトのようなものが巻かれていたり……とにかくまあ、現代日本ではコスプレくらいしか存在しないような衣装なんだ（説明放棄）。

剣も同じで、西欧ファンタジーに出てくるようなヤツ？

まあ、何かよくわからないけど、確かにすごい。なんとなく孝太が興奮するのもわかるような気はする。

だけど、だからと言つて見逃すわけにもいかないのよ。

私はあまりの派手さにあんぐりと開けていた口を閉じて、孝太に

向き直った。

「……孝太、あんたコレ、直ぐにアシユールに返しなさい」

「は？」コレって、アシユールの服のこと？……何でだよ、急に

寝惚け眼のまま顔を顰める孝太にまた溜息が出る。やつぱり全然わかつてないな、こいつ。

「こんなの持つててどうするの？」

「……別に、眺めるだけだけ？ 何が駄目なんだよ、ちゃんと許可とつてるつて！」

眺めるだけ。

まあそりだらうね。でも、その眺めるだけのことが、今のアシユールは自由に出来ないでいるつてことだ。孝太は眺めてすごいなあ、つて思つだけだらうけど、アシユールはこれを見て故郷を懐かしんだり自分にはちゃんと帰る場所があるつて実感したりできる。重要性が全然違つ。だから、駄目。

「あのねえ、……孝太はアシユールが異世界から來たつて、信じてるんでしょ？」

そう言つと、孝太は訝しげに唇を尖らせながら肯定する。質問の意図がわからないらしい。いやいや、ちょっと頭を使えばわかるでしょ。というよりわかりなさいよ。……無理か。このサッカー馬鹿め。

私は溜息を零すと、孝太の勉強机の椅子に腰を下ろして、組んだ足の上で頬杖をつきながら孝太を見つめた。

「考えてみなさいよ。孝太がもし、家の前でサッカーして遊んでるときにどつか見知らぬ土地に突然飛ばされたとして、そこに住んでる人たちに新しい服着せられて、元々着ていたものとサッカーボールどっちも取り上げられたらどう思う？ いくらそこの人たちが親切でも、いつかは帰れるという保障があつたとしても、あんたにとつて日本に繋がるもののが服やサッカーボールしかないのに、簡単に預けちゃえるの？ 手元に置いておきたいとは思わない？」

ゆつくりと言い聞かせるみたいに聞いてみる。孝太は不満気ながらも少し俯いて、今私が言つたことを必死に想像しているみたいだつた。

「…………」

「…………でも、帰るときには返すんだぜ？」

最初の強気はどこへやら。多少思うところがあつたのか、こちらの反応を窺つようにして孝太は言つ。そんな上目遣いをしても駄目。お姉さまには効きません。……ちょっと頭を撫でてやろうつかと思つたけど。

「帰るときに持ち物を返すのは大前提でしょ。それよりも、こっちにいる間に返してあげなきや。

孝太にとつては珍しいものでも、アシユールにとつてはずっと側にあつた、今は唯一の大切なものかもしれないよ？

……孝太は、知らない土地、知らない人、知らない文化や食事に囲まれていつまで続くかわからぬ生活を始めたとき、せめてサッカーボールが側にあつたら、とか思わない？」

そう優しく聞いてみると、ちょっと考えてから孝太は肩を落とした。わかつたかな？

「……うん。確かに、最初はよくても段々つらくなるかも……」

私は今までとは違う意味で吐息を落とした。

うん。孝太も、悪気があつたわけじゃないのは私だつてよくわかつてゐる。孝太くらいの年齢では、周りの人たちの気持ちよりも興味が引かれることに意識が引き摺られるのは仕方ないことだと思うし。それでもわかつてくれたことに安堵して、私は椅子から立ち上がり、布団に座り込んだままの孝太の頭をポンポンと叩いた。

「わかつてくれればいいよ。孝太は言えばわかるし、反発してても相手の言いたいことちゃんと考えて納得できれば素直に受け入れるし、そういうところはすごいと思うよ」

普通は反抗心から見て見ぬ振りをしたり、意地になつて余計に駄目なことをしちゃつたりするけど。

孝太は考え方はずなところはあるけど、諭されれば理解できる頭もあるし、叱られても自分が悪いとわかればちゃんと謝つて態度を改めることも出来る。まあ、欲を言えば叱られる前に余計な行動はとるなと言いたいけど、まだ義務教育も出ていないのにそこまで求めめるのも酷だろう。これから少しづつ学んでいけばいい。

……人のこと言えた義理でもないんだけどね。たかだか二十歳の小娘が何を、と思わなくもないけど、気づいたことがあれば注意するのも年上の仕事だ。

とにかくわかつてくれたし、あとは本人に任せて孝太の部屋を出ようと歩き出したら、姉ちゃん、と呼び止められた。何だい何だい、お姉さまが恋しくなつたかね？ ん？ とか余計な茶化しを心の中で入れつつ振り返つた。

「姉ちゃんはさ、何でそんなに人の気持ちがわからんの？」

一一一夏 弟の反省、姉の所以 一（後書き）

またもアシユール出てこなくて申し訳ない！
でも孝太にも出番を……！

「姉ちゃんはさ、何でそんなに人の気持ちがわからんの？」

突然そんなことを言われて、目を瞬く。……これは褒められたんでしょうか？ それとも嫌味……じゃなさそうだな、雰囲気的に。よくわからないけど、孝太が微妙に落ち込んでいるようなので苦笑が漏れる。そこまでショックだったの？

「私が？ わかつてるかな、人の気持ち。言われるほどわかつてないと思うけどね？」

でもあえて気持ちがわかるって言うなら、それは孝太の姉だからじゃない？」

「え？」

自分の名前が飛び出したことに虚を突かれたような顔をする孝太を見て、内心笑いが零れる。だけど孝太の真剣さに応えて、私は考えるように首を捻りながら続けた。

「私は二十歳で、孝太は今十五でしょ？ 孝太が生まれたとき、私はもう五歳だった」

「うん。だね」

「もう五歳、って言つたけど、“まだ”五歳でもあつたの。それまではお母さんもお父さんも私に掛かりきりだったのに、孝太が生まれたらがらりと変わった。よくある話だけど、私も最初は不満で癪癪起こしたりもしてたんだよね。だけど、いつだつたかお母さん

が私に言つたの。『あんたが生まれたときも』『なんだつたんだから』つて。そつ言われて『こんなつてどんな?』つて思つてお母さんたちを見てみたら、何だか想像できたんだよね、自分が生まれたときのこと。

孝太の面倒を見るお母さんとお父さんは大変そうで、でも嬉しそうだつた。それからかな? 周りをよく見れば、何か気づかないことが隠れてるんじゃないかつて思つよつになつたんだと思つ。半分遊び感覚でね。

でもそれよりも大きかつたのはやつぱり、あんたの面倒を私も見てたからじゃないかな?』

『そういつてニヤリと笑つたら、孝太がうげつと嫌そうな顔をした。しばいしたろか。感謝をしなさいよ、感謝を。つて私がニヤついたからいけないのか。

『生まれてしばらくは当然、あんたは喋ることなんて出来なかつたし、喋れるようになつても感情が先走つてわけわかんなかつたりしてた。そういうの見てて、この子は今何を考えてるんだろう、とか、何を望んでるんだろう、とか自然と考えるようになつたんじゃないかな?』

私の言つことを聞きながら神妙な顔になる孝太にちょっと笑つてしまつ。そんな高尚な話をしてるわけじゃないのにね。

『……じゃあ俺にも妹か弟が出来たら、人の気持ち考えられるようなヤツになんのかな』

……なんて単純な思考なんでしょうが、孝太くん。

流石にそれは十五の男が考へることじゃないんじやない?

小学生でももつむつと発展的なことを考えるだらう。」

弟の将来が心配になりつつ、そんなお馬鹿な孝太を少しだけ可愛く感じてしまつ。どんなに生意氣でもお馬鹿でも血の繋がつた家族だもんね。 つてクサすぎる！ 私クサすぎるから！

自分の思考に恥ずかしくなつた私は、誤魔化すように孝太に囁く。

「よく考へて、孝太。これから妹が弟が出来るつてことは、あのお父さんとお母さんが……」

「う、うわああ！ 変なこと想像させんなよつ……」

「あははははは、『めん』『めん！』

急に真っ赤になつた弟を笑いつつ、腕を引っ張つてせつさまで私が座つていた椅子に孝太を座らせる。椅子の背をくるりと回して机に向かわせた。余計なこと考えてないで、まずは受験生の本分を全うしたまえ、弟よ。

「変なこと考へなくたつて、あんたも気をつけてれば人の気持ちもわかるようになるよ。……大体、私だつて完全に人の気持ちなんてわからないんだし。とにかく、あんたは眞面目に勉強でもしてなさい。もうすぐ朝ごはんだしね」

「……わかつたよ」

ただアシユールの衣装を返せと言いに来ただけなのに変に深いような浅いような話になつてしまつて、むず痒い気持ちになつた。なんか、お父さんといい孝太といい、アシユールが来たことで妙な話ばかりしていいるような気がする。別にこんなちよつと突つ込んだような話をする家族でもなかつたのにな。

さていい加減私も部屋に戻るつか、と踵を返したら、ポケットから軽快な音が流れてきて思わず足を止める。メールだ。

さつと皿を通して、直ぐに白けた気持ちになつた。

「……壱樹^{いっしき}め。私は伝書鳩^{てんしゆづる}じゃないつづの」

受信ボックスを開くと、今は県外に出ている例の幼馴染からのメールだつた。

『盆前に帰る。

むつはもう帰つてるんだり?

ついでに母さん伝えといってくれ。

よろしく^ ^』

確かに隣のおばさんは携帯を持っていないからメールなんて出来ないだろうけど、電話があるでしょ、電話が！

そういえば去年の夏も私が伝言したんだつた、と人遣いの荒い幼馴染を呪つていると、孝太が後ろから人の手元を覗き込んできた。

「イツ キ兄帰つてくんの！？ やりい、サッカー付き合つてもらおー！」

またサッカーかよ。勉強しろよ。
とは思つたもの。

「お好きにどーぞ。じゃあね、孝太。ちゃんとアレ、早めにアシユールに返しておきなよ？」

あの親にしてこの子ありだな、とか思いつつ、アシユールの服を指差して念を押してから、私は孝太の部屋を後にした。

ひと仕事終えた気分で階段を降り、廊下を歩いていたら、片手に

着替え（らしきもの）を持ったアシユールが洗面所に向かう姿が見えた。

ちよつ、今から着替えるつもり！？

鏡のある場所は勘弁してーつ！！ と、私は慌ててヤツを追った。

一一一夏 弟の反省、姉の所以 一一(後書き)

20歳にしてはちょっと擦れたような、しつかりでぢやつかりな思考も持つてゐる六花が出来上がつた理由、でした。

五歳も差がある弟妹がいると、きっと自然と面倒見が良くなつたり、人の感情に敏感になつたりしますよね。

とはいへ一部の感情には鈍いように見えてゐるかと思ひますが。笑
そして新キャラフラグ。

閉められたようになった洗面所の扉の隙間に、急いで手と足を滑り込ませた。

そこから無理矢理に口を開け、きょとんと目を瞬くアシユールに引き攣った笑顔を向ける。

「おはよ、アシユール！……き、着替えるの？」

「……」

「うくうと頷くアシユール。

どうしてそんなことを聞くんだ？」と、うつむいて首を傾げている。

「いやはい、その反応はご尤も。

しかしこれは私の洁券に関わる問題なので、どうか黙つて聞いて欲しい。

「私これから洗面所使うからー アシユール着替えるだけなら部屋でもいいよね？ ね？」

長い腕を引っ張りながら囁つ。

ああもひ、早くそこから 出て来いやッ！ と、うつ何処かのプロレスラーのような言葉は、胸のうちに収めておこう。ここは出来る限り真面目に低姿勢にいじりじやないか。……若干不本意ではあるが。

しかし痴女扱いを受けるのはもっと不本意である。そんな称号を貰つちゃうくらいなら、いけ好かないアシユールに頭だつて下げる

れる。……いや無理かも。あは。

でも私なりに覚悟を決めてお願いしているのに。

私の希望に反してアシユールは動いてくれない。踏ん張つてゐるわけでもないのに、必死に引っ張つても動かない。おいこいら、お前は石像か！ みなさん、こんなところに石像がありますよー！ 壊してもいいですかっ！

梃子でも動かない様子に若干イラッとしてしまつたが、いやいやダメダメ怒るな六花冷静に！ と自分に言い聞かせる。怒りに任せてアシユールを攻撃したら、反撃されて洗面所から締め出されちやうかも。それはダメだ！

怒りを静めるために歯を食いしばりながら、相変わらず引き攣る笑顔で「どうして動かないのかな？」とアシユールを見たら、ヤツは節ばつた長い指でお風呂場を示していた。

なんだ、お風呂か、なら問題な……大有りだわ莫迦！

お風呂入つたら、正面に鏡があるし、お湯を使って鏡が雲る前に肩の赤味には気づいてしまう。その上、深夜から今朝に掛けての数時間じゃあ、もしかしたら背中の爪痕が沁みるかも！？ そしたらアシユールは、何か痛えなー、とか思いながら鏡で確認して、おいおいコリヤア何の冗談だ？ ってなもんで爪痕にも気づいちゃつたりして！？

……。

無理！
ダメ！
絶対つ！！

お風呂から出てきたアシユールにからかい倒される自分を想像し

て、背筋がぞわりと総毛だつた。

ああでも忘れてたよ！ 確かに昨日（今日…）の夜アシユールは結構な量の汗を搔いていた。じつとこりとうよりも珠のようになんでいたから、そりゃあシャワーの一つも浴びたくなるよね。今は夏だし、身体もペたペたして気持ち悪いだろ？

だけどこりちだつて譲れない。

ただ引っ搔いただけ、齧りついただけ、という痕なら何ら問題ないけど、今回のは如何せん場所が悪すぎる！ あらぬことを想像させるには絶好のポイントをチョイスしましたね、おめでとう…。と誰かに褒められるくらいに破廉恥。ポイントに痕をつけてしまったのだ。

ことの起じりが深夜の家族全員が寝静まつてゐる時刻だった所為で、事実が無くとも誤解だと主張しづらいものがある。むしろ誤解を受ける時点で不名誉過ぎる！

だから、傷がバレたら私は大変、大つつ変困るのだ。

だけビシャワー浴びるなんて許さん！ とか、流石にそこまで理不尽なことは言えない……。

もう、どうしたらこいつのアシユールの腕を離せないままうろつうと視線を彷徨わせていたら、タイミングよく廊下の先からお母さんの声がした。

「 朝ご飯できたから食べなーい！」

あああああ、天の助け……！

「ほ、ほらアシユールつ、ご飯だつて！ シャワーなんて浴びてたら冷めちゃうし！ バラバラに食べたら片付けが出来なくてお母さんも大変だからね！ ね！？」

言いながらも「一度腕を引っ張ると、今度は抵抗なくアシユールが脱衣所兼洗面所から出てきた。

お母さんありがとう… 本気で！
後で肩でもなんでも揉んであげるからね…！

心の中でお母さんを揉み倒しつつ、私はアシユールの背中を押して居間へ向かおうとした。

「…………」
「 わふつ！」

なのに、アシユールが何故か途中でぴたりと立ち止まり、そんなに腕に力を込めていなかつた私は思いつきりヤツの背中に突っ込んだ。……出会つて三日、顔面強打は一回目です……。ちなみに後頭部は三回強打しております。

……正直、これだけ酷い仕打ち（半分以上は不可抗力だけど）を受けていると、アシユールの身体に傷をつけたことはもはや全く悪いと思わない。昨夜は申し訳ない、とか殊勝なことを思つたけど、今は全然まったく、これっぽっちも謝罪する気持ちは御座いません。むしろ自分のお綺麗な身体についた傷を見て啞然とするアシユールの顔を見てやりたい、くらいの気概がある。

しかし傷痕が発覚すると結果的に私の首が絞まるのだ。好奇心より自分の身の方が大事。それは自覚しているものの、この怒りはどこへぶつけたら……。

アシユールの背中に追突したまま、痛みと憤りにウーッと呻つていると、くるりとアシユールが振り返つた。寄りかかっていた回転ドアが急に動いたような状態になり、支えを失つて少しだけよろめいてしまつた。けど、なんとか踏ん張る。

恨みがましくアシユールを見上げたら、またしても不思議そうにヤツが私を見下ろしていた。……なんだよ、私の奇行は今に始まつたことじやないでしょ？ 自分で言つて悲しいけど……。

「何よ？」

「……」

瞼を尖らせ、不満も露わに問いかければ、アシユールはじつとこちらを見つめてから、スッと私の背後に視線を向け、不思議そうに何かを指差した。

……。

ちよつ、怖つ！

あそここに幽靈が、とか言わないでよね！？

「……」

びくびくしながら振り返ったのに、後ろに何も無かつた。

おいら、脅かすにもほどがあるー。

流石に抗議の一つも言つてやろうと振り返りつつしたら、肩を押さえられてそのまま押し出される。私は押されるまま数歩進んで、何すんだ、と今度こそ振り返った。

「-----？」

アシユールは何か言いながらまた何処かを指差した。つられて視

線をやると、すぐそこには洗面所が。

「.....」

あー。

.....。

使いませんけど。

って言つたら、不自然過ぎるでしょ？
これって所謂墓穴を掘つた感じですか？

いやいやそんなことはない。

まだ誤魔化せる！ 何故なら今は.....、

「ああ、うん、洗面所ね？ 私も朝ごはん食べてから使つから、
いいのいいの！」

そう言つて手を振り、アシユールを問答無用で居間まで引つ張つ
ていった。

家族全員プラスいちで朝ごはんを囲つてゐる間、私は悶々と考え
ていた。

一応わつきは何とか危機的状況を回避できたけど、あれはあくまでその場しのぎに過ぎない。突つ立つてゐるだけで汗がキレイに洗浄されるわけでもなし、アシユールは絶対またシャワーを浴びたが

ると思うんだ。遠慮はどうした、と思わなくもないけど、一ればっかりはクサイ方が迷惑だと思ったのかもね。

さてそこで問題。さつきは洗面所使いたいとか言ったけど、ずっと洗面所を占拠しているわけにもいかない。何とかしてアシユールにお風呂を使わせずに汗を流させる方法はないものか。

「…………」

「ひそり嚙まずに白いご飯を飲み込むアシユールを視界の端で眺めながら、私の足りない頭にふと閃くものがあった。

一一二夏 不名誉回避に向けて（後書き）

六花はまたきっと口クでもないことを考へ付いたに違いありません。

一十四夏 ミッションインポッシブル？

「アシユール！」

朝食を終え、お母さんと一緒に後片付けをしていたアシユールが客間に戻つて来たところを捕まえた。

私は後片付けをしないのか、つて？

え、だつてあれつてシンデレラの仕事でしょ？

私の今の仕事は客間の前で仁王立ちしてアシユールを待つことだもん。着替えなど取りに行かせてたまるか。あ、いや、着替えくらいはいいのか、うん。

待ち構えていたように私に声を掛けられたアシユールは、きよとんと目を瞬いでいる。今日はよく見る顔だな。

……それだけ私の行動がおかしいの？

いやいやそんなまさかあはははは。

……。

わかつてるよッ！ 挙動不審なのは！

でもそんなこと今はどうでもいいのッ！

「ね、アシユールその髪、鬱陶しくない！？」

「……」

唐突に私は切り出した。余計なものを一切省いた、実にスマートな走り出しである。

アシユールは私の若干鬼気迫る感じに引きつづき、首を傾げて自分が白金の髪を摘み上げてしげしげと見つめたりしていた。相変わ

らず、^{むし}筆りたくなるほど綺麗な髪だ。……十本くらいならいいかな？いやいやそれは半分冗談だけど、なんか意外と無頓着そうだよね、アシユールって。髪の毛もなんとなく伸びるに任せてるっぽい雰囲気がある。

アシユールの髪は、前髪は瞼を超えるくらいあって、襟足も長め。ウルフカットって言うのかな？ ああでもトップは短くないから、純粹なウルフカットではないのか。でも襟足は一番長い部分で肩を超えるくらいあるから、日本の一般男性の髪を考えると随分長いよね。前髪も然り。

もともと綺麗な顔立ちだから、髪が長いことで中性的な顔に見えなくもない。ただ、体格がいいので女性に間違えるなんてことは絶対無いけど。

とにかく、夏も真っ盛りだといつのに襟足が長いのは暑いと思うんだよね。

「私が切つてあげるー。」

「……」

胸を張つて言つたら、アシユールの眉間に皺が寄つた。……おいこら、その反応はどういう意味だ。明らかに私の腕を信用してないな。手先だけは器用なんだからね、私！

困つたよう眉尻を下げて一步後退するアシユールに、私はこめかみがピクリと痙攣するのを感じながらも、忍耐強く、しかし一步ほど詰め寄つた。

アシユールの失礼な態度にいつもなら悪態をつくところだけど、目的のためには我慢！ そして逃走されないように腕もがっちりホールド！ 本当は両腕を拘束したかったけど、私の片手で掴むには太い腕なので、左腕だけ両手でしつかり握り締めてやりました。どうだ振り払えまい！

「大丈夫！ これでも大学進学で家を離れる前は孝太の髪の毛だつて切つてあげてたんだから！ あ、友達とかのも切つてあげてたよ。概ね評判だつたよ…」

「…………」

若干名、切り方の練習をさせてもらつて失敗したこともあるけど、まあ、ど素人ですし。失敗の一いつや一つ、可愛いものだよね。あは。アシユールは「“概ね”評判」と言つたあたりでどことなく唇の端を引き攣らせたような……いやいや、私の眼には大歓迎の笑顔に見える。いつも通り、キラキラしてらつしゃいますから、何も問題はない。心眼つて言葉は素晴らしい。

「夏なのにそんな長い髪じや暑いでしょ？ 汗搔いたときも首に張り付いて気持ち悪いんじやない？ 私に任せて！ そんなお悩みは全部解決してあげるから！ うん！」

「…………」

一瞬、アシユールの世界では男女問わずにんまり髪を短くするのは駄目、とかいう風習があるのかな、なんて思つたけど、アシユールの態度はそういう意味での拒否じやないみたいだから、大丈夫だろう。

それよりも、また一步ヤツが後退したから、一いちらも負けじと再度一步詰め寄つてやつた。逃がさん。

しかしアシユールが一步後退する度に一步迫つていたら、何やら近くなりすぎた気がする。ヤツを見上げるのに首が痛い。でもまあいいか。背に腹は換えられないというし。色々と圧迫感を訴えて逃られなくなるにはもつてこいだ。たぶん。

「…………」

あれ？ 圧迫感、感じてます、アシユール？ なんかむしろ見下ろされている私が圧迫感……つて口う、見下ろすなよ！

内心無茶を言いつつ、若干アシユールの腕を下に引っ張つて目線を合わせるように促しつつ、私は続けた。ぐいぐい引っ張つてたらちょっとずつアシユールが中腰になってきた。……笑える。

「そんなに心配しなくても平氣だつて！　あ、一年以上も前までの経験だから心配なの？　そこは本当に大丈夫。何せ元力いやうん、大学でも友達の髪切つてあげてたから…」

「……」

元力レ、と言いつくになつて慌ててやめた。

そんな妙な情報をアシユールに与えて、それをネタにからかわれたら堪らない。どうして別れたとか、理由を詮索されたりするのも御免である。……つて、そこまで私に興味もないか。いやでも、何だか弱みを晒すよつてイヤだ！

「あ、そうだ、証拠あるよ！　確か携帯で写真撮つておいたんだ

「……」

お尻のポケットに入れていた携帯を取り出して見せる。何か物珍しそうに眺められた。主に携帯を。

そういうえば、ウチは高校に上がってからじゃないと携帯はダメという家庭内ルールがあつたから、孝太はギリギリ持つてないんだよね、携帯。お母さんもお父さんもあんまり新しい機械は得意じやないみたいだし。つて、今はそこは注目しなくていいんだよ！　写真を見なさい、写真をつ！

「ほら、ね？　綺麗に切れてるでしょ？」

「……」

電子画面には高校の女友達の写真が映し出されている。じーっと画面を見つめていたアシュールは、じーっとアシュールを見つめる私にちらりと視線をくれてから、ようやく納得したのか小さく頷いた。なんか溜息が聞こえた気がするけどこの際聞かなかつたことにしてやるわ。観念したならいいんだ。

「うんうん、賢明な判断だよアシュール！ 流石だね！ よつ、この、金髪ロン毛野郎！ はははははー、よじじやあ、縁側のところで切るねつ。外に椅子置けば髪の毛落ちても気にならないしー！」

「…………」

私はアシュールに台所の椅子を一つ持つていぐよつに伝え、その他必要なものを調達しに走つた。

別れるときになんか物凄く不審げな眼を向けられた気がしないでもない。……私何かおかしなこと言つた？ テンションが上がつていたので、何を口走つたかあんまり覚えてないんだけど。

ところでどうして急に髪を切つてあげる、なんて言い出したかって話だけど。それは簡単。

髪の毛切つた後、ついでに頭も洗つてしまおう、といつう魂胆なんだ。そこまでが一連の作業です、みたいな感じで。

ただ頭を洗つてあげる、って言つより自然でしょ？ んで、頭を洗つてしまえばお風呂に入る必要は無いわけだ！ お風呂に入らなくて済むなら、裸の状態で鏡だつて見なくて済むわけです。つまり昨夜私がしでかした失態もばれません、と。

しかし問題は身体。身体の方が汗でペタペタして気持ち悪いと思うから、頭を洗つただけじゃ、結局シャワーを浴びたくなると思う。だからそこが一番の悩みどころなんだけど……。

でもこれも朝ごはん中に頭を働かせて解決しているのです。

文明つて素晴らしいよね。

科学の力、バンザイ！

みんな、思い出してみて欲しい。
スポーツの後なんかに、一時じのぎで使うアレを。
いまや女子にも男子にも愛用者は多こはよ。

そうです。

汗拭きシートがあるじゃないか！

という話なのです。

かなり強引かつ、アシュールが汗拭きシートとか似合わなさ過ぎるけど、お父さんのお古の服とか草^{くたび}臥れたエコバッグとかのことを考えれば、かわいいものだよねっ！

もちろん、今日のところはこの私が汗拭きシートの使い方を手取り足取り説明してあげる所存でござります。

当然背中は上手く拭けないだろうから、このわたくしが僭越ながら拭いて差し上げるつもりです。

私が爪でつけてしまった傷をこっそり避けて。

そしたらアシュールが誤つて傷に触れて沁みたりして、コリヤ何だおい俺誰かに襲われるぜ！的な展開は避けられるはず！ついでに肩だってさり気なく手を置いておけば、噛み痕もバレない！
素晴らしい計画！！

汗だくになつた後にシャワーも浴びられないアシュールは少しだけ可哀相な気もするけど、ここはしばらく我慢してもらいたい。私だってギリギリのところで自分の洁券を保つてているのだ！

といふことで、とにかくハッシュ開始なのである。一

一十四章 ミッションインポッシブル？（後書き）

六花は毎日アシュールの身体を拭いてあげる気なんでしょうか。
おバカさんで下さいません。孝太の姉なもので。

アシユールの首にきつちりタオルを巻いて、大きめの洗濯ばさみで固定する。

その上から切込みを入れたゴミ袋を巻いて、タオルと隙間を空けないように留めて服に切った髪の毛がつかないようにした。身体が多少はみ出てる部分は後で粘着テープとかを使えばいいよね。

「アシユール、長さの指定とかある?」

「……」

念のため聞いてみたけど、アシユールは少し考えてから首を横に振った。

……指定がないならこの際、バリカンで思い切って坊主とかどうよ?

実はこいつそり、バリカンも用意してたりする。念のためよ? 念のため。

アシユールは坊主なんでしたことないだろ? し、新たなことに挑戦するのもいいんじゃない?

そう思つて、私はバリカンを手にした。スイッチを入れるとウイーンッと激しい振動音が鳴る。腕も鳴る。ふふふ。

「あ、アシユール始めるよ。危ないからジッとしててね!」

「……!」

鼻歌混じりにバリカンを構えたら、何かを察したらしいアシュー

ルがガタンッとけたたましい音を立てて立ち上がった。……どうでもいいけど、その恰好、結構笑えるね。ビニールポンチヨ、みたいな？ しかも透明なゴミ袋だから、シースルー状態！

「…………！」

アシユールが必死で私から距離を取りながら、何かを叫んでいる。うん、何を言っているか全然わからんない。えへ。

じりじりと距離をつめる私と、じりじりと後退するアシユール。この構図どこかで見たな、なんて思いながらにやにやする顔を抑えられずに迫っていた私だけど、アシユールの背後の盆栽が危険なことに気づいて、慌ててバリカンを下ろした。盆栽壊したらお母さんよりも怖いお父さんが出現する！

「はははは冗談だよ！ これは使わないから！」
「…………」

シースルーポンチヨのまま疑わしげにこちらを見るアシユールの姿に笑いを噛み殺し、バリカンのスイッチを切つて縁側に置いた。両手を挙げて見せたら、アシユールは盛大な溜息を零しつつ首を振つて疲れたように椅子に座り直した。うん、勘が鋭いのも大変だね。

実際、アシユールの坊主というのも見てみたかったけど、アシユールには流石にハードルが高いかと思つてやめた。美形は何をしても美形な気もするけど、自分の世界に帰つたときに揶揄われたりしたら可哀相だ、っていう私のささやかな良心が疼いたしね。

じゃあどういう髪型にしようか、つてちょっとだけ悩んだけど、どんどん田も高くなつてきて暑さも増してきたから、とにかくハサミを通すことにした。

最初にハサミを入れるときはいつも緊張する。何せビ素人だし。アシユールの髪の毛は、Tシャツを被せるときに不可抗力で触つたけど、改めてじっくり触れるとなつぱり綺麗な髪だ。張りがあり、太すぎず硬すぎず。今みたいに長い状態だと重みでしつとりサラサラのストレートに見えるけど、案外しつかりした髪質だから短く切つたら自然と立ち上がるかもしれない。整髪剤いらないかも。もちろん、ちゃんと整えようと思つたらスプレーとかムースがいるかもしづないけどね。でも確実にハードはいらないはず。……髪の毛までオールマイティとか、どこまでも隙の無いヤツ。可愛げも無い！ もつとダメダメなくらいが私は……って何の話だコノヤロウ。とにかくど素人ながら、友達や孝太の髪を切つていた多少の経験を踏まえてつらつらと考えながら、ハサミを進めた。

シャキシャキと小気味いい音がする。

アシユールは伏し目がちで静かに身を任せていた。

髪と同じ色の睫毛も長く、伏せるとまるで憂いを含んでるみたいに見える。……変なところで妙な色氣を出すんじやないよ、まつたく！ こつそりハサミが滑つたとか言つてちょん切つてやろうかと思つたけど、後で私が酷い目に合ひそつたからやめた。主にお母さんの激怒に合いそう……。つ。娘より美形男をとるなんて！ まあそんなことはどうでもよくて！

アシユールは注文を付けたくても日本語喋れないから出来ないだろうし、内心冷や冷やしているかも、と思つと少し笑えた。

まあ見ていたまえよ、六花様の腕前を！

最初は不純な動機だつたけど、時間が経つにつれて他のことは頭になくなつた。

一メートルもない近距離にいながら、一言も交わさずに髪を切り続けて、一時間弱くらいで完成した。我ながら慣れたものだ。

「出来たよー！」

「……」

縁側に置いておいた卓上用の大きめな鏡を取つて、一枚をアシユールに渡す。もつ一枚をゆっくり動かして後ろも見せた。

「どう？ 結構上手くこつたと思つんだけど」

「……」

全体に短くしてしまおうかとも思つたんだけど、万が一失敗したら修正が効かないから、前髪を残して短くなりすぎないようにした。襟足の長かつた部分は刈り上げるくらいの勢いでかなり短くして段差をつけたけど、両サイドは耳上あたりで切り揃えて、サイドから前髪に向かつて少し長くなるような感じに。

前髪は整える程度にしか切らなかつたけど、後ろが無い分、大分涼しくなつたんじやないかな？

「……！」

鏡を見たアシユールは少し驚いたように目を見開いていた。
やつぱ私の腕を信用してなかつたんだな。いやまあ、最初は揶揄つたりしちゃつたし、いいけど。

「気に入つた？」

覗きこむと、破顔して頷いてくれた。気に入つてくれたみたいだ。
頷いた拍子に切つた髪の毛が少し飛んで太陽に反射し、キラキラと舞い落ちてアシユールの周りで妙な効果を生んでいた。
……捨てるものまで綺麗とか、どんな？ やつぱバリカン……いやいや、しつこいからやめよう。うん。

でもやつぱり喜んでもらえるのは素直に嬉しい。今だから言づけ
ど、ちよつとドキドキしたんだよね。失敗したらマズイなあ、と
か。ほら、そんなことになつたら、今後アシユールに強い態度も取
れなくなるじやない？ 事ある毎にそれをネタに脅迫されそうだし
……。それは私的に非常に困るのだ。色々と……なんか負けたく
ないし。アシユールに頭が上がらない私とか、想像したくない！
だから気に入つてもらえたことに内心ホッと胸を撫で下ろしつつ、
アシユールの頭を軽く払つてから被せていたビニールを外した。首
に巻いていたタオルも取つて、首元に張り付いている毛を落とし、
一度振つてから、アシユールのこめかみやら首やらに浮いた汗を拭
つて上げた。

「あら、アッシュ、随分すつきりしたわね！」

さてこの後は……、とか思つていたら、通りかかったお母さんが
口元に手を当てながら声を掛けってきた。なんか目がキラキラしてゐ
けど……！ むしろ頬までほんのり染まつてゐるだけだ！ 気持ち
悪いからやめてくれないかなあ？

笑顔で頷くアシユールを横目に見ながら、引き攣る顔を隠すよう
に後片付けをする私。母親の乙女な部分は子供としてはあまり見た
くないものである。しかもその対象がすぐ横にいる場合はさうじ。お母さんは弾む声で言つた。

「髪の毛の切れ端がついてるかもしねないから、直ぐにシャワー
を浴びるといいわ。着替えは持つてつてあげるからね」

「……」

ちよつと待つたああああああ！

お風呂は駄目だつて言つてゐるぢょーーーー

あ。

言つてはないか。

一
一十五夏 ファースト・ミッション（後書き）

坊主でもよかつたんじゃないかな?

「お母さん… 着替えはいいからー。」

「？ どうして？」

不思議そうに聞き返されて言葉に詰まる。

まさか、お風呂には入らせないからー。とも言えない。そんなことを言えれば、ほぼ間違いなく阿修羅やらなんやらが出現する。怖い。ああもう、朝ごはんのときはお母さんに助けられたけど、今は逆に窮地に立たされているとか、世の中上手く出来てますね！ 何事も中庸、ってか！？ いや中庸の使い方微妙に間違ってるし。

わけのわからない」とを考えつつ、咄嗟にアシユールの腕を引っ張る。

「どうせだから、私が頭も洗つてあげよ」と思つてー。」

「……」
「……」

う。

一人してじつとじりじりを見るのはやめてください。

わかつていますよ、おかしなことを言つてるのはー。
普段の私のアシユールに対する行動を考えれば、ここまで構い倒すなんてどんな風の吹き回しだ、って言いたいのもわかるー。

だけどこれにはちゃんとした理由があるのだが、理由が… 言え
ないけど…！

「私つてば、シャンプーも上手くなつたのよ。大学で元…友達の頭をついで洗つてあげたりしててね？ シャンプーもカットも出来るなんて、もしかしたら私、美容師になれるかも、なんて！ あはははは」

「…」
「…」

いや全国の美容師さん、その卵さん、ごめんなさいっ！

そんな甘い職業じゃないのはわかつてますが、ここのは私の苦しい言い訳に使わせて！ 苦しい言い訳とか自分で言つてる時点で泣けてくる私に、同情してください！

「アシユールもほら、擬似美容院体験が出来るじゃないあははは
はは」

「…」
「…」

なんか一人の視線がちょー痛い。そんな、不審者を見るような目はやめて！ 私の空笑いに痛々しそうに眉を顰めるのもやめてくださいお願いします。

というか、約一名、唇の端がひくりと動いたの、私は見逃さなかつたぞ。なんか知らないけど、私の拳動不審を面白がつててるでしょ。アシユール、君だよ！ 明らかに笑いを堪えてているの、気づいてますけどつ！？

掴んだ腕を抓つてやられたかと思つたら、するりと逃げられてしまつた。内心舌打ちしてていたら、突然ぐいっと肩を引き寄せられて視界がぶれる。何事？

「 - - - - - 」

アシユールがお母さんに何か言って、そのまま私ごとクルリと方向転換すると、縁側から家に上がり、洗面所に向かつて歩き出した。引っ張られる形になつていた私は縁側で躊躇になつたけど、アシユールが何でもないことのよう抱き上げてくれたので転ばずに済んだ。上手い具合にサンダルも脱げたので家の中を汚すこともなく……つて、これ全部計算しての行動だつたら怖いな。……偶然だよね？ 偶然！

まあそんなことはビビッちでもよくて！ とにかくこれつて、頭を洗つてあげるという私の主張をアシユールは受け入れた、つてことだよね。

さつきまで人のことを不審げに見ていたくせにそれこそどんな風の吹き回しだ。まさか何か企んでいるんじゃないよね？ かなり身構えてしまつたけど、よく考えたら私にとつては願つたり叶つたりなので、結局は便乗することにした。

縁側で取り残されて田をしばたいているお母さんに慌てて叫ぶ。

「椅子とか後で片付けるから！」

主にアシユールが。

とか胸のうちでちやつかり付け加えつつ、アシユールに引っ立てるまま洗面所に向かつた。縁側で抱き上げられたのはわかるけどもう下ろしてくれてもいいんじゃない！？

そんな感じで洗面所に着いたはいいけど、本当の美容室じゃない

から当然そのままシャンプーが出来るわけじゃない。だって、背凭れが倒れる椅子とか無いし。

だからと言つてアシユールに屈んでもりつて洗うのは流石にアシユールが可哀相だ。洗面台はそんなに高くないから腰に負担が掛かりすぎるだろ？ じゃあお風呂でやるか、なんてことにはなるわけもなく。思案した結果、かなり面倒なことをするハメになつた。低めの丸椅子の上に座椅子を置いて、それだけじゃ不安定すぎるるので、背凭れの下に支えになるようにもう一つ、丸椅子よりも少し高さのある椅子を台所から持つてきた。それらを組み合わせてなんとか安定を図つたんだけど……。

正直、自分でもここまでする意味を見い出せないデス……。

自分自身でさえそんなんだから、アシユールならなおさら、ここまでして俺の頭を洗いたいのか？ イツは、とか思つていそうで、実は準備をしている途中あたりからあんまり顔を見られなくなつた。色々突つ込まれるのも御免だ。にやにや笑いなんて見た日には、アパートに逃走してそのまま帰つて来れなくなつちゃうかもしれない。恥ずかしいやらムカつくやら情けないやら。乙女心つて複雑だよね。……乙女心つて何？

ドツボに嵌まつてゐる自分に落ち込みつつ、気を取り直してアシユールの洗髪に取り掛かつた。

家は純和風で古いものだけど、洗面台は二年くらい前に配水管が壊れたときに新しいものに取り替えたばかりだ。なので周りからは浮いてゐるけど、蛇口が伸びるようになつていてシャワーになると、いう便利な機能がついていた。現代人の朝シャン用の設計だろうか？ 何はともあれ、今の状況からすると大助かりだ。

シャワー機能のお陰でシャンプーもスムーズに流すことができる。

これが古い洗面台だつたら、お湯を手で掬いながら流さなきゃいけないから、中々泡を落とせないところだつたよ。

洗い始めてから直ぐ、アシユールからは小さく吐息が零れた。早く洗えとばかりに自分でわざわざ私を洗面所まで連れて来たのに、微妙に緊張していたらしい。

まあそんな緊張も私のファインガーテクニックを前に長くは続かなかつたというわけだけど。

「……ねえ、アシユールは人から頭洗つてもううの、初めてなの

?
「……」

なんとなくそんなことを聞いてみたら、目を薄つすらと開いたアシユールが小さく頷いた。

ふーん、と氣のない返事を返したけど、私は内心驚いていた。

実は私は、異世界でのアシユールは身分が高かつたんじゃないかと思っていた。身のこなしを見ていて、どことなく落ち着きというか品のようなものを感じていたから。背筋だつて猫背になつているのは酔つ払つて寝惚けていたときくらいだし。

よくあるじやない？ 身分の高い人は何人もの女人にお風呂も介助してもらつていて、身体とかも自分では洗わない、みたいな。なんとなくアシユールもその口だつたりして、とか考えていたんだけど、どうやら違つたみたいだ。何故かホツとしている自分に首を捻りつつ、その後は特に何も喋らずに洗髪を終えた。

終わつたよ、って声を掛けたら、アシユールが眠そうに目を開けたので、ちょっと笑つてしまつた。

一十六花 セカンド・ミッション（後編）

そろそろデジボの終着点。

「アシユール、やつぱりまだシャワー浴びたいよね？」

タオルでがしがしと頭を拭いているアシユールを見上げて、自分で話題を振る。これは避けて通れない話題だし、私の取るべき行動は一つなので、さっさと終わらせてしまった方がいい。

タオルの隙間からこちらを見たアシユールはちょっと首を傾げている。どうしてそんなことを聞くんだ、とでも言いたげに。いや聞くでしょ、普通。朝からシャワー浴びたがってたし。え、もしかしてもうシャワー浴びたくなくなつたの？ 頭洗つたから必要ないって？ いやいやそんなはずは。頭洗つただけで身体もすつきりするなら、ボディソープとかいらなーし。

「汗搔いてたし、身体ペたペたするでしょ？」

私の問いに頷かないアシユールを怪訝に思いながら尋ねたら、何故かまたしても頷かないままジッと見つめられた。

だから何の視線なの。こっちを見るな。

あまりに凝視されるもんだから田潰しでもしてやろうかと危険なことを考える。もちろん本気じゃないので一本突き出した指はこつそり仕舞い、代わりにアシユールの腕に触る。

そんなに酷いものじゃんだけど、アシユールの腕はやつぱり多少はペタペタした。頭だけすつきりしても、身体がこんな感じや気持ち悪いだろうに。

「ほら、ぺたぺたしてんじゃん。ショッパンぐらに汗搔いてたし、
気持ち悪いでしょ？」

「……」

「……？」

え。

私、何かおかしなこと言いました？

私の台詞を聞いた途端、髪を拭いていた手を止めたアシユールが片眉を上げ、なんか物凄く複雑な表情をした。

驚いたような、呆れたような、困ったような、感心したような、照れたような？ ついでに笑いを噛み殺したような？ あとちよつと嬉しそう……？

とにかく全部をひつくるめて表現に失敗したような顔。

何、どう？ 私に『ぺたぺたしてん』って言われたのがショックだつたとか？ いつも爽やか好青年で通しているのに、汗の余韻がバレて恥ずかしかつたとか。

いやでも女の子あるまいし、そんなこと気にしないよねえ？ それに、孝太に付き合わされて炎天下の外でサッカーしているときも平気で汗だくなつてたし、それで帰つて来たときに『うわあ、汗だく！ 寄らないで！』とか二人ともに向かつて私が叫んだときも反応は苦笑するくらいだった。

汗搔いてたのは事実で、しょっぱかったのも本当。

ということは、『気持ち悪いでしょ？』と言つたところをアシユールは曲解して、私がアシユールを気持ち悪いと思ったように捉えたとか？

……いや苦しいよ。苦しいでしょ、この解釈は。

どう考へてもアシユールがそんな被害妄想的な捉え方をするとは思えない。しかも、もしこの解釈が正しかつたとしたら、照れと笑いと嬉しさの表情はどつから来たの、つて話になる。自分を気持ち悪いと言われてそんな感情を見せるやつはドのつくHムの人しか有り得ない。

えー。もしかしてアシユールつてそつちの人？

「冗談半分でそんなことを考へていたら、なんだかよくわからないけど、アシユールが勝手にダメージを受けたように顔を片手で覆つてしまつた。

まさか私の思考が読まれたとかないですよね？

一人じんわりと冷や汗を浮かべる私を他所に、大きな溜息をついたアシユールは心持ち肩まで落としている。なんか物凄く憂いを感じるけど、アシユールがなんでそんな状態になつたのか全く意味がわからない。誰かこの人の頭の中を説明してくれないかな。

私は理由のわからないアシユールの行動に物凄くモヤモヤしつつ、それでもヤツの肩を叩いてやつた。

「なんだか知らないけど、元気出しなよ

「……」

指の隙間から恨めしげな視線が飛んできた。

おいこら、慰めてあげてるのに何でそんな怖い顔するんだ。私何も悪くない！

恩を仇で返された！とか大袈裟なことを考へながらも、いつまでも洗面所に籠もつてゐるわけにもいかず、私はアシユールの腕を引つ張つて廊下に出た。

「とにかくちょっとさ、部屋で待つてて。シャワー浴びたいだろうとは思うけど、髪も洗つたし、身体洗うだけにお風呂入るのも面

倒でしょ？ そんなときのための便利グッズを持ってきてあげるから…

私つて優しい！ そう言ってアシュールを置き去りに、私は二階の自分の部屋にダッシュした。

急いで目的のものを手に密間に飛び込むと、アシュールがTシャツを脱げりとしているところだった。

「ちょっと待った！」

大慌てでアシュールの腕を押さえ込む。

危なかった！ 勝手に脱いで歯型やら爪痕を発見されたら、これまでの努力が全て水の泡に！

「ほら見て、これ。これ使えば、汗を拭き取れるだけじゃなくて肌もサラサラになるし、すっごくいい匂いもするんだよ！」

「…………」

製品会社の回し者のようにメリットを上げ連ね、ピンク色のケースをアシュールの目の前にずすりと差し出す。

ふんわりと甘いピーチの香りが漂った。ピーチの香りが……

「…………」

「…………いい匂いでしょ？」

「…………」

ものすゞく微妙な顔をしつつ、アシユールはぎこちなく頷いた。
あー、うん。わかる。わかります、その気持ち。
たつた今、私も思ったよ。

ピーチの香りを纏つアシユール……？

……。

微妙！！

だがしかし。これしかないから我慢してもうしかない。私は桃
が大好きだ！ 桃バンザイ！

何か言いたそうなアシユールを無視して、ケースの蓋を開ける。
途端により濃厚な桃の甘つたるく、そして可愛らしい香りが匂い立
つた。

あー、完全にイメージはピンク色。めるへんピンク。ろまんちっ
くピンク。乙女色ピンク。

まるでケースの周りに蝶々の飛び回るお花畠が広がったような気
がした。

一層眉尻を下げるアシユールと、愛想笑いを浮かべながらシート
を取り出す私。

何だろ？ 何かとても大きな間違いを犯している気がしてならな
いんだけど……。いやいや、たとえアシユールと桃の香りの組み合
わせの違和感が半端なかろうと、わが身可愛さには見て見ぬ振りを
するしかない。痴女扱いは困ります。

私は意を決して、アシユールのTシャツに手をかけた。

何となく逃げ腰に見えるアシュールに愛想笑い全開で詰め寄る。

「私が全部してあげるから、アシュールは田を瞑つてて？ 絶対に開けちゃ駄目だからね？」

……いよいよ危険な香りがしてきたと感じたのが、どうか気のせいありますよ！」……。

一十七夏 ラスト・ミッション（後書き）

危険な香りしかしません。ピンク色の。

アシュールが複雑な表情をした理由、伝わっているでしょうか…？

アシユールが目を瞑つたのを確認して、Tシャツを脱がす。相手の意識がある分、深夜のときよりもずっと脱がし易かつた。現れた肌は夏の日差しを反射して白く煌く。なんて美白。こいつは今、美白に励む全日本女性を敵に回したな。

……いやそれは無いか。

むしろ日本人女性のほとんどが味方につくに決まつてる。なんたつてこの顔だ。日に透ける白金の髪に同色の長い睫毛。トラブル知らずの理想の肌と絶妙に配置される顔のパーツ。ビラやつたつて奇麗としか言いようがない。

小癪な。

あ。もちろん私は“ほとんど”には入らないからね？ 男なら小麦色に焼けたくらいが健康的でよろしいと思いますよ。はい。いやうん、私の好みなんてどうでもいいね。机の奥深くに追いやられた元カレの写真よりもどうでもいい。……あれ？ もう既に燃やして捨てたんだつたつけ？ まあいつか。どうでも。

私はまずアシユールの露わになつた腕に汗拭きシートを添わせた。言いたくないけど最初はちょっと緊張していたみたいだ。妙にゆっくりと撫でるように汗を拭き取つていた。だけど途中からもどかしくなつた。というか、ゆっくり丁寧に拭いている自分が居た堪れなくなつてしまつた。これじゃあまるで私がアシユールに仕えるメイドさんか何かのよう。

そうだよ、ここはパパッと終わらせる場面じゃないか！ 何をやつているんだ私は！ むしろ垢すりの「」とくガシガシやつてやつて

もかまわんくらいだよー！

我に返つてちらりとアシユールの顔を窺つたけど、俯き加減のヤツは大人しく目を閉じて身を任せている。……かと思つて、薄つすらと目が開いていた！

「ちよつ……！」

おい、口か、歯あ食いしばれ！ じゃなかつた、田え閉じろ！ と言おうとして、慌てて言葉を呑む。

声を発したことでアシユールがこちらを向こうとしたから、慌ててアシユールの肩に手を乗せた。ベシッとか結構な音がしたけどどうでもいい。たぶんあとで赤くなるだろんくらいには勢い余つちゃつたけど、孝太が今何処で何をしているかよりもどうでもいい。

……あれ？ あいつ朝ご飯のとき居たっけ？ まあいいか、どうか（

略

それよりも本当に、危なかつた！

私が何でアシユールの肩を叩い……触つたかつていつと、もちろんその下に昨夜つけてしまつた歯型があるからだ。

悔しいことにアシユールの肩あたりまでしか身長のない私なので、アシユールがこちらを見下ろしたら、肩の噛み痕が視界に映つてしまつ！ 間一髪、隠せたからいいけど。

アシユールは私の暴挙を怒るでもなく、愛想笑いを浮かべる私を暫く見つめた後、ほんの一瞬だけ自分の肩に置かれた私の手を見て、直ぐに無表情かつ無言で顔を正面に戻した。

無表情かつ、無言で。

もう一度言おう。

無表情、

かつ、

無言で。

……。

何でしじゅう？ この沸々と胸に湧き上がる怒りは。

もう少しリアクションをとって頂きたい！ と思うのは私の我儘ですか。

というか、そもそもなんで無表情よ？

物凄く感情の抜け落ちた顔は怖くすらあつた。

見たことのないアシユールの様子に眉を顰めつつ、物凄く腹立たしく思いつつ、こんな状態（アシユール半裸）で詰問するわけにもいかなくて、私はヤツの身体を拭ぐのに集中することにした。決してアシユールの無表情が怖かったわけじゃないよ？ ツツコム勇気が無かつたとかじやないからねつ？

深夜に行燈の頼りない明かりのもとで見たアシユールの身体だけど、窓から燐々《さんさん》と差し込む夏の太陽のもとだと、無数の傷がやけに目についた。

深夜のときだつて爪痕以外の傷には気づいていたけど、今は薄暗がりよりもよく見える。改めて見たらその多さに少し驚いた。

均整の取れた奇麗な身体には間違いないし、隆起し無駄を省いて筋すら浮かぶ筋肉も美しさの見本みたいで、それはいたるところで散らばる傷にだつて侵されない。傷がどれだけあってもアシユールの身体を醜いなんて思わない、思えないってことだ。

だけど、私は思った。

ああ、この人はこの世界の人じゃないんだなあ。つて。

こんなところで実感してしまった。

身体に出来た傷はたぶん、ほんとが刃物による切り傷だ。桜色に浮き上がるそれらは小さいものから私の掌ほどの長さのものまでたくさんある。目を瞪るほどに大きな傷はないけど、それでもこの数は異常だった。

今はきれいに塞がり、か細い筋のような名残しかない。でも負つた当時はきつと結構な血が流れたはずだ。

私も一人暮らしを始めた頃、自炊のために包丁を使って手を切つたことは何度もある。ほんの一センチほどの傷でも痛かったのに、アシユールの身体にはそれを超える大きさの傷がいくつもあるんだ。

私が想像もつかないような危険を潛り抜けて来たに違ひ無い、つて思つて、少しだけアシユールを遠く感じた。

なんとも言えない不思議な気分になりながら、今は考えないようにして次々とアシユールの身体を拭いていく。

両腕が終わつて、正面に回つてからハツとした。

さつきまでは平氣だつたのに、急激に顔が熱くなるのを感じる。

ああああ、これつて何？ いま私、何してんの！？

全つ然、いけないことをしているわけでもないのに、妙に胸の奥がむずむずする。

さ、触つちゃつていいんだろ？ いやいや、アシユールがよくても私は触る勇氣がない！

夜のときよりも明るい口差しの中の方が羞恥心が増すのはなんだらう？

ああそれにしてもこんな間近で見ているのもいいものなのか。力レシでもないのに。……いや駄目でしょう、何か色々と。と散々葛藤した挙句、正面はあとでアシユールに自分で拭いてもらうことにな

した。

何処の誰だらうね？『全部私がしてあげるから』とか言ったお嬢さんは、どうせ私は口だけですよ、けつ。

顔に集まる熱をおさめられないままやさぐれた気分に陥りつつ、アシユールの背後に回る。

そこには紛うことなき昨夜の爪痕。比喩なんかではなく。奇麗に四本の赤い線が平行に走っている。血が滲んだらしく、濃い赤茶の瘡蓋かさぶたが薄つすら出来ているところがあつて、羞恥心に代わつて申し訳ない気持ちが浮上する。

そういえば最近、爪切りをサボつていたから私の爪は凶器なんだつた、と今さらながらに思つてしまつた。

シートを新しいものに替えて広い背中を拭き始める。爪痕の部分は特に慎重に、傷に触れないように気を配りながらシートを滑らせた。

そこで、ふと気づく。

あれ？ なんか……揺れてる？

せつかく傷を避けているといつて、手元がブレてやり辛い。なんでだ？ とか思いながら視線を上げたら、アシユールの肩がふるふると震えていた。

え。な、何？

もしかして痛かったの？ いやでも、こんなにたくさん傷をこなしている人が、爪痕に触れるか触れないかくらいの些細な痛みに肩まで震わせる？

疑問だらけでアシユールの正面に回ると、

ちよ、笑ってる！

アシユールは思い切り笑いを堪えていた。

何よ、もしかして脇弱かつたとか？

呆然とアシユールを見ていたら、一頬り笑ったアシユールが、まことに込み上げる笑いを振り切るかのように俯けていた顔をあげた。銀河の瞳に笑みの余韻を宿したまま、一步踏み出す。正面にいた私は思わず仰け反った。

「ちよ、な」

何よ、と混乱のまま叫ぼうとしたけど、その先は言えなくなつた。

「！！」

踏み込まれて重心を踵に乗せていたのに、その足を思いつきり払われた。それはもう、スパンッ、と小気味いい音がするほど遠慮なく。

気づいたときには仰向けに転がっていて、私の上にはイイ笑顔のアシユールがいた。

何でこうなった？

私は呆然とアシユールを見上げる。

思い切り足払いを受けた割りにどこも痛くないのは、床に倒れる前にアシユールが背中と足を支えてくれたからだ。

……って、“くれた”とか言つてる場合じゃないよね！？ 明らかに蹴倒したのはアシユールだし！

というか結局、 何でこうなった？

四度目の後頭部強打は避けられたけど、問題はそこじゃない。

さつきまで私はアシユールの身体を自分が仕出かしたことへの少しの罪悪感とともに、丁寧に拭いていた。これでも一応、考えなしの行動だったと反省はしているもので。

それが、突然アシユールが笑い出して、何だコイツは脳みそ爆発したか？ とか思つて、さううちに今の状態だ。

……。

えー？ 何で？

状況を整理してもやつぱりわからない。どうして私は畳の上に倒されたんでしょうか？

混乱のあまりいつもよりも冷静に（混乱して冷静になるとか意味わからないけど）なつて、呆然と頭の中で考えていると、しばらく楽しそうに そう、物凄く楽しそうに じからを見ていたアシユールが徐に動き出した。

なつ、に……つ？

大きく厚い掌が頬に添えられた。

丸い形をなぞるように滑る。

目の前に迫る、楽しそうに細まつた銀河がほんの少しだけ揺らいだ気がした。

それでもアシユールの手は躊躇わざに顎のラインを撫で、するりと首筋を伝う。

触れるか触れないかの瀬戸際で、全ての感覚が持つていかれるみたいだ。

背筋を何かが駆け上がった。

無意識に眉が寄り、定まらない視点を誤魔化すために目を細める。

ヤバイ

その単語がわんわんと頭の中で反響した。

だけど機嫌よく踊る銀河の瞳からは目が離せない。

私得意の悪態は何処にいった？

もしかして開店休業中？

いやいや開店してるなら休業すんな！

罵倒が振るわない。

脳みそが働いていないのがわかるというものだ。

頭も回らなければ口も開けず、身体すら自由に動かせない。

私は馬鹿みたいにアシユールの瞳を見つ……睨んでいた。

その間もアシユールの手は止まらず、首筋から降りてきた指先が鎖骨の満みをなぞり、肩口までいってまたゆっくりと戻ってくる。

思わずぶりな動き。

産毛に触れるだけのよつた微かな感触が余計に熱を残していくようで、腹が立つのに振り払えなかつた。

鎖骨と鎖骨の間、その溝をぐるりとひと撫でした指先が身体の中

心を通り、肋骨に沿つて進み、わき腹を撫でた。

倒れた拍子に捲れたTシャツの裾から覗く肌を、指先が直接掠める。

「つー！」

ひくつと喉が鳴りしそうになつたのを寸でのところで我慢した。

意味がわからない。

何でこいつなつた……？

繰り返す言葉も意味はなくて、ただ胸の内で浮遊しては消えていく。

ぐつと唾を飲み込んだのは私のはずなのに、視界の端でアシユールの喉仏が上下するのを見た気がした。

休憩とばかりに脇腹でほんの少し停滞していた右手が動きを再開する。

腰を撫でて、ホットパンツに到達し、皺を越えていく。

剥き出しの太腿に硬い皮膚の感触。

信じられない。

ヤバイ。

空気が薄い。

誰かエアコンつけて！

妙に熱気が籠もっている気がする。

脳みそ溶ける！

そう叫びたいのに、きゅつきゅうと喉を締め付けるような感覚が邪魔をした。

力加減はずつと変わらず、触れるか触れないか。

その状態で膝の辺りまで滑つていったアシユールの掌は、再び上昇を始めた。

唇が乾く。

そうは思つても舐めて湿らせることが出来ず、私は固まつたまま、ひたすらアシユールの底の見えない銀河を覗いているしかなくて。

その銀河の深遠に焰が点つたような気配を感じた。

気づけば私の心臓が無駄に過労気味だった。

まるで身体の中から警鐘を鳴らすみたいに内側から胸を打ち鳴らす。

また

私が出来ないでいることを、アシユールがやつてしまつ。形のいい理想形の唇から真つ赤な舌が覗いて、ちらりと自分の唇を撫でていつた。

ほんのちょっとその妖しげな仕種に気を取られている間に、腿を上つてきたアシユールの手がホットパンツの裾で行き止まる。行き当たつた裾を正面から外側に向かつてなぞるように動いた指先が、僅かに裾を潜つた。

たつた一センチほどだけど、そこは隠されている場所だ。下着や水着にでもならない限り人目に触れない。

そんな部分に、自分ではない人間の 男の指が、そつと滑つた

んだ。

「 あつ！」

堪えきれず声が洩れてしまった。

蚊の鳴くような声でも間近にいるアシユールには聞こえたらしい、事態を招いた当人がハツと息を呑んだのがわかつた。まるで田が覚めたみたいな反応だ。

どこにトリップしてやがった、精神だけ故郷に帰つてたとか言つわけじやあるまいね！？

信じられないことに、私の呼吸は乱れている。

何でだ。

口に出来ないようなポイントを直接的に刺激されたわけでもないのに。

混乱にブレる私の視界とは逆に、どこか焦点が狂つっていたようなアシユールの瞳には力が戻り始めていた。

対照的な二つは短時間交差して、先に逸らされたのは闇より深い銀河の方だった。

さつと一瞬下がられた金の頭。

切つたばかりの白金を流して次に見えたアシユールの顔には、
… 悪戯っぽい笑みが広がつていた。

何……え？

濃密な空気が霧散した。

アシユールはにこにこしながら未だに自失していた私の両手を取り、一層笑みを深くして私の手を背中へと導く。

状況についていけずされるままの私。

アシユールがゆっくりと上体を倒し、太陽光に照らされた眩しい美貌が降りてくる。

私はそれでも動けなくて、ついにアシユールとの距離がゼロになつた。

「……」

「……」

誰か説明してくれませんか。この状況。

後頭部を支えられ、少しだけ浮かされた私の頭。

口元は……、アシユールの肩口に当たられている。

うん、私が何がなんでも隠そつと画策していた歯型にぴったり合わせるよつこ。

先に誘導された両手はたぶん、間違いなく、爪痕に合わせられていると思われ。

……。

だから何でこうなつた！！

一人とも我に返つていただけてようござんした。

三十夏 現実は甘くない

何でこうなったっ！？

いや、前話と同じ出だしで申し訳ない。
しかし聞いて欲しい。
むしろ聞かせて欲しい。

今、現在の体勢の意味はナンデスカ？

……。

わかつています。

おかしな雰囲気になつていたところから一変して、わざわざアシ
ュールがこの体勢をとつたのには、もちろん理由があるんだろう、
つて。

当然ながら、私の歯型や爪痕と無関係なはずがない。
アシュールは意識的に私の頭を自分の肩に持つていつたんだし、
手だつてあえて誘導したんであつて偶然なんかじゃない。

つまり何だ。

全てバレていたと？

抱きしめられるみたいに頃を支えていた手がゆっくつと下ろされ、アシュールが私の顔を覗き込む。

いやこせと形のいい唇が弧を描き、瞳が何かを期待して踊っている。

真っ白になつている私を余所に上体を起こしたアシュールが手を伸ばしてコンコンと行燈を叩いた。

それは昨日の深夜、私がこの部屋に入る切つ掛けとなつた忌まわしい行燈に他ならない。

つまり何だ。

全て覚えていりと？

確かに、酔っ払つて寝惚けていたからといって、記憶が完全に飛びとは限らない。

かくいう私も、ふらふらになるまでお酒を飲んだところで、記憶は消えない方だ。いやうん、二十歳になつたばかりでふらふらになるまで飲むなよ、って話なんだけど、そこはそれ。ツツコミはなしの方向でお願いします。誰しも経験することでしょう。

昨夜のことをアシュールは何も覚えていないはずだと思った、それは私の落ち度だと思う。お酒を大量に飲ませたのは私だし、寝惚けてもいるみたいだつたから、記憶なんて残らないだろ?と思つてゐた。

それが、まさか行燈を消しに来たんだら?と予測を立てるアシュールはつきりと覚えていたなんて。

でもじやあ何?

今までの私の行動つて?

私が必死にアシユールの身体につけてしまった傷を隠そうとしているのに、アシユールは気づいていたわけ？

いつから？

どこから？

違う、そんなの問題じゃない。

大事なのは、アシユールは全部知つてたのに私の行動を止めなかつたつてことだ。

その理由に考え至つたとき、カツと身体に熱が集まつた。アシユールに身体をなぞられているとき以上の熱。

羞恥心とか、腹立たしさとか、情けなさとか、そんな類の感情で目の前が赤くなる。

「～～～つ！」

ずっと、自分で意味不明になるような馬鹿な行動をとつていたと思つ。

途中何度も自問したくらいには、自覚があつたつもり。でもそれだつて、私自身が恥ずかしい思いをしないためには必要だと思つたから出来たことで。

だから、アシユールが昨夜の記憶を持つているなら全然話が変わつてくる。

要は、私は余計なことをしまくつたわけだ。

アシユールが一人でお風呂に入るのを阻止して、延長線上で髪の毛を切つて洗つてあげて。

その上、私は何をした？

アシユールのTシャツを脱がせて身体を拭いたんだよ！

身体の不自由なおじいちゃんおばあちゃんでもなく、カレシでもない男の身体を、だ！

改めて考えればなんて恥ずかしい行為だろう。

何も知らない男が相手なら、勘違いをしてもおかしくない行動だつた。

朝から周囲を纏わりついて、せつせとお世話を。

そんなこと、女の子にされたら男の人はどう思うだろう。

そうだ、そう考えると、アシユールがもし何も覚えていなかつたら、私を蹴倒してあんな破廉恥な行動を取つた理由も理解できる。

私の行動を自分に気があると勘違いして、据え膳食わぬは男の恥とでも思つて手を出してきた。そう説明がつく。

でも実際、アシユールは全部覚えていた。

それは、私が何を目的にしてアシユールを構い倒し、拳動不審な姿を晒していたか、つていうことにも気づいていたつてことだ。

アシユールにモーションかけていたわけじゃない、つて知つてたはずだ。

それなのに、どうして誘われていると勘違いした結果のよつた行動をとつたのか。

答えなんて一つしかないじゃないか。

アシユールは、内心笑つていたんだ。

私が必死に右往左往して傷を隠そうとしている姿を見て、笑つていた。

そう考えてみれば、髪を洗つてあげるのだとお母さんの前で必死になつていたとき、笑いを堪えていたのはどうしてだつたのかがわかる。

始めは私の行動がおかしいからだと思つたけど、そうじやなかつたんだ。ううん、私の行動は確かに可笑しかつたんだろうけど、それだけじゃなくて、傷を隠そうと必死になつている私が面白くて仕かる。

方なかつたんだ。

髪を洗うのを了承してくれたのだつて、私があまりに馬鹿な行動ばかりとるから、どこまでやるのか見てやる'つとしたに違いない。

それだけじゃない。さつきだつてそうだ。

私がアシユールの身体を真剣に拭いているとき、こつちを向いたアシユールから噛み痕が見えないように肩を抑えた。それを随分無表情に眺めてアシユールは正面に向き直つたけど、あればきっと笑いを堪えている結果だつたんだ。

込み上げる笑いを殺すには、何も喋る余裕がなくて、かつ無表情になるしかなかつたんだろう。

背中を拭いているときだつて、何か揺れてるなつて思つて前に回り込めば、アシユールは盛大に笑つていた。ついに笑いを堪えられなくなつたつてわけだ。

アシユールは、ずっと私の行動を笑いながら見てたんだ。

まだある。

私を畳みに蹴倒して、身体を撫でたこと。

きつと、あれば私をからかつて面白がつていたんだ。

私の行動の意味なんて本当は全部知つているくせに、誘われたと勘違いしたみたいに振舞つて見せて、呆然とする私の反応を見てまた笑つていたに違ひない。覆い被さつてきたときに見えた銀河色の瞳が踊つていたのは、そういうことだつたんだ。

もしかしたら、もっと動搖して顔を真っ赤にさせる乙女な反応を期待していたのかもしれない。生憎、こつちは恥ずかしがるほどの余裕もなかつたけど。

つまり、私はずっとアシユールに踊らされていたつてわけだ。知らずのうちに、笑いものになつていたわけだ。

サイアク

田まぐるしく考えて全ての帰結に達したとき、サッと頭から熱が
引いていくような思いがした。

私、馬鹿みたい

「……っ」
「！」

私は思いつきアシユールを押し退けた。

アシユールは既にほとんど上体を起こしていたし別に私を押さえ
つける気もなかつたようで、簡単に私から身体を離した。

にこりともしない私に驚いたのか、少しだけ目を見開いているア
シユールの顔が視界に映つたけど、真正面からそれを確認すること
もなく、私は客間を後にした。

無性に腹が立つて、何も考えられなかつた。

ただ胸のうちで、馬鹿みたい馬鹿みたい、と、そればかりを繰り
返していた。

三十夏 現実は甘くない（後書き）

お怒り。

アシュールきょとん。

三十一夏 大人の意識、子供の心

最悪な気分とはこのことだ。

せつかくの大好きな夏も心が冷んやりしていて台無し。

いつもなら気温が上がるほどに夏を実感して嬉しくなるのに、今はその熱気がただただ鬱陶しいだけだった。

アシユールの部屋から逃走……じゃなかつた脱走……でもなかつた、えーっと、とにかくアシユールを客間に置き去りにしてからの半日、私は物凄く嫌な気分でその日を過ごした。

自然、仏頂面になる顔を隠せず、そんな私の顔を見た孝太の顔が引き攣つて『怖え！』とか言つたのは知つていて、でもそんなアホ孝太に姉的制裁を加える気分にもなれず。

孝太でそれだから、当然アシユールなんかとは目も合わせない。そんな心の余裕は微塵もなかつた。

自分の必死の行動が実は散々笑われていたんだと気づいて、それでも笑顔で過ごせる人なんているんだろうか。少なくとも私は無理。

しつかり触られたわけじゃなくても身体をからかい混じりに撫でられて、動搖している私を面白がつていたのかと思うと女の子として怒り、憤り、羞恥以外に覚える感情なんてない。まんまと混乱して息まで乱していた自分を殴り飛ばしたい程度には、自分にもがつかりしていた。

だから、ただの悪戯だし許してやるつじやないか、なんて直ぐに思えるはずもない。

私の愚行を見て黙つて楽しむにしても、アシユールは色々と趣味

が悪すぎる。

正直、どこかでアシユールに失望も感じていた。

たつた三日でも、私はアシユールの大まかな人となりを把握したと思つていた。

ヤツはどんなに大人気なく私に対抗してきて、結局は私よりもずっと大人で冷静なんだろうつて、悔しいけど認めてた。

ちゃんと越えちゃいけない境界とか、女の子に対する加減みたいなものをわかつているんだと思つてたんだ。そういう部分を、凄いな、つて感じた。

なのに、女の子に圧し掛かつてあらぬ予感を起こさせるような行動をとつて、それで動搖する様を見て面白がるなんて、男として最悪だ。

それに、もしも私が本気にならざるする気だつたんだろう。

有り得ないけど、私がアシユールの動きの挑発に乗つて、“その気”になつていたら？

そしたら応えていたんだろうか。あんな真昼間の、すぐ近くを孝太やお母さんが通りそうな場所で？ むしろ襖さえ簡単に開けられちゃうような場所で？

だとしたら、最悪どころか最低だ。

じゃあ逆に、もし私が“その気”になつていたら、拒んでいた？

“その気”になつたのにアシユールに拒まれたら、私は大恥をかいていたはずだ。

女の子なら誰でも、余程慣れてでもいなければそういう行為に大胆になるのは抵抗があるはず。それを押して応えようとしたのに、肝心の男から拒否されるなんて心が折れる。しかも、相手から誘われたのに。

そうなれば、やっぱアシユールは最低だったと思う。

私が混乱して何の反応も出来ないでいるうちに種明かしがされたけど、そうじやなかつたらヤツは一体どうしていたんだろう。

からかうにしてももつと他の方法がいくらでもあつたでしょ、つ

て言いたい。

ただ私の奇行を笑われていたと知つただけなら、あるいは羞恥心だけですんだかもしね。

でもあの行動を考えると、頭も胸もぐるぐるして嫌な気持ちが渦巻いてしまう。

無害そうな顔をして心の中で大爆笑でもしていたのかと思うと悔しくて、むかつ腹が立つてアシユールの側に寄る氣にもなれなかつた。

喋れない変わりに心の中では私で遊ぶ計画でも立てていたんじやないかとまで思えてくる始末。

黒い気持ちは止め処なく湧いた。

それでも私だつて年齢的には成人していて、世間では大人と言われる人間だ。

アシユールを避けてはいても、出来るだけ無視なんてしないようにしたし、用事があればちゃんと話しかけたりもした。お母さんの伝言を持ってきたときだつて、しつかり対応したと思つ。

ただ以前のように他愛のない話やちよつかいをかけたりはしなくなつただけの話。

それはアシユールも同じで、時々は視線を寄越しているのを感じたけど、あれ以来アシユールから寄つてくることはなかつた。

でももちろんアシユールがそうするのは私とは違う理由だろ？。私の急な態度の変化に戸惑つてしていることくらいはわかる。私は空気が読める方だといつかに豪語した通り、アシユールから微妙な雰囲気が漂つてきていたのは感じていた。

私の動向が気になつてゐるんだろうといつても、私の動きに合わせたようなアシユールの視線の動きを感じるから簡単に察しがついた。

それでもあえてそんな視線に気づかない振りをしたのは、午前中のことがフラツシュバツクする所為だ。肩を震わせて笑いを堪えて

いたアシユールの姿が臉裏を刺激して、嫌な気分になる。

アシユールが何度か口を開き、何かを言いたそうにしていることにだつて気づいていたけど、それも視界に入らなかつたことにしてさつさと側を離れる、ということを私は午後中ずっと繰り返していた。

すごく嫌な雰囲気でその口を過ごし、課題があると言つて夕御飯後には早々に自分の部屋に引き上げた。私を除いた食卓に妙な空気が流れているのにも当然気づいて、でも見て見ぬ振りで受け流した。

胸に澀のように溜まる不快な気持ち。それを無理に振り払うようにして無理に眠りについた翌朝、お陰様で寝坊した私は一日連続でラジオ体操に参加できなかつた。

朝に身体を動かせなかつたことも手伝つてか、日にちを跨いだにも関わらずまだ私の気持ちは晴れなくて、どうにもアシユールと接するのを躊躇する。

我ながら、引っ張り過ぎなことは自覚していた。

ちょっととからかわれたくらいでネチっこく怒つてアシユールに冷たい態度を取つていてる自分は、どんなに大人だと口で言つても、実際は駄々を捏ねる子供と大して変わらないんだろう。

不満があるくせに相手にそれを直接伝えることもせず、ただ態度だけで表す。それでいて、接触を拒む。相手からしたら溜まつたもんじやないだろうと思う。

ああでも、私は子供よりもよっぽど性質が悪いに違いない。

アシユールが日本語を喋れないのをいいことに、謝りたそうにしているのを無視し続けているんだから。

大人になりかけの子供ほど面倒なものはないと、他人事みたいに思つた。

でも。

本日は、翌日の朝を迎えて頭が起き出した頃、気づいていた。

アシュールは別に私を笑いものにしようと思つていたんじゃない、つて。

一晩明ければ、嫌な気持ちは残つても思考は冷静さを取り戻す。

というよりも、このままじや駄目だよなあ、という漠然とした思いに冷静さも加わって、大人になりかけの心が考えることを促すんだ。

……本当は、考ることで何処かにアシユールを許せる切つ掛けを見つけたかったのかもしれない。

私だつて嫌な雰囲気を長引かせるなんて本意じやないから。許せる要素を無理に探そうとするくらいなら、さつさと気持ちを入れ替えてしまえばいい。

そつは思つても、簡単にそれが出来ないんだから仕方がない。我ながらホント、大人にも子供にもなり切れないなんて面倒なことこの上ないとは思うけど……。

ラジオ体操には出られなかつたけどそれなりの時間に目覚めた私は、ほんやりと昨日のことを考えていた。

改めて思い出してみると、自分の行動がいかに馬鹿げたものだったかがわかる。

朝からアシユールのお風呂を邪魔して、朝食後には客間の前で待ち伏せしていきなり髪の毛を切つてあげると親切の押し売りのようなことをした。

カットが終わつてもまだ擬似美容院体験だんだと下手な言い訳でアシユールの髪を洗つて、終いにはアシユールの身体を制汗シー

トで拭き出して。

アシユールにつけてしまった傷を隠すのが目的だったにしても、そこまでやる必要がどこにあったのか、という話だ。

実際、アシユールだってそう思つたから、最終的に笑いを堪えきれなくなつたんだろうと思つ。

私の馬鹿な行動に付き合いながら、必死に込み上げる笑いに耐えていただらうアシユールを思い出す。

でも、ふとそこで違和感を感じた。

昨日……アシユールは最初に私が洗面所に乱入したとき、不思議そうな顔をしていたよね。

客間の前で待ち伏せしていたときもそう。切れ長の目を丸くしてぱちぱちと瞬いていた。戸惑いとか困惑まではいかないけど、その瞳には私に対する純粋な疑問が浮かんでいた気がする。

そういえば、洗面所を使うという私のついたその場しのぎの嘘も信じていたつけ。

……うん?

あれ、どう考へても笑いを堪えているようには見えなかつたんだけど……。

私は首を捻りながら、もう一度昨日のアシユールの様子をきちんと思い出してくださいました。

昨日の私は朝からずっとアシユールに笑いものにされていたと思っていたけど、何か違うんじゃないかと思い始めていた。

冷静に思い返してみれば、昨日の朝のアシユールはビームでも普通の態度だつた。

さつき思い出したとおり、少なくとも洗面所に乱入したときのアシユールは無理矢理笑いを堪えているとかではなく、一人慌てる私に不思議そうな視線を寄越していいるだけだつた。

ということは、もしかしてこのときアシュールはまだ、私がいつもより自分に構つてくる理由をわかつていなかつたんじゃないの？ 確証があるわけじゃないけど、でも私の行動を面白がつてゐる素振りはなかつたよつて思つ。

髪の毛を切ると言つ出したときも同じだ。

笑いを堪えているというよりも、警戒してゐる感じだつた。

明らかに私の技術を疑つてゐたみたいだつたし、最初は拒否していたよね。

最終的には私が押し切る形でアシュールも了承したけど、あんまり乗り気とは言い切れなかつたよ。

その状況を楽しんでいるような気配は感じなかつたんだ。

実際、髪を散切りにされたら堪つた物じゃないと思つたのかもしれないけど、それでも心の中で笑つてゐるなら、もう少し違つた態度になつたんじゃないのかなあ？

だつて、私の行動理由をしつていて、それでも髪を守りたいならさつやとあの時点でも種明かしをしてしまつても良かつたくらいだ。肩や背中の傷は知つてゐるから、そんなことはしなくていい！みたいなのを表せば、私だつて無理にアシュールの髪をカットしようなんて思わなかつたと思うし。

つまり、このときまではアシュールは私の行動を笑つてゐたわけじゃないのかもしね。

じゃあどうかでアシュールの態度に変化があつたか、つて考えてみると、あつた。

あのときだ。カット後にお母さんが登場したあたり。

お母さんがシャワーの話を持ち出して、慌てた私が下手な言い訳を口にした。

あのとき初めてアシュールの唇の端に笑いを堪えるよつた引き攣りが現れたんじゃなかつたつけ。

うん、そうだ。

それまではどこか私の行動に押され気味だったのに、そのあたりでアシユールが態度を変えた気がする。

あのときには私の奇行の意味に気づいて、笑い出しちゃうになつたのかもしれない。

アシユールは察しがいい方だと思つ。

私が朝、アシユールがお風呂へ入ろうとしているところを邪魔したことと、カット後お母さんがアシユールに『シャワーを浴びるといいわ』と言つたことに私が変に反応したこととを合わせれば、私がアシユールがお風呂へ行くのを阻止したいのだと気づいてもおかしくない。

うん、たぶんきっと、……確實にそうだ。

お風呂に入らせないようにしてることと、その直前である夜中の出来事の記憶を結びつければ、どうしてお風呂に入つて欲しくないのかは割と簡単に導き出せる答えだよね。

……自分で言つて自分の行動の単純さに呆れる。
でもアシユールに記憶があるなんてこれっぽっちも思つていなかつたんだから、これは仕方の無いことだ。私は悪くない。

私は、悪くない。

とにかく、あのとき初めてアシユールは私の行動に協力的になつたのは確か。

順を追えば、アシユールが私のおかしな行動の理由を知つたのがお母さんが出現したときだとして、じゃあアシユールがその時点で私をからかおうと思つたのか、つてことだけど。

落ち着いて考えてみるとそれも違うような気がしてくる。

洗髪のために椅子やら何やらを準備しているときも実際に頭を洗い始めてからも、アシユールの態度は別にそれまでと特別変わつたようには見えなかつた。

なんとなくそれまでの怪訝そうな雰囲気は払拭されて晴れやかな

感じになつた氣はしたけど、だからといって「ニヤニヤと嫌な笑い方をすることもなかつたし。

洗い終わつてからだつて、さつぱりした顔をしているだけだつた。次はどうするつもりだ、みたいな期待に満ちた視線なんて感じなかつたし、ただ髪を拭いているだけで自分からお風呂に入る素振りを見せて私をからかつてやろう、なんてこともする気配はなかつた。

あ、そういえば、何か恨みがましい目で睨まれたつけ？ でもあれは意味がわからなかつたから置いておこう。

とにかく、私が洗面所にそのまま置き去りにしたときだつて私の勢いに押されてポカンとしていたくらいだ。

こうして考えしていくと、やつぱり客間での一件以外、アシユールは私をわらいものにしていたわけじゃないのかも知れない、と思えてくる。

昨日ぶち切れてしまつたとき私は、アシユールが最初からずっと私の馬鹿な行動の理由を把握しながら私がどこまで可笑しな行動をとるのか見て面白がるために大人しくしていだんだと思つていた。洗面所でのことも、お母さんをかわしてくれたことも、身体を素直に拭かせたことも。

身体を触られたことに加えて、それまでずっと従順な振りをしながらその実心の中で私を笑つていたのかと思つてすごく腹が立つたし、趣味が悪いとも思つた。

実際、身体を拭いているときアシユールは明らかに笑いを堪えていたから、確信的にそう思い込んでたんだよね。

でも、違つたんだ。

アシユールは洗面所でも客間の前でも、一人慌てる私を不思議がりながらも普通に接していた。

髪を切ると言い出したときは、不安がりつつ押し切る私を諦めの気持ちで受け入れていたような気がするし、カット後は出来上がりを気に入つて素直に喜んでいたと思う。

洗髪をしてこるとともに気持ち良むやうにしていた。そこで嘘はなかつたと思う。

だつたら何を切つ掛けにアシユールが笑いを堪えきれなくなつたのかと言えば、

……結局原因は私、なんだろつなあ……。

という考えに行き着いてしまう。

身体を拭いているとき、私は上手くやつていてるつもりだつたけど、アシユールからしてみれば横を向けば慌てて噛み痕を隠すし、背中を拭き始めたかと思えばあからさまに爪痕を避けて拭く、なんていふ行動をとる私は阿呆みたいに面白かつたに違ひない。だつて全部覚えているアシユールからすれば、全然隠せてないんだもんね。むしろあからさま過ぎて、もう我慢なんて出来なかつたに違ひない。

それまでは私の奇行の目的に気づいても、まあ好きにさせてやろう、くらうに思つていたのに、あまりに下手な隠し方をするから、黙つていようと思つたアシユールも限界だつたのかも。

ただ、アシユールが全部覚えてるつて知つてたら、私だつてあんなことしなかつた。

今にして思えば、私だつてああしてるのが自分じゃなかつたら、私がアシユールの立場だつたら、笑つてしまつていたと思う。

誰だつて非の無いことを必死に隠そうとしてどんどん墓穴を掘つていつている人間を見たら、笑うつもりがなくとも笑つちゃうよね。冷静に思い返してみて、そう認めることができた。

恥ずかしいけど。

物凄く、恥ずかしい結論だけどもねーーー！

三十一夏 思考はじめぐつ（後書き）

頭に血が上つて思い込んでいた状況が、冷静になつてみて少しづつ把握できてきたようです。

三十二章 意地つ張りの弊害（前書き）

つざつたくて申し訳ないですがもうちょい独白。
最後チラリとあの人の影。

アシユールは、夜中の私の行動を全て覚えていた。

本当なら思いつきり噛み付いたり引っ搔いたりして軽い怪我をさせられたこと、アシユールが怒つても仕方なかつたんじやないかと思う。もしもこれが孝太や壱樹だつたら確実に私に文句を言つてきていたはずだ。

でも、アシユールは全ての記憶を持つていても、翌朝顔を合わせた私に嫌な顔一つして見せなかつた。

それは自分が私を押し潰しそうになつていて記憶があつた所為かもしれないし、単に気にしていなかつただけかもしれない。

どつちかわからなけれど、昨日の朝の段階では傷に関して私を責めようとも笑おうとも思つていなかつたのは確かなんだと思う。

それなのに私があまりに奇怪な行動をとつて、終いには身体まで拭き始めるまでに至つて、おかしくて仕方なくなつてしまつたんだろう。そこまでして隠さなくてもいいのに、つて。

それでアシユールの悪戯心に火がついた。

もともとアシユールだつて大人気ない部分も持ち合わせている人間で、対抗心だつて私に負けず劣らず持つていて。負けず嫌いなヤツだ、つて印象もある。

私があまりに傷の位置から連想されるものを意識し過ぎて、逆に相手の意識のあるうちに服を脱がせて身体を拭くなんていう男にとつては際どい行動をして見せたから、じやあちよつとからかつてやる、あるいは自分がしていることの意味を気づかせてやろう、くらいに思つて私を蹴倒したのかもしれない。今思えば、私の行動も男に勘違ひさせるような要素はあつたように思うから。

加えて、私がつけた傷に対するちょっとした仕返しも含んでいたかもしれないな。

そこまで考えて、昨日のことは私にも十分非があることは理解した。

それでもモヤモヤした気持ちが抜けないのは、私の中でどうしてもアシユールのあのセクハラ行為に納得いかないからなんだと思う。

昨日の出来事で私が何に一番腹が立つたかって考えると、アシユールがからかうためだけに私の身体を触った、っていう一点だったんだと思う。

私を蹴倒して覆い被さるくらいまではいい。

だけど、身体は触っちゃ駄目じやない？

こういう私の考え方って、重いのかな？

別に大したところを触られたわけでもないし冗談だつたし、途中でやめたんだからそれでいいでしょ、って、普通の女の子は思うのかな？

……でも私は嫌だつたんだ。

何より、相手がアシユールだからこそ、嫌だつた気がする。

それは別に私がアシユールを生理的に受け付けないとかなんとかではなくて、アシユールを信用し始めていたから、短い間でも家族として受け入れてもいいんじゃないかと思い始めていたから、余計にショックだつたように思う。

たとえば。

あのとき私が“その気”になつていたら、アシユールが受け入れにしろ拒むにしろ、結果的には少なからず傷ついていたと思う。そうでなくとも、馬鹿にされたと屈辱的な羞恥を感じて怒りが湧

いたのは事実で。

もし私がもつと氣の小さい女の子だったら、あるいは心底から恐怖を感じたかもしれない。

女の子にとっての“そういう”問題はデリケートだ。
アシユールが軽い気持ちでも、冗談で済まされないことだつてある。

相手を傷つける可能性が高い、そういう軽薄な行動をアシユールがとつたことが、私は許せなかつたんだと思う。

他の女性相手にも、アシユールにはあんな無責任な行動はとつて欲しく無いと、勝手かもしれないけどやう思つた。

たとえばそれが明らかに冗談の雰囲気で、お互にそれが通じる者同士ならいいと思う。逆に、本気に転んでも問題がないのなら、それもいいと思う。

でもそりじゃなければ駄目なんだ。

……私はたぶん、そんなにアシユールのことを把握し切れていない。

アシユールからの言葉は理解できないし、だからアシユールが何を考えているかなんてわからない。私が持つアシユールの印象は全て行動や雰囲気から読み取つたものでしかないし、それだつてたつたの三日じゃ明らかに経験不足。

そんな状態で、あの悪戯は受け止めきれない。

つまり、冗談で通じるような相手でも状況でもなかつた、つてことだ。

だから結果的に、私はぶち切れてしまつたんだと思う。
今思い出したつて、少しくらいは腹も立つ。

けど、まあ今回のこととは多分に私が悪かつた部分もある。
それに、相手は他の誰でもなく私だ。

私はそこに妥協点を見つけることにした。

アシユールがあんな行動に出る切っ掛けを作ったのは私、な気が……、しなくもない、よつな……うん。そういうことにしてやらなくもない。そんなわけです。

この三日間の私とアシユールの間には、妙に突き抜けた近さがあったのは事実だし、だからお互いに距離感が曖昧になつていていた気がする。

アシユールの、 男の人のTシャツを脱がして身体を拭ぐなんていう不用意な行動を先にとつたのは、私。

それがなければ、アシユールが無駄に私の、 女の子の身体を触るよつなことはなかつた、と思つ。……そつ信じたい。

あの後、 種明かしをしたときのアシユールの顔を思い出す。

悪戯つぽく笑いながら、何かを期待していた銀河の瞳。

たぶんあれは、いつものように私が怒つて反発して……、アシユールはそういう私の反応を待つていたよつな気がする。

悪気なんて全然なく、遊びたがつてじやれてくる犬みたいなものだつたのかもしれない。

事実、私が怒るなんてこれつぽつちも思つていなかつたみたいに、私が無言で押し退けたときのアシユールの驚いたよつな顔は、心底から想定外とでも言いたげな表情だつた。

結局、結論は『お互い様』だつたのかもしれない。

確かにアシユールのアレはやりすぎだつた。

でも、そこまで持つていつたのは私の意地つ張りでわけのわからぬいプライドの所為だ。

アシユールと私が“ そういう口” をしたかのように思われるこ

とが嫌で、馬鹿みたいにバレたら終わりだと思つていた。

意識し過ぎていて、逆に恥ずかしいことだったと今なら思う。

気づかれないならそれが一番だつたけど、別に無理をしなくとも、口で事情を説明すればそれでよかつたんだよね。

アシユールだつていい年なんだろし（本当の年齢なんて知らなければ）、「酔い潰れて記憶がないなら変に本当かどうか突っ込んできたりしなかつたんじゃないかと思つ。

今考えれば、傷が完治するまでアシユールにお風呂を使わせないわけにはいかないし、隠し通せるようなものでもなかつたんだよね。今さらながらにそのことに気づいて、自分の馬鹿さに落ち込んだ。

……それでも。

そこまで考えて色々なことに気づいても、昨日あれだけ冷たい態度をとつていた手前、私からアシユールに接触するのも躊躇われて、というか勇気が出なくて、結局その日もアシユールには余所余所しい態度を突き通してしまつた。

ずるずる過ごして夕食後、孝太に『なんだか知らないけど、そろそろ許してやれば？ アシユール、かなりヘコんでて可哀相だよ』などと諭されてしまつた。弟に、諭されてしまつた。……弟に！ でもわかってる。日本語を話せないアシユールだから、私から行かなきやいけないのはわかってるけど、今さらどんな顔でアシユールの前に立てばいいのやら。

姉ちゃんにも孝太の真っ直ぐさと素直さが少しでもあればね。

いじけた気持ちでそんなことを思つた。

アシュールと仲違い（のよつなもの）をして三田田。
つまり自分の非も認めて反省をしつつ謝れない一日を過（）した日

（ほんと情けない）の翌日。

私は縁側で思いつきり不貞寝をしていた。

もうなんか、噛み痕やら爪痕を隠そうとしていたよりもドツボな
気がして、起きてるなんて無理！

起きてる分だけ気まずい思いでいるとか、精神的に無理！

そんな子供っぽい考（）えで現実逃避氣味に昼寝をするとか、私つて
どんだけ子供なんでしょうか。

自分に呆れながらも爆睡してどれくらい経（）った頃か、不意に背後の
扇風機の風が遮られた気配がした。

ついで、ふわっと漂う、

ピーチ、臭、……？

微睡みから抜け出せず（）にいる私の鼻に届いたのは、何とも乙女色
な甘い香りだった。

三十二夏 意地つ張りの弊害（後書き）

次話、やつじアシュール登場。

瑞々しく甘い、桃の香りがする。
美味しそうな香り。

あ、涎出そう……。

私は口の中に溜まつてきた唾液を飲み下しながら、寝返りを打つた。

眠くて上手く目が開けられない。

お昼寝は駄目だ。一度寝入ると中々起きられない。私、朝は弱くないのにお昼寝だけは寝起きの悪いんだ。

それでもどうにか朦朧とする意識のまま薄つすりと目を開けた。首振りにしてあつた扇風機の前を遮る影がある。

まあ予想はしていたけど、美味そうな香りを漂わせるのはアシユールだつた。皮を剥いた桃のよつに白いあの腕はアシユール以外にない。……じゅる。

というか、箱ごと置き去りにしていたシート、使つてくれてたのか……。

やつぱり変なところで律儀だなあ、とか思つてしまつ。

扇風機の前でしゃがみ込み、こぢらを見下ろしているらしいアシユールは微動だにせず、ただそこにいる。

私の様子を窺うような気配がある。起こしていいのか、起こしたるべきなのか迷つてゐるみたいだつた。

たぶん、

謝りに、来たんだろうな……。

ぼんやりする頭でもそれはすぐにわかつた。

大半は私が悪いのに。

丸一曰近くも避けてしまつたのに。

日本語喋れないアシユールじやなくて、私が行かなきやいけなかつたのに。

ゆつくりと瞬きをしながら、あまり働かない脳と身体を叱咤する。結局、アシユールの方が私なんかより何倍も大人で、喧嘩なんか何なんだかわからないこの状況でも、言葉だつて自由じやないのに、先に謝りに来てくれた。

お昼寝をしているときの私が脳も態度も色々無防備になることを見計らつて来た感じがするのは、なんとなく引っかかつたけど……。たぶん、孝太あたりがまた入れ知恵したんだろう。

あいつは私が怒ると、怒りが治まりかけた頃のお昼寝タイムを見計らつて謝りに来る。そうすると寝惚けているのも手伝つて、私も素直に孝太を許すし、孝太も面と向かつて謝りにくいこともぼんやりしている私が相手ならすんなり謝れるという寸法だ。

一瞬、アシユールに弱点を知られつてしまつたようで焦りが湧いたけど、それでもアシユールが自分から謝りに来てくれたのを突つ撥ねるつもりはなかつた。

なかなか持ち上がりない臉を必死に押し上げながら、てんてんと目の前の床を叩く。

アシユールが視界の端で小さく首を傾げている。

それでも何度も同じ動作を繰り返すと、アシユールは躊躇いがちにゆつくりと私の前に横になつた。

意図した通り視線の高さが同じになつて満足する。流石に寝転がつたまま謝るのじや格好がつかない。でも相手も横

になつていれば問題ないよね、とか自分に都合よく解釈しておぐ。
けど、あー、眠い……。

必死に意識を保ちつつアシュールを見るけど、ぼやけていてヤツ
がどんな顔をしているのかよくわからなー。

……遠すぎるのか。

そう思つた私はアシュールの胸元を引っ掴み、寝惚けた私が出せる渾身の力で引き寄せた。

「…………」

うん、近くなつた。
でもなんか……やつぱりぼやけて見えない。
というか、視界いっぱいに群青が広がつていいよつな……。
まあいいや、このまま話そつ。

アシュールの表情を確認できないのは、この一日散々考へていたことを口にしようと思つてゐる私には心許無かつたけど、引き寄せても駄目なら仕方ないから諦めた。眠気を我慢することで精一杯だ。

「…………あのや」

「…………」

随分掠れた声が出た。

まあ、寝起きだから仕方ない。……とかまだ起きてないから許して。

「最初は、アシュールがわたしのことずっと……笑つておもしろがつてたんだと思つて、……だから腹が立つたの」

口調がすこくゆつくつになつてしまつてゐるこはづいていたけじじょうもなぐ。

アシユールが根気良くな聞いてくれているだろつと信じて続けることにする。

「なんか変なふんこになつたのも、くせじくて恥ずかしかつたし……」

怒りが湧いた瞬間は、この一つに対する感情が前面に出でていた。でも一晩置いて考えてたらわかつたんだよね。

「だけど、本当にいやだったのは、あしゅ……アシユールが、わたしを押し倒して触つたことだつた」

ああ、これだと誤解を与えそうだなあ……。

実際、掴みっぱなしになつたアシユールの胸元から、アシユールの身体が少し強張つたのが伝わってきた。

ちょっと傷つけちゃつただろつか。

アシユールに触られて気持ち悪かつたとかではないんだけど……。私は必死に微睡みに沈みそうになる頭を回転をせん。少しもごもごしてから、また口を開いた。

「……えーとさ、冗談で、ああこう……ことをしゃべりだめだとおもつ」

「……」

我ながらもひとまつはきはき喋れないもんかとは思つ。しかし眠すぎて……。これはある意味拷問だよ。頑張つてみよ私。

「女の子のからだを……同意なしこそわるのよ、いつかでませくしゃるねや……セクハラつて、言ひの」

「……」

「……男の人にしてたら冗談でも、女の子がいやだとがんじたら、それは犯罪になるんだよ」

言えば、田の前の群青が少し大きくなつた気がした。驚いているのかもしない。アシユールの世界では、やつらのを犯罪とすることはないのかもしないな。

でも。

「私がどうとかじやなく、犯罪といつのを別にして、あしゅには……」

まずい、つまく口が回らなくなつてきたかも。だけどちやんと伝えなくちやいけない。

「あしゅーるにせ、女の子をいたずらに傷つける可能性があることを、してほしくない……」

ああもひ、伝わつてゐんだらうか。

脈絡とか、大丈夫なんだろうか。

こんな真面目な話、本当はきちんと田が覚めているときにはすべきなのもわかつてゐるのに、でも意識がはつきりしてくるときに話すのもどうとなく恥ずかしくて、だからできればこの場で理解してくれたらいいと思つ。

「アシユールはもう身内みたいなものだと、わたしはおもつてゐから……、だから勝手だけど、冗談ですまないかもしないことをアシユが不用意にしたことがショックだつたの……。アシユ……アシユールはちやんと女の子の弱さをわかつてると思ひナビ、女の子に恥をかかせるやつなこともしてほしくないよ……」

「……」

言い終えてホツとしつつ田の前を見ると、今度は群衆がざわつと凝縮した気がする。

何だらうな、よく見えないけど、喜んでる……のかな？
でもそんな要素のある言葉じゃなかつた気がするんだけど……。

それとも渋い顔？

迷惑がつてるとか。

うーん、よく見えない……。

まあ、いいか。悪い反応じゃなことなどを祈る。だつて、眠すぎて目が閉じそう……。

だけどまだまだ言わなくちゃいけない」とはあるから、私はもう一度意識を引つ張り上げる。

素直になれない私に先に歩み寄つてくれたのはアシュールだから、謝罪だけは私がしつかり口にしなくちゃ駄目だよね。

「でもね、わたしも不用意だったから、それに気づかせようともしてくれたんだよね、『ごめんね……』

「……！」

群衆が広がつて、それから少ししてふと口元に風がくる。次いで、ゆつくり鼻先を縦に何がが擦つてこつた。

あれだ。アシュールの鼻、だと思つ。

今私、さり気なく鼻の高さを侮られただよね？

いや頷いてくれたのはわかつたけど、いちいち鼻の高さなんて自慢しなくてもいいのに！ どうせ私の鼻は低いですよ。ムツとしたけど、ここでもまたキレるわけにもいかない。私は眉を寄せつつ続けた。

「あとね、……、あー……、冷たい態度とつて、『ごめんね』

これは一番大人気なかつたというか、丸つきり子供の態度で申し訳なかつたと思う。

できれば忘れてほしいけど、……根に持たれたらどうしようか。つて自業自得か、うん……。甘んじて受けます。

「それと、おととい、朝からばかみたいにまとわりついて、『めん。うつとうしかつたでしょ……？』

今度は私の鼻先を横に掠つていく、アシユールの鼻。

だからいちじち返事の途中で鼻の血を血便しないでよ、またく。
でもそんなことよりまだ私が謝らなくてやいけないことがあるんだよね……。

「……あの、かみ付いたり引っかいたりしたのも、『めんなさい……』

必死に隠そうとしていた事実だけど、もうバレているのはわかっているし、実際ちょっとやり過ぎなくらいに強くしてしまったのも事実だから、謝つておく。

うん、この際、謝れるものは全部謝つて、帳消しにしてもらおう。なんて、都合のいいことを思った。

ああでも、眠気が半端ない……。
もうそろそろ駄目かも……。

そうだ、あれだけは謝つておこう、結構気になっていたんだよね。といふか、今も気になつてゐるし。

「……あとその匂い、全然合つてないのにつかわせへ、……『めん……』

でもおいしそう……。

心の中で思つたはずなんだけど、声に出ていたのか、プッと至近距離で笑われた。……ちょっと睡かかったけど！とか悔し紛れに思つてみる。実際はかかってないけど。

もう限界だ。

もういいかな。

結構ちやんと書いたいことは書えたからいいよね……。

襲いくる睡魔に抵抗できず眠りに落ちる瞬間、鼻先を何か柔らかいものが掠めた気がした。

ここつ、今度は何をぬぐったんだ……？

確かめる余裕もなく、私の意識は夢の中へと沈んでいった。

後書きにオマケ。

【裏小ラウンド、チャリ練!】

「アシユールー！ 腰が引けてるよーっ！」

「…………」

只今、アシユールは自転車の猛特訓中です。
ほんとヤツは負けず嫌いだよね。

元の世界に帰っちゃったら使えない技術（？）なのにね。
アシユールは初めて見る自転車に驚いて、一度乗つて難しいとわかると不満顔で教えて欲しいと言つて来た。もちろん言葉に出したわけじゃないけどね？ 目がモノを言うから、あの人。仕方なく、ほんとーに仕方なく、優しい私はアシユールの自転車練習に付き合つてあげているのだ。

「ひらー！ 簡単に足ついたら進まないでしょーー！」

「…………」

ま、実は結構楽しんできますけど、私。

「真っ直ぐ前見て……何やつてんの！ 余所見しちゃ駄目だつたら
！ ハンドルには体重を掛けないで、手は添えるだけ！」

「…………」

必要以上に声を上げながら、スバルタクスも真っ青なくらい大変厳

しく指導しております、私。

なんか、田の间的鬱憤が解消されるよな。人はこれを八つ当たりといつ。あは。

でも何かこう、いつも隙の無いアシュールが危なつかしく苦戦している様子は眺めていて気分がいい。……性格悪い？ 望むところですよ誰も気にしない問題ない。

「おうおう、しつかり澧ぎなよー？」

「…………」

内心ニヤニヤしながら、表面上は厳めしい顔を作つて指導する。つい口調がおかしくなつてしまつがこちらも全く気にならない。あはは、フラフラしちやつて！ 笑いを堪えるのも大変だつつの。あ。転びそうになつた。ははははは ケホツ…………ははは！

「………… やる氣あるのかー！ そんなんじや歩く人に追い越されると…………」

「…………」

そう言つた途端、私が立つてゐるところから少し先の方まで一人で漕いでいつていたアシュールが、何故か急にぴたりと止つた。おい何しているのだ早く続けたまえよ。私の楽しみを奪う氣か。

訝しく思つていたら、自転車を降りたアシュールがくるりとローランしてこちらに戻つてくる。自転車が玩具のようになると重さんでありません、みたいな感じで翻り、アシュールがそれを乗らずに引っ張つてくる。

諦めたのか？ それとも何処か怪我したとか？ 見たところ派手に転んだりはしてなさそうだつたけど…………。

ちょっとだけ不安になりつつ黙つてアシュールの動向を見守つた。

んん?

……。

あれ。

何か……

……お怒り、

かしら?

私は自転車を引っ張りながら徐々に近づいて来るアシュールが放つ異様な気配を感じた。

アシュールの周りにゅうりと陽炎のような揺らぎが……。

あ。

何か

ちょー嫌な予感。

自転車を引きながらゆっくり近づいて来るアシュール。不覚にも一步後ずさる私。

いや不覚とか言ってないで逃げた方が良くない? ヤバイなんか悪寒が半端無い。

俯き加減のアシュールが不気味すぎる。ヤツの周囲に妙に広いだ空気が流れているよつな……。

だがしかし余計な矜持（ええただの対抗心ですが何か）から簡単に逃げ出すことも出来ず、アシュールがそれなりに近くまで来た頃（まだ十分に距離はあるけどね）に「わっ」と声を掛けた。

「あー、……アシュール？　びつかした？」

だけどアシュールは答えず、そのまま少し進んでから、スッと俯けていた顔を上げた。

「……」

「わあ！」

「怖っ！」

「ちょー笑顔とか、怖っ！－！」

爽やか過ぎて怖いなんてあるんだねっ！－！」

ああでも目が据わってるし……－！」

身の危険を感じた私はひくりと脣の端が引き攣るのを感じ、弾かれたように身を翻した。

「これはあれです逃げるが勝ちといつやつ……－！」

走り出した直後、背後でガシャンと自転車の倒れる音がした。おいおい私の自転車だよそれは壊れるじゃないか！　ってそんなことよりも問題は……。

強まる嫌な予感に振り返ると。

「さあや——！ ちょ、アシユール追いかけて来ないで——っ！！

！」

「フツ——。——？」

アシユールが何か言つたけど何て言つたかさつぱりわからない！ 最初に鼻で笑つたのはわかつた！ だがどうでもいい！ とにかく追いかけてくるな——！！！

必死に走つた私だけど、足が長く、しかも鍛えられてるっぽいアシユールに敵うはずもなく。あえなく撃沈。

「ツ！ ちょ、待つ、ハア、ま、待ツた……！ スト、ツプ！ いち、いち、いちじていしつ！」

観念した私は立ち止まって振り返り、両手を前に翳して、ちょ一笑顔なアシユールを制止する。

私つてば息切れ半端無い。もはや自分が話してゐる言葉が何語かもわかりません。誰か翻訳機、いや酸素！

ぜえはあと肩で息をする私を見つめ、アシユールは一応私の必死の制止に応えて止まつた。

……随分涼しげな顔でいらつしゃいますね。息が上がつてすらいなつてどんなんだよ。むしろ私の体力が底辺的な？類を見ないほど貧弱的な？いやそんな莫迦な。これでも小学生の頃はリレーの……つてどうでもいいわ！

足がガクガクいつている私とは対照的になんとも煌くほどに端麗なアシユールの立ち姿。立つてゐるだけで喧嘩を売れるつて素晴らしい能力ですねそんな無駄な能力捨ててしまえ！ 軽く殺意が湧きつつ今は喧嘩を買う余裕がないので、まあとにかく話し合おうじやないか、気に障つたのなら謝るから、と内心考えながら（喋れないから）

見上げると、

111

目が合つたヤツは一瞬笑みを深くした。たらりとこめかみを伝う汗を感じる間もなく、アシユールはいきなり体勢を沈めたかと思うと、突進するようにして私を抱え、唐突に走り出した。しかもかなりの高速で！　あばあばばば目の前の景色が異常な速さで流れていくー！

「待つ――――ああああ――」

「待つて」と言おうとしたけど叫びに侵食されました。日本語喪失。アシユールは私をお姫様抱っこが崩れたような形 自分の左の肩から右の腰にかけて斜めに私を抱えて（僕抱ぎじやないだけましなのか！？どうなんだ！？）走るアシユール。これで全力疾走とか…う、嘘でしょ——つーつー？

トマトがどうした私ー！

自分で突っ込みつつ、あまりの速さと恐怖でまともにしゃべれない。

二れつて可の嫌が、うせ？ 私が「歩く人こま

たから？ いや、そうだろうね、うん、チヤリなどいらん、走れば速い！的な？ 何それどんな思春回路？ こんなことドキれるなんてなんて心の狭い男っ！

そう思つた瞬間、私の考えが伝わつたのか、ぐんつとアシユールが

スピードを上げた。本気で莫迦でしょこの人————！
揺れる身体と恐怖を抑えるために必死にアシユールの首を締め上げ
る私。いやだつて、落ちそうで怖いんだもん！ 実際は結構安定感
があるけど、でも精神的に不安定だから！！

「と、とまとまと、と、止まれ莫迦————！」

やつと言えた……！

かなり舌が危険なことになりつつ叫ぶと、その必死な声が功を奏し
たのかアシユールは徐々に速度を落として止まつた。
そして私を抱えたまま地面に座り込むと、そのままばつたりと仰向
けに倒れこんだ。

マジで、ありえん……。

腰から下に力が入らず、暫くは立ち上がれそうにない。

どうしてくれるんだよ腰が抜けるとか初めての体験だこのやうー！
アシユールは仰向けになつて、流石に上がつた息を整えている。そ
りやあ人一人を抱えて全力疾走すればね。

アシユールの上に私が乗つかつてている状態なので私の身体がアシユ
ールの呼吸と一緒に上下する。お互いの心臓がどくどくとうるさい。
重労働を強いられている心臓を休憩させてあげたいけど、休ませた
ら死ぬから我慢する。しつかり働いてね私の心臓！
しかしアシユール、……君は何故そんなに顔が満足そうなのか。

もう怒る気力もわからず、私たちは一人して道のど真ん中で暫くの間
ぶつ倒れていたのだつた。

「……なあ、アレ、孝太んとこのがイジンじゃね？」
「お、ホントだ。あの金髪は孝太んとこにほーむすてい來てるヤツ
だ」
「ええ？ デニ……」
「つづーかアレ、何やつてんの？ 倒れてるけど……」
「上にお前の姉ちゃん乗つかつてねえ？」
「！－！」
「具合悪いのかな？」
「いや、起き上がつたぞ。姉ちゃんの方」
「……」
「あ、馬乗りになつた」
「いやアレは騎・j・y……ぐつ」
「お前は沈めばいいよ。……孝太聞いてるかあ？」
「お、おう、聞いてるけど、俺は何も見ていないぞ……」
「「は？」」
「お、俺は先に帰るから！ じゃあなつ」
「あ、おいー」
「……」
「なあ、孝太んちつて反対方向じやね？」
「孝太はジュンジヨウ少年なのよ」
「はあ、まあいいけど。それよりあのガイジン大丈夫かね？」
「首ガクされてるけど」
「よくわかんないけど楽しそうだからいいんじゃない？」

首ガ

「……だな」

「うん」

「とりあえず帰るか」

「うん」

「……孝太は？」

「……」

「知らね

三十五夏 忘れていたけど訪問者

「……」

じーっと背中に視線を感じる。

だがしかし私は振り返らずに負けじと別の意味でじーっとしていった。

今はお昼寝中です。

まだ寝てないけど、気持ち的には寝ています。

「……」

まだ視線を感じる。

だがしかし（略）

いい加減背中に穴が開くかもしないと思つた頃、やっと背後の気配が消えた。

私は深く息を吐き、もぞもぞと身体を動かして本格的に寝る体勢をつくる。

背後からジト目で見つめてきていた正体は分かりきっていた。金髪の異世界人、アシユールだ。

お母さんから買い物を頼まれていたのは聞こえていたから、たぶん私にも付き合わせようとしていたんだろうけど私はそれを寝た振りでやり過ごした。

仲直りしたはずじゃないのか、って？

したよ。仲直り。

ちゃんと謝つたし、アシユールも私の言つたことを受け止め、謝罪も受け入れてくれたと思う。

一日に渡つた気まずい空気は間違いなくあれで払拭された。

私は引き摺るのが嫌な性質だしアシユールもそうだつたようで、お昼寝から目覚めた頃にはお互い普通に接してた。気のせいじゃなければアシユールはご機嫌な様子だつたけど、喧嘩中の私の態度を考えれば当たり前のことだよね。

じゃあどうして今でもアシユールの存在をスルーしているのか、と聞かれれば、学習したから、と答えるほかない。

あの色々と思い出したくない恥ずかしい喧嘩から数日。私はアシユールと少しだけ距離を置いて接している。

あの喧嘩で私はかなり反省したんだ。

アシユールの行動を煽つたのは私で、そしてアシユールが簡単に煽られたというか調子に乗つたのも、私の所為。

会つてから幾日もしていないのにわざびやら川やらの一件で二人の距離感がおかしなことになっていて、会つて間もない他人としての適正な距離というものがわからなくなつていた所為だと気づいたの。

何だかんだとお互いを構いすぎていたと思うし、アシユールの故郷がそうなのかもしれないとヤツがスキンシップ過多なのも特に気にせず、こんなものかと私が受け入れていたのも悪かつたんだよね。だから少し冷静になつて、会つて三・四日の他人同士の接し方について考えてみたのだ。

どう考へても、川で相手を突然突き落とすのはアウト。街から何時間も手を繋いで帰宅もアウト。途中アイスを分け与えたりしたこともあつたけど、あれもアウトだ。

その後も色々アウトのオンパレードで、これが野球なら私はボロ負け状態でした。

わざび事件で崩壊したアシユールと私の間の壁。これをもう一度

建て直す必要があると私は思った。

また同じ間違いを繰り返して気まずい思いをしないよう、今度から適度な距離を保つて必要以上にお互いを構わないようにならう。

それが円滑な人間関係を形成するに違いない。

とか、私もない頭を振り絞つて考えたわけです。アシユールと上手く付き合つていけるように。

なのでこの数日はアシユールが何かに私を引っ張り込もうとするのを三割方スルーしている。

まあ七割ほどスルーを失敗しているんだけど、まあちゅうどいい塩梅なのでは、とも思つのでよしとしている。

そんなわけで、今日も今日とてアシユールが『買い物行こうぜ』オーラを発していたのを鮮やかにスルーしてやつたわけですが。

私は寝ようと思つてゐるのに、何故か妙に居心地の悪さを感じて寝付けないでいた。

夏の熱気の所為だけじゃなくじりじりする。

原因はたぶんアシユールだ。

きっと今のヤツは心持ち重い足取りで玄関に向かつてゐるんだろうなあ、という予想が簡単にできて、それが私の居た堪れなさに繋がつてゐるんだ。

仲直り直後から少し距離を置くことにしていたけど、あれから数日経つて今ではこの行動をもう一度考え直しかけているといつ……。ブレブレですね、私……。

だつてさ、アシユールの行動をスルーすると、その人すごく肩を落とすんだよ！

何でか知らないけど、全身で『がっかり』を表現するんだよ！

嫌がらせ！？

眉尻下げて困惑氣味の銀河が向けられる度に良心の呵責に苛まれるなんて、意味がわからない！

これが適正な距離です。とばかりに私は自分の部屋へ引っ込んだりするなんだけど、喧嘩していたときのように背中をアシユールの視線が追つてくるのがわかつて、何か悪いことをしているみたいなんだよね。

うーん、上手くいかないなあ……。

私は縁側で横になりながら、薄つすらと目を開けて考える。
近すぎるのがまずいんだと思ったんだけど、アシユールにしてみたら私の態度は喧嘩中のときのように余所余所しき感じるんだろうか。

会つて間もない人間同士の丁度いい距離について、一度講釈を垂れた方がいいのかな……。

ガションッ

つづらつづら考えていたら、アシユールが去つたであろう廊下の方から不審な音が聞こえて、意識が浮上した。
びっくりして上体を起こす。

『 つ、 ！？』

何か叫び声？怒鳴り声？みたいのが聞こえる。

台所で水仕事をしているお母さんは気づいていないみたいで、でも気になつた私は仕方なく身体を起こした。

まだ完全に眠つてしまつ前だったから割とスムーズに身体が動く。少し早足で廊下を行くと、まだ玄関のたたきにも降りていらないアシユールの背中が見えた。

ついでにアシュールが手にしたあのくすんだ水色のエコバッグも見えて、あれは本当にアシュールの見た目に合わないから今度どうにかしよう、なんてどうでもいいことが頭を過ぎる。

玄関を前に立ち止まるアシュールを不審に思いながら近づき、背後から顔を出して玄関を見た私は思わず声を上げた。

「……志樹、何してんの？」

三十五夏 忘れていたけど訪問者（後書き）

あの人があつと登場。
アシュールよりもちよつとだけ足の短いあの人です。
笑

三十六花 いつかの再現

「壱樹、何してんの？」

アシユールの背後から玄関を覗くと、壁と玄関戸に手をついてバランスを崩した身体を支える背の高い男 幼馴染の壱樹がいた。物凄く腰が引けていてかなり情けない格好になっているけど、まあ壱樹の情けない姿なんて今さらなので気にしない。二十年近く一緒に過ごしていればちょっと口には出せないような恥ずかしい場面もお互い見てているし知っているものだよね。

とは言いながらも冷めた目を向けてしまうのは仕方ないと思つ。外人見ただけでへっぴり腰とか笑っちゃうつて。ふふ。

いつかの自分をすっかり棚に上げて内心笑いながらアシユールの後ろから顔を出したら、壱樹はハツと我に返つたようにこちらを見た。

……なんだらう、すうへ「うち見るな」と言いたい。

「うち見ないでよ」

あ、言つちやつた。

「へへへ！」

壱樹は暫く口をパクパクした後、体勢を立て直して慌てたように高速で手招いてきた。

うわあ……、この構図、物凄くデジャヴじゃないでしょ？

一週間ほど前、壱樹の場所には私がいて、私の場所には孝太がいたんだった。

あのときの自分を見せられて、ちょっと不快感が……。
あ、でも壱樹の手招きは私のようなアメリカンなやつじゃないよ？ 下から上へじゃなく、上から下へのやつです。純和風な感じのうむ、アメリカンは壱樹にはまだ早いから納得。

一週間前に思考を飛ばしながら壱樹の手首がブンブンしているのを黙つて見ていたら、さらに速さが増した。手首千切れそうだけど大丈夫？

もうちょっと放置しようかと思つたけど、壱樹があまりに必死な形相なので『面倒くさいな』とは思いつつ近づいた。

「 つ、痛いっ！」

私の動きの鈍さに焦れたらしに壱樹に、まだ一メートル近く距離があつたのに腕を思いつきり引っ張られた。肩の関節グキッついたよ！

引き寄せられてすぐに肩に腕を回されぎゅうぎゅうと締め付けられてさらに痛い！

なのに悲鳴はどうでもいいとばかりに無視された。こんなところでまで無駄にシンクロしているとか不愉快以外の何ものでもない。壱樹めどうしてくれよ。

「 つおい、むつ、あのイキモノは何だ！？」

火責め水責め土責め肉責めのどれがいいかは選ばせてやつてもいい、と心優しい私が考へていることに気づかず、壱樹はアシユールに背を向ける形で私の耳元に言葉を投げ込んできた。

かなり動搖しているらしく、全然声を潜められてない。これじゃあ密着して耳と口の間に手を添えてる意味が全くないじゃないの。壱樹は内緒話の正しいやり方を小学校から学び直して来るべきだと思つ。

といつかどつでもいいけど、

「壱樹、近い暑い痛い」

思い切り鬱陶しそうに言つてやりました。今は夏だよ、勘弁して！つて、何コレまたしてもデジャヴ。

姉弟と幼馴染は似るものなの？全然嬉しくないけどー。

「おい、いーからとにかくアイツは何者だー？」
「……えー？ 何者だるーなあ？」

今、ちょっとだけ孝太の気持ちがわかつた。
説明とか面倒。そして壱樹のテンションが非常に鬱陶しい。加えて近い暑い痛いで四重苦ー！

「『えー？』っておまつ……おわつー？」

妙な悲鳴が聞こえて急に肩の圧迫感がなくなつた。
四重苦が一気に解消されて驚きながら振り返ると、放置プレイだつたあのお人がなんだか怖い顔で壱樹の腕を掴んで、

「 - - - - - 」

「 いだだだだだー！」

いや、掴むどころか捻り上げておつました。わーお。バイオレンス。

「……で？　この金髪怪力野郎は何者だつて？」

壱樹が不貞腐れ氣味に聞いてくる。

現在地は我が家の中間です。

あの後、男相手だからか容赦ないアシユールをなんとか宥めて壱樹を家の中に招き入れた。

アシユールはこれまたデジヤヴも甚だしく、買い物を中断して一緒に居間に戻っている。

幼馴染である壱樹は家族のよつたものだとはいえ一緒に住んでるわけでもないし、アシユールには買い物に行つてもらつて壱樹に軽く説明するだけでもよかつたんだけど、何故かヤツは残るという意思を曲げなかつた。壱樹と同じでアシユールも壱樹のことが気になるのかな？ 大したやつじやないのにね。

「 - - - - - 」

私が説明する前にアシユールが何か言つた。

もちろん何を言つたかはさっぱりわからない。

しかし何故かアシユールが喧嘩腰に見えるのは……私の気のせい？ 服を行つたときの威圧感が若干洩れでいるのは気のせいじやない気がする。

壱樹も感じたのか、怯むことはなかつたようだけど不機嫌さは増したようで眉間の皺が深くなつた。

壱樹は別に短気じやないはずなんだけど、何故かアシユールへの印象は悪いっぽい。気に入らない、という内心がありありと表情に

正義のさじ加減

……まあ、出会つて数分で腕を捻り上げられて好印象を抱いていたら、それは間違いなくエムの人つてことになつちゃうから、壱樹が喜んでなくてよかつたけど。

ああ、そんなことより紹介と説明をさつさと済ませなきやだつた！

「あー、」こちらはアシユール、アシユール・ヒヤ……なんだっけ

うん、アシユール・ヒヤなんとかさん、です」

お前にま闇を取れなかつたんだろ」

11

だつて、アシユールの名字なんて初日にちよろつと聞いただけだよ？ 覚えられなくて当然だと思う。カタカナ苦手なんだよそれに誰も名字で呼ばないし！

アシエールが言い直してくれたけど、生憎発音がネイティフ過ぎて日本語に変換できなかつた。お父さんたち、どうやって名字を聞き取つたんだ……？

「それで？」
「こんな田舎に留学生とか言ひづら氣か？」

「いや、言わない。アシユールは一週間くらい前に庭に落ちてき

十一

11

「 莫迦言ひつな? 」

……。

なんで疑問形?

三十六花 いつかの再現（後書き）

“肉責め”表記は仕様です。

血縁と腐れ縁は恐ろしいものです。

三十七夏 仔犬が一匹騒いでおります。（前書き）

大変お待たせして申し訳ありませんでした。

更新に間が開いてしまったので、以下、簡易あらすじ。

- ・仲直りしたけど六花がアシユールから距離をおく。
- ・アシユールしょぼーん。
- ・壱樹が無様に帰省。
- ・六花の四重苦をアシユールが救う。容赦なく。
- ・相次ぐデジヤヴの中、アシユールについて説明開始。

こんなところです。
ではどーぞ！

三十七夏 仔犬が一匹騒いであります。

「大体言いたいことはわかつた」

一通りアシユールについて説明すると、壱樹は眉を顰めつつ言った。

その表情はまだ釈然としていない、つて気持ちが露わだつたけど、まあ仕方ない。私だつて始めは信じられなかつたもんね。

もしかしたら壱樹の頭の中では今、『お盆で久しぶりに帰省したら幼馴染の家族が得たいの知れない外国人に洗脳されてた、こりゃあ俺がなんとかしなければ!』とかいう無駄に正義感溢れる考えが浮かんでいるのかも。

玄関先であれだけデジヤヴを引き起こしたんだから、ありえないとは言いきれない。斯く言う私も、最初は“私だけは冷静に”“万ー何かあつたら家族を守らねば”とか、今にして思えば恥ずかしいようなことを考えていたものだ。

口ではわかつた、と言つたものの、壱樹は腕を組み、渋い顔で私とアシユールを交互に見ながら、何か考え込んでしまつた。

壱樹の目がアシユールのところで止まると、一瞬品定めするように眇められる。

そしてまた私を見て、何かを訴えるように片眉が上がつたりする。

.....。

なんだろうな、この構図。

冷静に考えるとすつごく微妙じやない?

一見したら、突然外国人のカレシを連れて來た娘と明らかに認め

ていない父、みたいな。勘弁してください。

内心嘆息している私の一方でアシユールはといえば、説明しているときからずっと、じことなくつまらなさそうな顔をして私の隣に座っている。自分に關することだということだ。

今もちらりと横目でアシユールを見れば、ヤツの視線は壱樹の顔から少しだけずれているのがわかつた。

私が帰省直後にお父さんから説明を受けていたときはキリッとしていたというか、姿勢を正して真摯な態度をとつていたのに、今は集中していない、つていうのがなんとなくだけ伝わってくる。

いやすげくわかりづらい違ひなんだけどね？

姿勢自体は今だつてド突きたくなるくらい奇麗だし表情も引き締まつているように見えるんだけど……、何ていうの？ 身が入つていないつていうの？ 心ここにあらず？ もしくは田がうつろ？
……そこまではいかないか。

うーん……、あ！

そうだ、聞いてる振り、つて言えば一番近いかな？

真面目な顔してとりあえず座つてるだけ、つて感じ。

下手をしたら、今話し掛けても反応とか返つて来ないんじゃないの、と思つてしまつ。

まあ、アシユールにしたら自分がここに居候することになつた経緯の説明を聞くのは一度田だし、内心では飽き飽きしているのかもしれないけど。

でもや、説明聞くのが嫌ならさつきそのまま買い物に行けばよかつたんだよね。行かせようとした私によくわからない笑顔を寄越して居座つたのはアシユールだつていうのに、結局つまんなそうにするとか何がしたいのか。

そんなことを思いながらじとじとアシユールを見つめていたら、視線に気づいたらしいアシユールがつとこちらを向いて小さく首を傾げた。

私の呆れを含んだ目とアシユールの目が合わさる。

「…………

私の無言から何かを読み取つたらしいアシユールは、ついで軽く目を瞠つた。……何故そこで驚く？

アシユールの驚きのツボが私にはさっぱりわからない。
そういえば一人で街に買い物に行つたときも、アシユールがこんな顔をしたときがあつたな。

うーん……。

まあいいか。

考えたところでアシユールが何を感じて何に驚いているかなんてわからないしね。

『ねえ、今からでも買い物行つたら？』

とにかくアシユールの意識がこちいらに向いたようなので、びっくり顔のままのヤツに向かつて小声で促してみた。

一応ね、気を利かせてあげたんだよ、私なりに。

壱樹は私たちから視線を外しはしたけどまだなんか思案してゐたいだし、顔合わせくらいにはなつただろうから、もう無理にこの場にいなくてもいいかな、って。

私たちにとつては家族みたいな壱樹だけど、言つてもお隣さんであつて一緒に住んでいるわけじゃないし、アシユールにすれば直接関わりのない人、っていう括りだらうから。

あと、出会いのことを考えると、なんとなく壱樹もアシユールもお互にあんまりいい印象は抱いてないんじゃないかな、っていう。うん、つまり、事前に衝突を避けようという事なれば主義を發揮しているわけです、私。純日本人なもので。

「……」

『ただいまーっ、あ!』

アシユールが何か言いかけたとき、玄関から元気な声が聞こえた。うるさい。孝太だ。うるさい。

私が眉を潜めていると、バタバタとけたたましい足音をさせたあと、汗で額に髪を貼り付けた孝太が勢いよく居間の扉を開けた。

「イツキ兄、おかえりっ！」

玄関からの突撃は壱樹の靴を見つけてテンションが上がった所為らしい。

その騒々しさに、まだ何やら考え込んでいた壱樹も思考を中断して“おかえり”の先を越されたのに苦笑しながら振り返った。

「おー孝太、ただいま。んで、おかえり。元気そうだな」

「うん、イツキ兄もな！」

……なんていうか、いつものことながら、壱樹の前での孝太は犬を思わせる。千切れんばかりの尻尾が見えるようだ。その尻尾はきっとくるりとカールしているに違いない。柴犬っぽく。わん。

壱樹は小さい頃にお父さんを事故で亡くして母子家庭の一人っ子だからか、孝太のことを本当の弟みたいに可愛がってきた。孝太が生まれたときなんて、よくうちに入り浸っていたくらいだ。

そのお陰で孝太は絶大な壱樹っ子に育ってしまったわけだ。実の姉を差し置いて。

壱樹が県外の大学へ進学すると決まったときの孝太のしょぼくれ具合は半端なかつた。 私？ 私の進路が決まったときはニヤついてたよ、孝太め。あ。思い出したら腹立つてきた。後で孝太の鉛筆一本残らずへし折つてこようかな。ついでにシャーペンの芯も。

「イッキ兄、あとでサッカー付き合つてよ。」

「たつた今帰つて来たばかりだつていうのに何を言つているんだ。勉強をしなさいよ。」

「いいけど、その前に勉強見てやる。お前来年の春には受験だろ」

壱樹が当然のことを言つたら、孝太は「えーっ！」とか言いながらも嬉しそうな顔をした。何その輝く笑顔。お姉様の帰宅時にそんな顔してましたつけ？ むしろ“おかえり”の言葉もなかつたよね？ ……額に拳を叩き込みたい。

私は孝太の喜びっぷりに目を眇めつつ、盛大に溜息を吐いてから腰を上げた。

この場に漂つていた微妙な空気が壊れたのはある意味、孝太のお陰だ。便乗して解散しようといつ魂胆である。壱樹への説明も終わつていたし、別にいいよね。

ということで、アシユールの腕を引いて買い物に送り出そうとしていたんだけど……、

「あれ？ あ！ イッキ兄、アシユのこと聞いた！？」

田ぞとく私たちに目をとめた孝太が、私の手からアシユールの腕をぶん取つて壱樹にキラキラした目を向けた。さながら血漫のコレクションを飼い主に見せびらかして得意気に胸を張る犬のようだ。

「お、おお……」

飼い主は若干引いているようですがどね。

「そうだ、アッシュも一緒にサッカーやろうよ！ イッキ兄、アッシュってすごいんだよ！ 最初サッカーなんて知らなかつたのに、教えたあつという間に覚えるしドリブルも上手いし！ 決まる軌道が見えてるみたいにシートもゴールに吸い込まれるんだ！ あ、でも、浮き球は取れないから大きいバスは駄目だよ。アッシュに何度『浮き球は胸でトラップするといいよ』って言つても、なんでもか知らないけどアシユールつてば、ボールが上から飛んでもぐい落としちゃうんだよね」

え。何それ面白い。

矢継ぎ早で口を挟めなかつたけど、思わぬところでアシユールの弱点を発見しちゃつた。

思わず孝太の大袈裟な身振りを見ながらニヤついてしまつたら、そんな私に気づいたアシユールに軽く睨まれた。

でも今の私は寛大だよ。だから、今度サッカーしてるとこ見に行くな、つてにつこり笑つてあげたら、アシユールの目が呆れたような目に変わつた。痛い子を見る目とも言つ。でも今の私は寛（略）。

「ああそうだ！ アッシュの服は見た？ こつちに着たときのアッシュの服とかちょーすごいよ！ 剣もあつてね！ 今はアッシュの部屋 あ、アッシュの部屋つて客間なんだけど、そこにあるはずなんだ。

アッシュ、イッキ兄にも見せてあげていい？ 今どこにある？」

「孝太、わかつた、わかつたからちょっと落ち着け」

「もつとも。

大好きな幼馴染のお兄ちゃんが久しぶりに帰つて来たことで孝太は大興奮で、周りは完全に置いてきぼりだ。

アシユールという不可思議とも言える存在が、余計に孝太の興奮度を急上昇させているような気もしたけど、それでも壺樹の制止で孝太はぴたりと口と動きを止めた。飼い主に従順で何より。わん。

「サッカー云々はまあいいんだけどさ。……あー、アシユール・ヒヤなんとかさん? つて、今は客間に泊まってるみたいだけど」

「アシユール・ヒヤカスバラだよ、イッキ兄」

「ああ、うん。ヒヤなんとかさんね」

……ちよつと、同レベルじゃないの。人のこと馬鹿にしておいで。

「俺から一つ提案なんだけど、アシユールさんとやら、今からでもこいつらん家ちじゃなくて俺ん家に移動しないか?」

「えつ」

「…………」

「イッキ兄、なんで?」

…………「もつとも。

三十七夏 仔犬が一匹騒いでおります。（後書き）

季節柄、かなり更新ペースが落ちています。
そこそこ雪国でモチベーションが○○○
でも頑張ります！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8012v/>

異世界からホームステイ？

2012年1月8日23時46分発行